

城 遺 跡

飯田市松尾公民館移転新築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

城 遺 跡

飯田市松尾公民館移転新築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

序

当飯田市の、各地区における社会教育活動の拠点となる、公民館改築事業も、各地区民協力の元、順調に進んでまいりました。松尾地区につきましても、旧支所の北隣に決まり、平成元年度に工事が着手されました。

それに伴い、埋蔵文化財の記録保存を図るべく遺跡発掘調査が行なわれたわけであります。

松尾地区は、歴史資料の豊富な地区でありまして、大小60余基にのぼる古墳、松尾城跡・鳩ヶ嶺八幡宮等々、この地区の文化の高さを現していると思います。

また埋蔵文化財の分布状況は、平成元年度飯田市教育委員会が実施した詳細分布調査によって明地区の天竜川氾濫原を除くほぼ全域に、また各時代にわたって存在する事が確かめられ、その面からも同地区にはいずれの時代にも人々の生活した姿があり、そのことにより環境のよさが示されたといえます。

今回の発掘調査により、弥生時代から古墳時代の始め頃の貴重な資料が発見され、ここに発掘調査報告書の刊行を見たわけであります。この報告書が学会の研究に寄与するとともに地区民の皆様方の歴史を考える一助になれば、幸いです。

終りに、調査実施に当たって種々御協力いただいた、関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成3年3月

飯田市教育委員会

委員長 福島 稔

例 言

- 1 本書は、飯田市松尾公民館移転新築に伴う、松尾『城遺跡』発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は飯田市教育委員会社会教育課が直営事業として実施した。
- 3 本調査は昭和63年度に試掘調査を、平成元年度に本発掘調査を実施し、本報告書刊行のための諸整理作業は、平成2年度に実施した。
- 4 本遺跡の発掘調査にあたり、「JYO」の略号を用い、整理図面類および遺物等すべてに使用した。
- 5 本書は調査員全体で検討の上、佐々木嘉和・小林正春が執筆・編集を行い、小林が総括した。
- 6 本書に掲載した、図面類の、整理・遺物実測は佐々木が行った。なお整理作業実施にあたり、調査員及び整理作業員が補佐した。
- 7 本書に掲載した遺構図中、穴の中に記した数字は、それぞれの深さ（周囲の面からの）を単位cmで表し、エレベーションの水平線に記入した数字は、標高を単位mで表わしている。
- 8 本書に掲載した土器類の内、山茶碗・陶磁器は断面を黒塗りにしてある。又釉薬の端部を矢印で表している。
- 9 本書に関連する出土品及び、諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路「飯田市考古資料館」に保管している。

目次

序

例言

I 経過

1 調査に至るまで	1
2 調査の経過	1
3 調査組織	2

II 遺跡の立地と環境

5

1 自然環境	5
2 歴史環境	5

III 調査結果

7

1 弥生時代

1) 住居址

(1) 5号住居址	7
(2) 6号住居址	8

2) 方形周溝墓

(1) 方形周溝墓 1	9
(2) 方形周溝墓 2	13

2 古墳時代

1) 住居址

(1) 1号住居址	13
(2) 2号住居址	16
(3) 3号住居址	16
(4) 4号住居址	17
(5) 7号住居址	18
(6) 8号住居址	21
(7) 9号住居址	21
(8) 10号住居址	22
(9) 11号住居址	23

2) 土坑

(1) 土坑 3	24
(2) 土坑 5	25

3 中近世	
1) 掘立柱建物址	
(1) 掘立柱建物址 1	25
(2) 掘立柱建物址 2	27
2) 方形竪穴	
(1) 方形竪穴 1	27
3) 小竪穴	
(1) 小竪穴 1	28
4) 溝址	
(1) 溝址 1	29
(2) 溝址 2	30
5) 土坑	
(1) 土坑 1	31
(2) 土坑 2	31
(3) 土坑 4	32
(4) 土坑 6	32
(5) 土坑 7	33
(6) 土坑 8	33
(7) 土坑 9	33
6) 穴等	34
4 遺構外出土遺物	34
IV まとめ	36

挿図目次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	3
挿図 2 調査位置及び周辺図	4
挿図 3 調査区遺構全体図	6
挿図 4 5号住居址	8
挿図 5 6号住居址	9
挿図 6 方形周溝墓 1	10
挿図 7 方形周溝墓 2	11・12
挿図 8 1号住居址	14
挿図 9 2号住居址	15
挿図 10 3号住居址	17
挿図 11 4号住居址	18

插图12	7号住居址	19
插图13	8号住居址	20
插图14	9号住居址	22
插图15	10号住居址·土坑9	23
插图16	11号住居址	24
插图17	土坑3	24
插图18	土坑5	25
插图19	掘立柱建物址1	26
插图20	掘立柱建物址2	27
插图21	方形竖穴1	28
插图22	小竖穴1	28
插图23	沟址1	29
插图24	沟址2	30
插图25	土坑1	31
插图26	土坑2	31
插图27	土坑4	32
插图28	土坑6	32
插图29	土坑7·8	33
插图30	穴等	34

图版目次

第1图	5·6号住居址出土土器	40
第2图	6号住居址·方形周沟墓1出土土器·石器	41
第3图	方形周沟墓1出土土器	42
第4图	方形周沟墓1出土石器	43
第5图	方形周沟墓1出土石器	44
第6图	方形周沟墓1·2出土土器·石器	45
第7图	方形周沟墓2出土石器	46
第8图	方形周沟墓2·1号住居址出土土器·石器	47
第9图	1·2号住居址出土土器·石器	48
第10图	2号住居址出土土器·石器	49
第11图	2·3号住居址出土土器·石器	50
第12图	3号住居址出土土器·石器	51
第13图	4·7号住居址出土土器·石器	52
第14图	7号住居址出土土器·石器	53

第15图	8号住居址出土土器	54
第16图	8・9号住居址出土土器・石器	55
第17图	10・11号住居址・土坑3出土土器・石器	56
第18图	土坑5・方形竖穴1出土土器・石器	57
第19图	小竖穴1・溝址1・土坑2・6出土土器・石器	58
第20图	土坑7・9・遺構外出土土器	59
第21图	遺構外出土土器・石器	60
第22图	遺構外出土石器	61
第23图	遺構外出土石器	62
第24图	遺構外出土石器	63

写真图版目次

图版1	城遺跡遺構分布状態	66
图版2	5・6号住居址	67
图版3	6号住居址・方形周溝墓1	68
图版4	方形周溝墓1・2	69
图版5	1・2号住居址	70
图版6	8・9号住居址	71
图版7	11号住居址・掘立柱建物址・方形竖穴1・土坑6	72
图版8	5・6号住居址・方形周溝墓1出土遺物	73
图版9	1・2号住居址・方形周溝墓2出土遺物	74
图版10	3・4・7・8号住居址出土遺物	75
图版11	9・10・11号住居址・方形竖穴1・小竖穴1・土坑1・2・遺構外出土遺物	76
图版12	遺構外出土遺物	77
图版13	調査・見学会風景	78

Ⅰ 経 過

1 調査に至るまで

飯田市松尾地区公民館の改築計画が昭和60年代に入り活発に論議され、具体的な用地として、現在地に隣接する養鶏場をその用地として決定した。

当該地一帯は、埋蔵文化財包蔵地「城遺跡」の範囲内であり、その取り扱いについて昭和63年9月飯田市教育委員会社会教育課内部及び関連部課等による諸協議を行い一定の方向付けが成された。

その結果は、建設予定地が段丘崖の先端という好条件下に立地しており、各種の遺構・遺物が包蔵されている可能性があり、事前に試掘調査を行ない、それに基づき具体的な方途を決定することとなった。

試掘調査の結果、当該地は弥生時代から中世の遺構・遺物が包蔵されていると判断され、関係者協議の上、平成元年度に発掘調査を行い記録保存として後世に伝えることとなった。

2 調査の経過

試掘調査は、昭和63年10月17日より21日まで、鶏舎と鶏舎の間にトレンチ4本を設定し行なった。トレンチは重機で表土剥ぎ後、人力により遺構・遺物の存否を確認した。遺構は2本のトレンチで4ヶ所程確認した。遺物の量は少ないが、すべてのトレンチから出土し、用地のほぼ全域に遺跡範囲が広がるものと判断した。

本発掘調査は鶏舎が撤去された、平成元年4月4日から開始した。まず重機による表土剥ぎ作業から着手し、用地の形状等から全体を調査することができず、まず北側半分について行なった。

調査区のグリットは、買収した用地の東南側境界線に沿って、5×5mで設定し調査を実施した。重機による表土剥ぎ作業の後、人力での作業として地表下0.3～1mのローム層と砂礫層上面で遺構の検出を行ない、弥生時代後期～中近世の各種遺構を確認した。続いて各遺構掘下げ調査・写真撮影・実測作業等を行なった。5月31日に現地での全作業を終了した。

その間、5月21日には松尾公民館主催による、遺跡見学会が開かれ100余名の参加者があった。

現地での調査結果を受け、平成2年度に飯田市考古資料館において、現地で記録した図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記・復元作業・遺物の実測・写真撮影等の諸整理作業を行ない、報告書を作成した。

3 調査組織

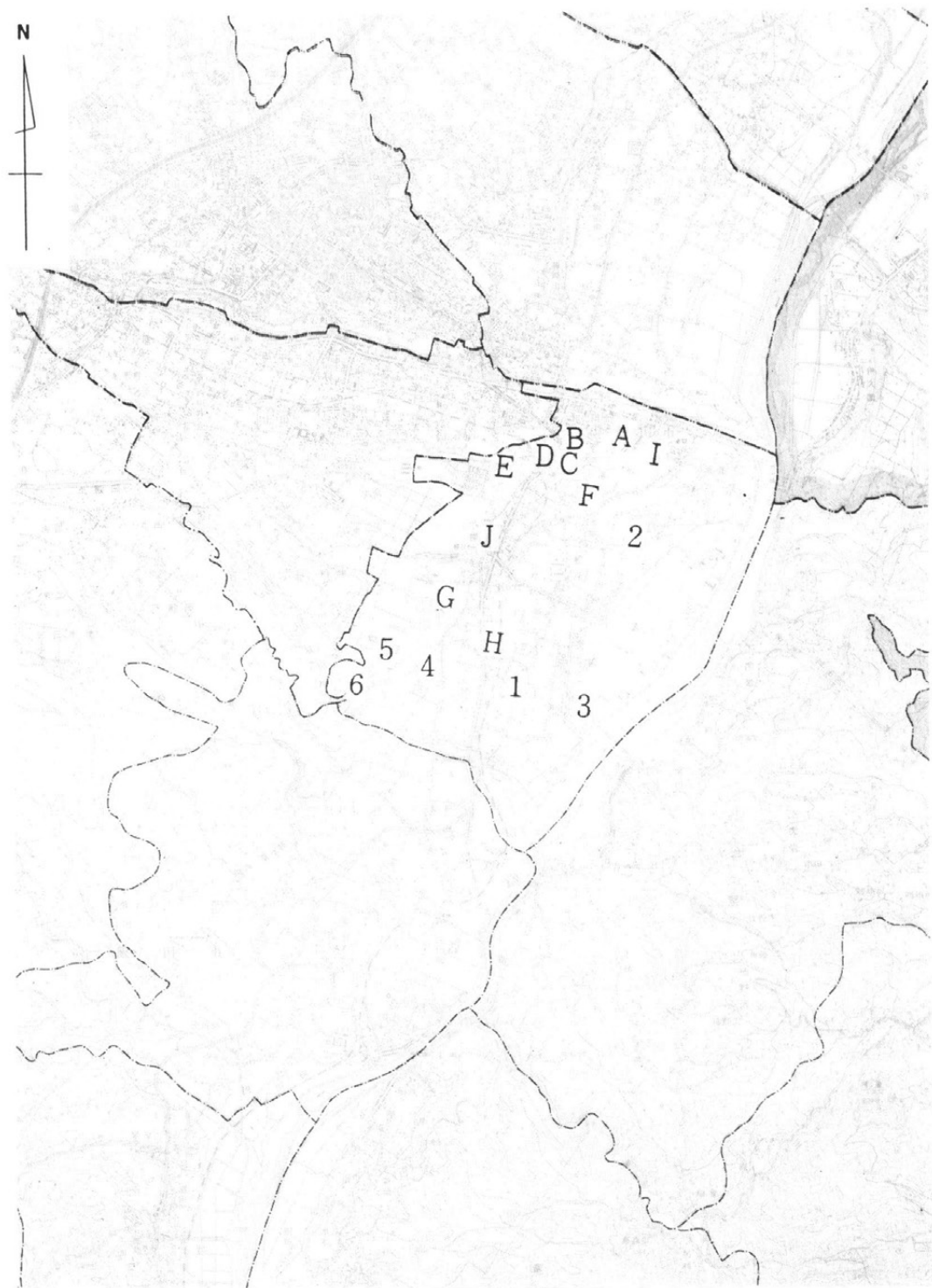
(1)調査担当者 小林 正春

調査員 佐々木嘉和 佐合 英治 吉川 豊 馬場 保之 功力 司
作業員 一瀬友一 今村春一 内山トメ 大島利男 木下 傳 木下当一
窪田多久三 高木義治 高橋寛治 棚田秀子 中平隆男 森 章
萩原和一 平沢今朝光 細田七郎 松島卓夫 牧内佳子 宮下則子
整理作業員 池田幸子 唐沢古千代 川上みはる 木下玲子 櫛原勝子 小平不二子
田中恵子 丹羽由美 牧内八代 牧内とし子 松本恭子 宮内真理子
吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まつ美 林勢紀子 森 信子 南井規子
福沢育子 福沢幸子 樋本宣子 佐々木真奈美

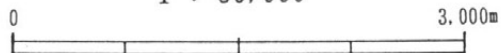
(2)事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村 隆彦（社会教育課長）
中井 洋一（社会教育課文化係長）
小林 正春（社会教育課文化係）
吉川 豊（ ” ）
馬場 保之（ ” ）
功力 司（ ” 平成元年度）
土屋 敏美（ ” ” ）
篠田 恵（ ” 平成2年度）

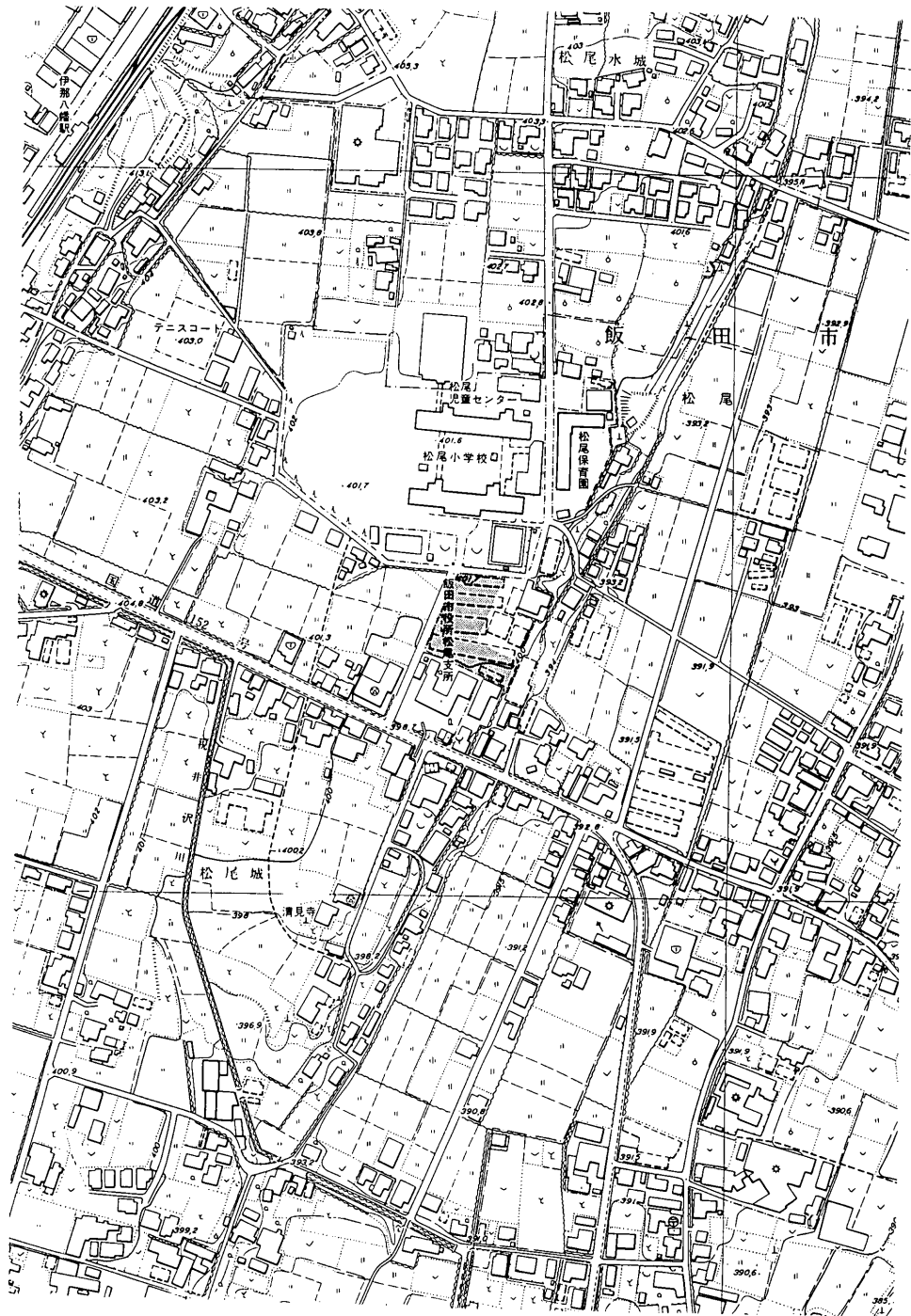


1 : 50,000



- 前方後円墳 A.羽場獅子塚 B.姫塚 C.上溝天神塚 D.おかん塚 E.御射山獅子塚
 円墳 F.水佐代獅子塚 G.狐塚(代田山2号墳) H.代田獅子塚
 新発見古墳 I.妙前大塚 J.八幡町古墳
 主要遺跡(調査がされている) 1.城遺跡 2.寺所遺跡 3.清水遺跡 4.毛賀御射山遺跡
 5.南ノ原遺跡 6.松尾城址

挿図1 調査遺跡及び周辺主要遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

II 遺跡の環境

1、自然環境

飯田市松尾地区は、飯田市街地の南西約2～5kmに位置し、天竜川に沿った面積6.2平方kmの地区である。

北東は飯田松川をはさんで、下伊那郡上郷町、東南は天竜川をはさんで、下伊那郡喬木村と下久堅地区、南西は竜丘地区、北西は鼎地区にそれぞれ接している。松尾地区は飯田市のほぼ中央に位置し、天竜川の氾濫原を最下段に、段丘崖4～5段を数えて最高位の八幡原の段丘になり、最下段との標高差は100m弱を測る。

城遺跡の調査地点は、松尾地区のほぼ中央で、小字城の北東端に位置する。城遺跡は比較的広範囲に促えられているが、遺構の分布は段丘面上全体が一律とは考え難く、天竜川側の段丘端部が細長く主体を成すものと思われる。段丘東端部から50m前後の幅で乾燥部分があり、それより西方の高位段丘崖下までは湿地帯になっている。調査地点は段丘端部であり、大半が乾燥部分に当たるが、北西側の一部が湿地にかかっている。地表から0.5～1mで基盤の黄色砂質～砂礫層になっている。ローム層も北東側半分には検出されたが、薄く50cm以下であった。

段丘崖下には連続した湧水があり、背後には生産基盤になる湿地をひかえた遺跡であり、安定した生活環境を推測できるが、今回の調査箇所における遺構の密度は薄い。

2、歴史環境

松尾地区の遺跡を概観すると、天竜川氾濫原及び段丘崖を除いてほぼ全面的に包蔵地であり、古墳の多い事は特筆され、前方後円墳8基と円墳は60余基を数える。また、八幡町の旧道際に会所新築に伴う調査(注1)で現在の屋並の下より石室の下部を検出し、記録の無いまま消滅した古墳が多数存在したことも推測できる。

松尾地区での遺跡発掘調査は少ないが、学術調査により寺所遺跡の一部が昭和43年1月と昭和46年3月に、昭和46年度国の補助事業として妙前大塚(3号)古墳(注2)、工場新築に伴い南ノ原遺跡(注3)・毛賀御射山遺跡(注4)、天竜川護岸工事と国道152号付替に伴い清水遺跡(注5)などが調査報告されている。さらに報告書の発刊が遅れているが、上溝会所新築に伴う調査で上溝天神塚古墳の一部が調査されている。

以上調査された遺跡は少ないが、それぞれ重要な遺構・遺物が発見された。

個々に概観すると、寺所遺跡では、弥生時代中期前葉に位置づく、寺所式土器が発掘され南信地方の標式土器になっている。

妙前大塚古墳からは、県宝に指定された「眉庇付冑」が出土し当地域で最も古い古墳の一つとされる。

南ノ原遺跡では、中世小笠原氏の重臣の居館址と見られる屋敷跡・堀・柵列が調査され、完形の茶臼・天目茶碗等が出土している。

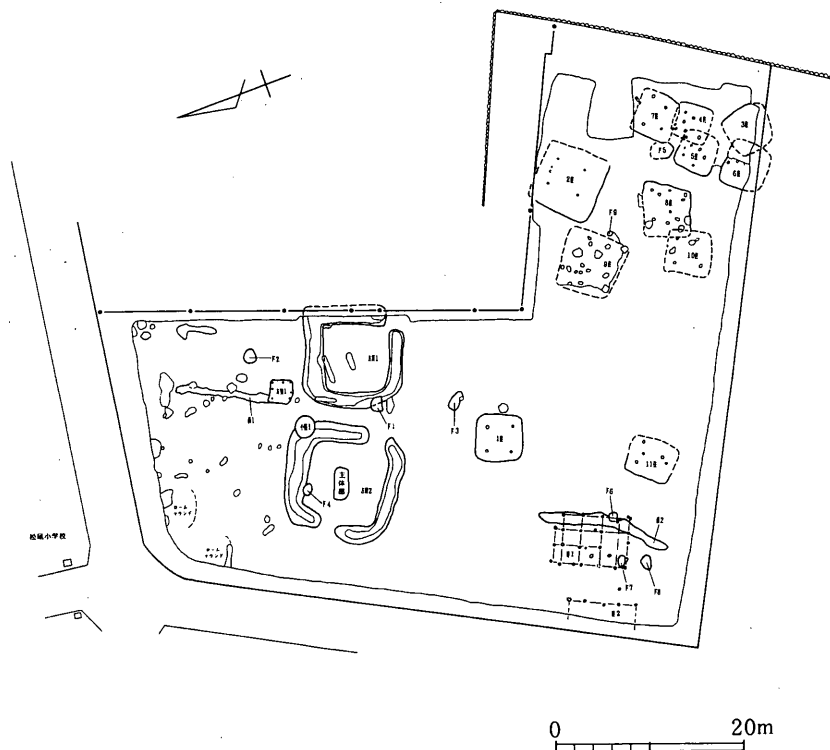
毛賀御射山遺跡からは、平安時代の布目瓦の出土があり古代寺院の存在が推測できる。

天竜川畔の清水遺跡は、弥生時代の遺構・遺物から中世の遺物まで出土しており、飯田地方の最低位に立地する複合遺跡である。

以上が発掘調査で確認された歴史であるが、中世に入ると諸記録等残っている。鳩ヶ嶺八幡宮の神像銘には建仁3年(1203)より造立をはじめたとあり、重要文化財となっている。南ノ原の南端部に築かれた松尾城は、北条氏滅亡後信濃守護職となった小笠原氏の居城で毛賀沢川を隔てた鈴岡城との親属間の確執は史実に明らかである。

歴史的に松尾地区を概観したが、平坦で肥沃な地であり、原始より古代そして現代まで大いに栄えた地といえることができる。

こうした歴史背景のある松尾地区内における城遺跡は、地区のほぼ中央にあり、字名の示す通り城(館)に関する地域で、松尾城の小笠原氏の居館(注6)があった所といわれている。今回の調査でも、中世の遺構・遺物が出土しており、松尾地区の中心であったと推測できる。



挿図3 調査区遺構全体図

Ⅲ 調査結果

調査において確認された遺構は、次の通りである。

竪穴式住居址	11軒
掘立柱建物址	2棟
方形竪穴	1基
小竪穴	1基
方形周溝墓	2基
溝	2本
土坑	9基

遺構は用地内全体に散在していたが、住居址のみから見ると、南隅の段丘崖際に集中しており、用地外に分布する住居址の様相も推測できる。北西道路側は湿地が始まっており、基盤は砂礫層であった。

1 弥生時代

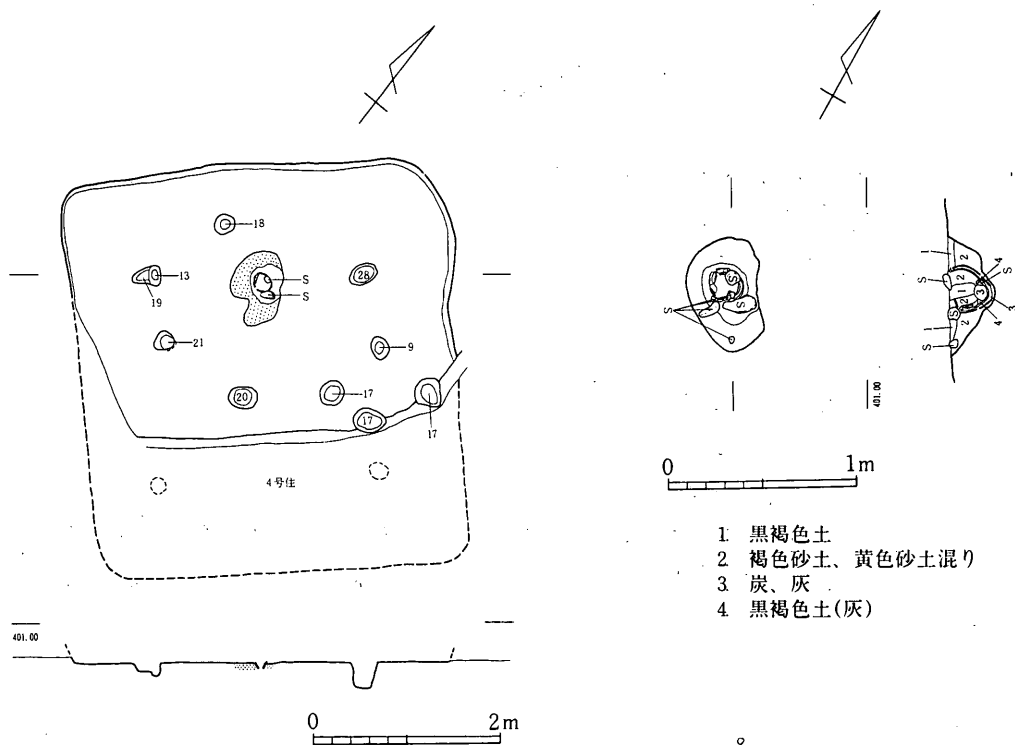
1) 住居址

①5号住居址 (挿図4. 第1図)

用地内南隅近くに検出したが、南東側を4号住居址に切られ、半分強の調査であった。(4.2) × 4 m、隅丸方形竪穴住居址で、主軸はN46° Wを測る。覆土は黄褐色土の一層で、検出面から床まで10cm以下とわずかな残りであった。壁の状態は比較的良かったが、やや掘り過ぎたと思われる部分もある。床面はタタキ状に堅く非常に良好であった。支柱穴は北西側の2本を確認したが、すぐに基盤の土になってしまい浅い。炉は支柱穴間中央にあって、中央側に炉縁石を持つ土器埋設炉である。埋設された甕は、2個体が重なって入っていたが、中間に炭・灰が入っており使用途中で内側へ入れたものである。焼土は少ないが主として甕の周囲に広がっていた。

遺物は炉に使われていた甕2個体1図1・2と、他の小片がわずかである。甕2は外側に使われていたもので、波状文と斜走短線文を施しており、内側の甕1は、波状文のみを施す。

時期は後期中島式期である。

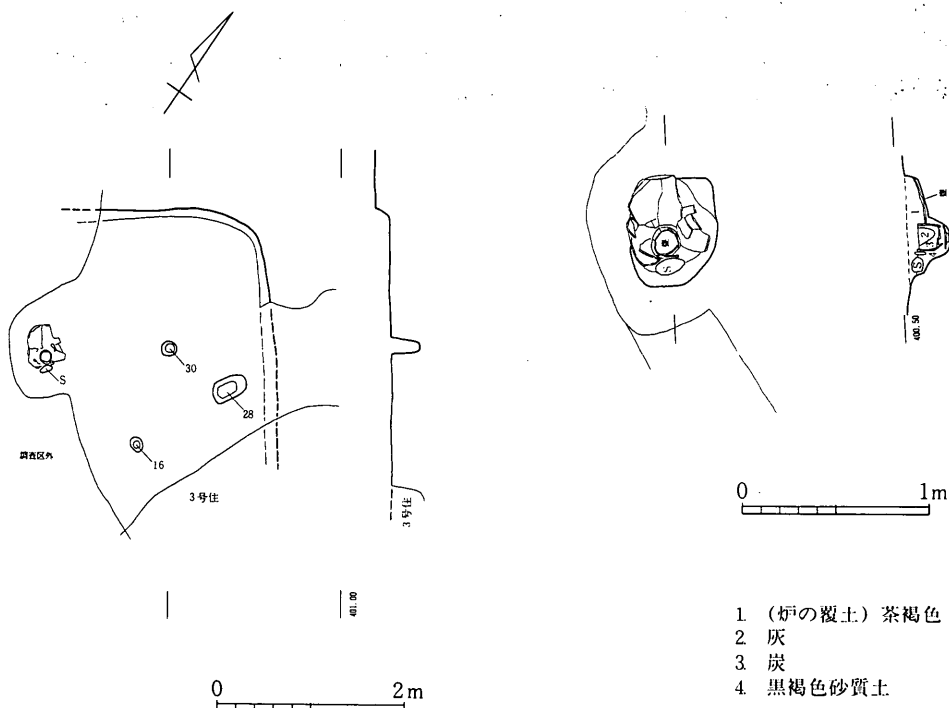


挿図4 JYO 5号住居址

②6号住居址 (挿図5. 第1・2図)

用地内南隅近く、5号住居址の西側に検出したが、用地外にかかり3号住居址に切られ、わずかに調査できただけである。規模は推定4.6mの隅丸方形竪穴住居址であり、主軸はN38°Wを測る。覆土は黄褐色土の一層で、検出面から床まで10cm余と浅い。調査した部分の壁の状態は良く、床面もタタキ状で堅く、非常に良好であった。支柱穴は北隅の1本を確認し、深さは30cmである。炉は土器埋設炉で炉縁石を持つが、埋設した甕の回りに甕・壺片が敷いてあり、特殊な形態である。埋設した甕の底は抜かれており、下に壺の底部が入っていた。焼土はごくわずかであり、甕の内部には炭・灰が入っていた。

遺物は炉に使われていた甕1図3・4. 壺2図1・2の他は小片がわずかである。甕3は敷かれていたもので、大形であるが、口縁・底部を欠く。波状文は左から右へ、斜走短線は左下がりで施文されている。甕4は埋設されていた甕で、口縁と底部を欠く。打製石斧2本が覆土中から出土しており、硬砂岩製4と緑泥岩製5である。



挿図5 JYO 6号住居址

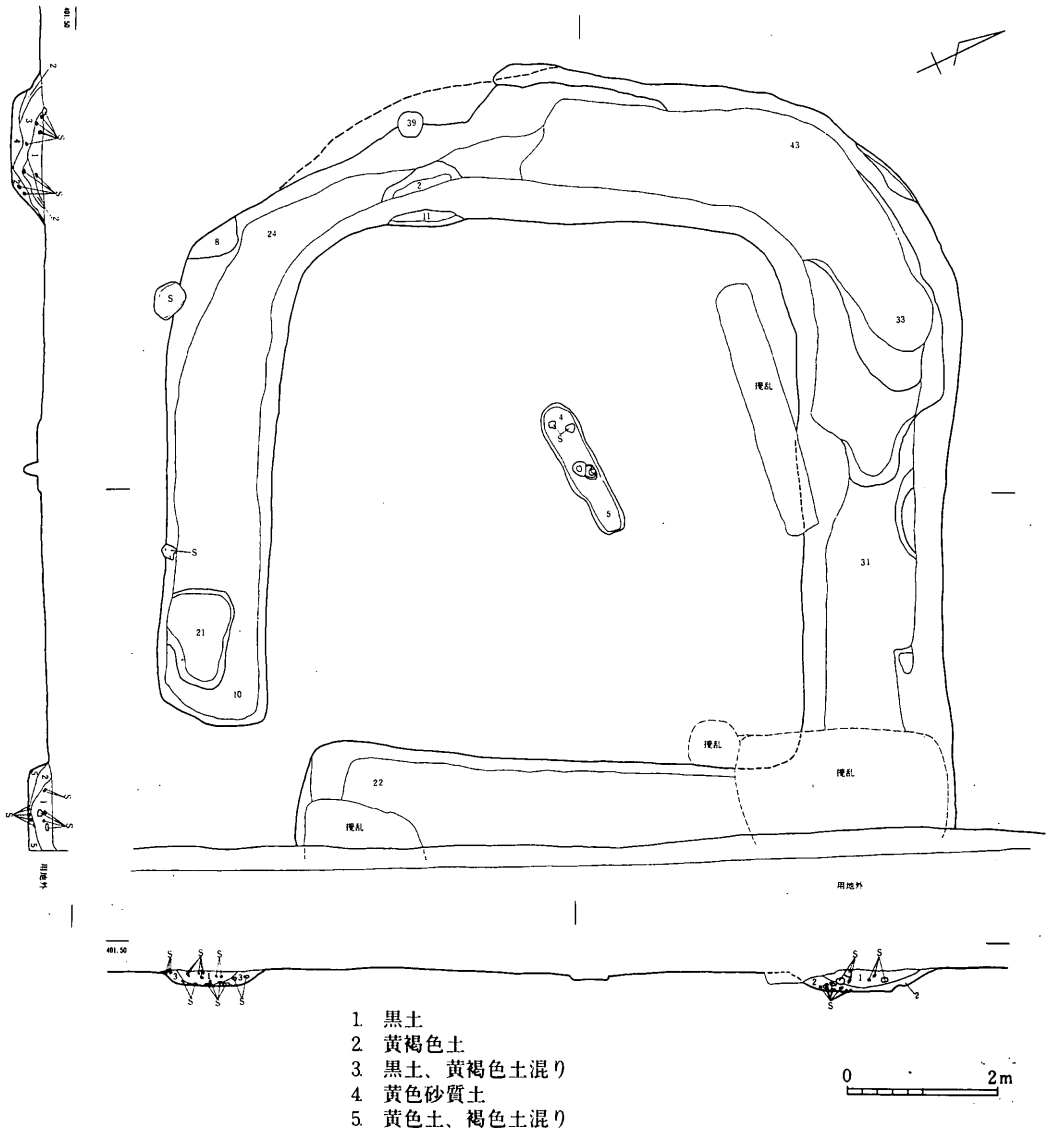
2) 方形周溝墓

① 方形周溝墓 1 (挿図6. 第2・3・4・5・6図)

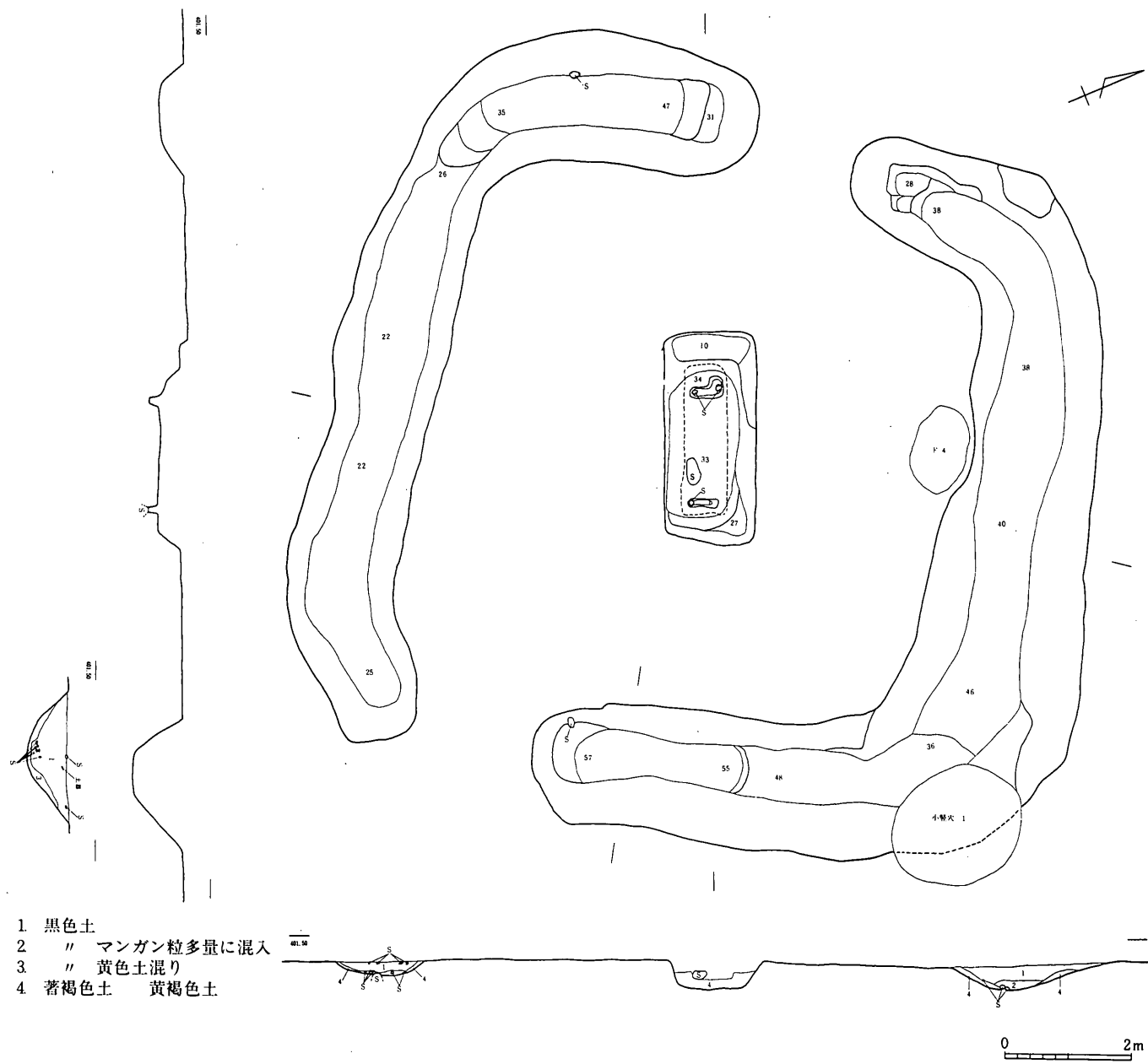
調査区ほぼ中央に検出し、わずか用地外にかかり、土坑1・現代の攪乱に切られる。周溝内には検出時に自然礫が方形に入っており、掘り方も確認できた。規模は約10mの隅丸方形であり、南隅は土橋となっている。主軸方向はN64°Wを測るが、中央の墓壙状の凹みは東西方向である。周溝の覆土はほぼ4層に分かれ、1・2層に自然礫と遺物が混入していた。周溝は全体的に検出面から50~20cmと浅く、緩いU字形の掘り方である。墓壙と推測した凹みからは、遺物の出土は無い。遺構に連続して検出された礫は、遺跡の立地等から、氾濫等による自然堆積によるとは考え難く、人為的なものと判断される。原位置での確認はできなかったが、墳丘部に配された、葺石的な性格が考えられる。

遺物の出土は南西側周溝が主体であり、壺3図1は土橋の近くから細片で出土した。口縁部はほぼ現存し、頸部半分胴部 $\frac{1}{3}$ が遺存するが底部を欠く。頸部の施文は、上部の波状文と横線文が浅く雑であり、稻科の茎で施文したものであろう。下部の波状文・ $\frac{1}{4}$ 円弧文は櫛状工具で施文し

ている。胴部の一部に篋磨き状の痕跡が網目状に認められる。使用時には籠を編み着けていた事が推測される。壺2図18甕2図8・9・13~17 台付甕の台10埴12高坏11などは、甕の底8以外小片である。周溝から出土した石器は打製石斧がほとんどであるが、磨製石斧5図2横刃型石器



挿図6 JYO 方形周溝墓1



挿図7 JYO 方形周溝墓2

6 図 2 砥石 5 図 1 も混じっている。周溝内の自然礫に混入していたものであり、すべて該期の石器とは云えない。

時期は後期中島式期である。

② 方形周溝墓 2 (挿図 7. 第 6・7・8)

調査区ほぼ中央、方形周溝墓 1 の北西に検出し、小竪穴 1・土坑 4 に切られる。12×13m の不整隅丸方形で、土橋を 2カ所に持っている。主軸方向は N54° W で、墓壙は N67° W を測る。中央の墓壙は 3.2×1.4m の隅丸長方形であり、中央の棺部分の土色は異なっていた。掘り方底部棺位置両端部と判断される 2ヶ所に長方形の掘り込みがあり、小口板を立てた棺構造が推測される。墓壙から遺物の出土は無いが、大きな自然礫と小さな礫 8 図 3 が入っていた。周溝の幅は 2m 前後で深さは 50~30cm あり、緩い U 字形の掘り方である。覆土は 3層が確認でき、主体は黒色土である。土橋は基盤の黄色土を掘り残している。

遺物は少なく甕 6 図 3~8 壺 9 石器 7・8 であり、周溝全体の検出面から 20~4cm 下で出土した。甕 6 図の現存部は少ないが、大形で推定胴部直径は 35cm 前後である。甕の施文部片 4・5 2 点も波状文と斜走単線を施している。底部片 6・7・8 は器面が筥磨きされ 6 は 2 次焼成を受けている。壺 9 は底部のみの出土である。石器は打製石斧 7 図 1~9 敲打器 8 図 1・2 砥石 7 図 10 石鏃 8 図 4 が出土した。

時期は後期中島式期である。

2 古墳時代

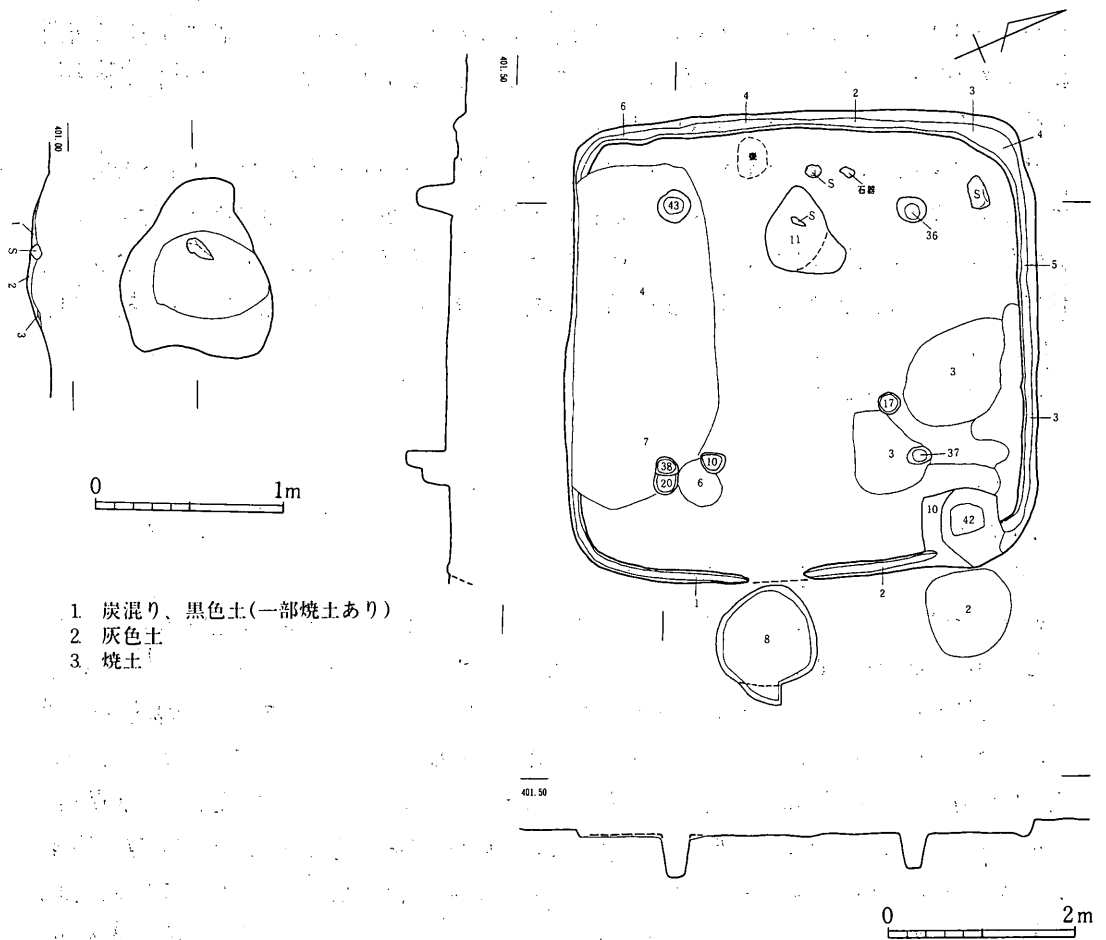
1) 住居址

① 1号住居址 (挿図 8. 第 8・9 図)

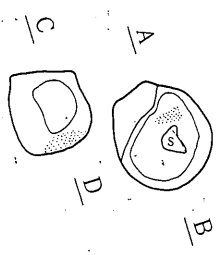
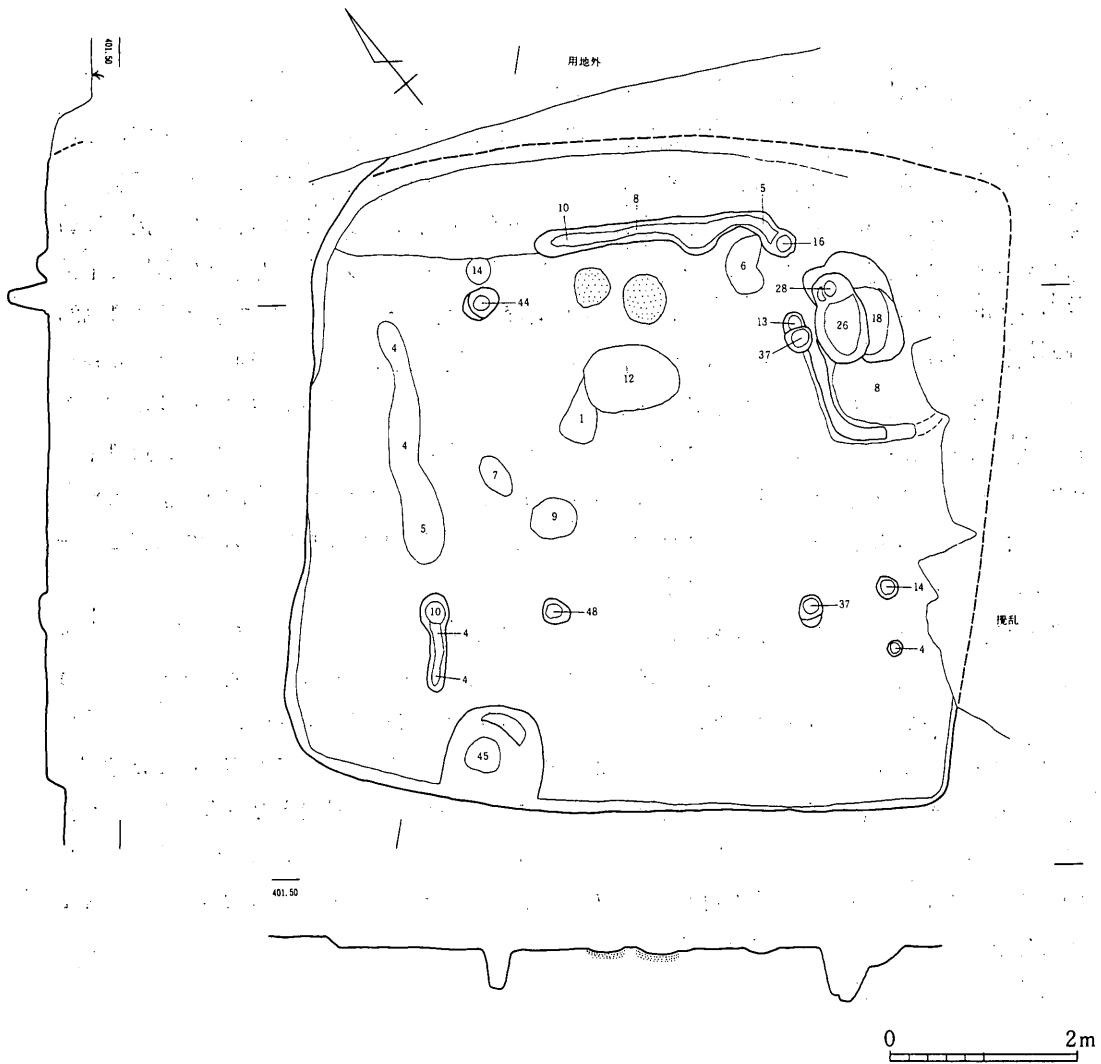
調査区ほぼ中央に検出した。試掘 2 トレンチにかかっているが、試掘時には遺物の出土がなく、褐色土の自然堆積と推測し、床の一部を重機で削ってしまった。4.9×5m の隅丸方形竪穴住居址で、主軸方向は、N67° W を測る。検出面から床まで 10cm 前後とわずかで、覆土は基盤の黄色土よりわずかに褐色が強いただけであった。壁は一部確認できない所もあり、壁高 10cm 以下である。壁下に周溝が掘られ、周溝により住居址の範囲を確定した部分もある。全周していたと推測されるが、深さは 5cm 以下と浅い。床面は堅く良好で、緩い凹凸があり北東壁下には、わずかではあるがベルト状に高い部分もある。主柱穴は 4 本で深さ 40~30cm のほぼ円形の掘り方である。南隅の掘り方は 2 本検出したが、立て替えか抜き穴であろう。炉は北西主柱穴にあり、深さ 10cm の凹みで、焼土が少量散布していた。地床炉と推測したが、焼土の状態から土器埋設炉の、土器を抜き取った跡かもしれない。東隅に深さ 40cm 余の穴があり、壁の延長で掘り込まれ、北西側の床面はやや高く土手状になっていた。覆土上面は貼り床になっており、土層観察では中間に炭層が薄く入っていた。埋めもどしたものと推測され、入り口部の施設の可能性もある。

遺物はわずかで、床面密着かわずか浮いて出土したもののみである。甕5は炉の西側で周溝との間につぶれた状態で出土し、底部を欠くが実測部分は残っていた。器壁は薄く胴部はほぼ球形で2次焼成を受けている。小型丸底6は、外反する口縁部で胴部はやや小さく、胎土・焼成共に非常に良好である。鉢7は現存部わずかであるが、器壁薄く口縁部が曲折しており、調整は横なでが主で雑に磨かれている。甕・埴・鉢共に布留式の流れをひいた土師器である。石器は打製石斧8・9横刃形石器10敲打器9図1・2用途不明の緑泥岩製石器3が出土している。

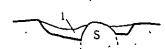
時期は土師器の形態から、古墳時代前期である。



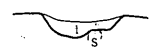
挿図8 JYO 1号住居址



A
401.00



C
401.00



1. 暗褐色土、焼土混り



插图9 JYO 2号住居址
-15-

② 2号住居址 (挿図9. 第9・10・11図)

調査区南隅近くで検出作業中、遺物が比較的多く出土する場所があり、土色も変わっていた。プラン検出に努めたが、基盤は礫まじりの黄色土で覆土にも礫が混じっており、プラン確認ができず中央と推定した位置から掘り下げ調査に入り、床面を追いながら進めたが、現代の攪乱に切られており、その範囲の確定は不明瞭な箇所もある。(7)×7mの隅丸方形竪穴住居址で主軸方向はN46° Eを測る。覆土中には礫が多く、遺物も混入していた。壁の確認できた所は最高20cmであり、不明の部分も約半分ある。床面は砂利混じりで堅く良好であり、南東側へ緩く傾斜している。壁から1m前後内側に周溝状の溝があったが、性格は不明である。主柱穴は4本であるが、西隅の1本がやや位置的にずれている。4本共に柱穴掘り方は小形である。炉は北東側主柱穴間に位置し、2カ所あり、浅い凹みの地床炉である。焼土は少なかった。南西壁に接して検出した穴は、入り口施設と推測され、底部は小さく逆台形である。東隅主柱穴の南側に検出した浅い大きな穴には5cm前後の土手がある。

遺物の出土量は多く、覆土中から全体的に出土したが、完形に近いものはわずかである。器種は甕・台付甕・壺・坏・高坏・器台・石器などである。甕9図4～13は器形に大小があり、4は半分7は底部を欠くが、実測部は現存している。台付甕は台部のみ4個体14～17があるが、胴部で接合するものは無い。壺10図1～8も大小があり、1は口縁部のみであるが実測部はほぼ現存している。器台の17は3孔を持ち、18は曲折部のみであるが大きめの器を載せる器台であろう。11は朱塗のミニチュアであり、ほぼ完形である。石器は打製石斧10図23・11図1～4磨製石斧10図22打製石庖丁11図5・6用途不明の硬砂岩製剥片石器7・8石鏃9と完形の管玉である。管玉は濃緑色を呈しており、精美な優品である。

時期は古墳時代前期である。

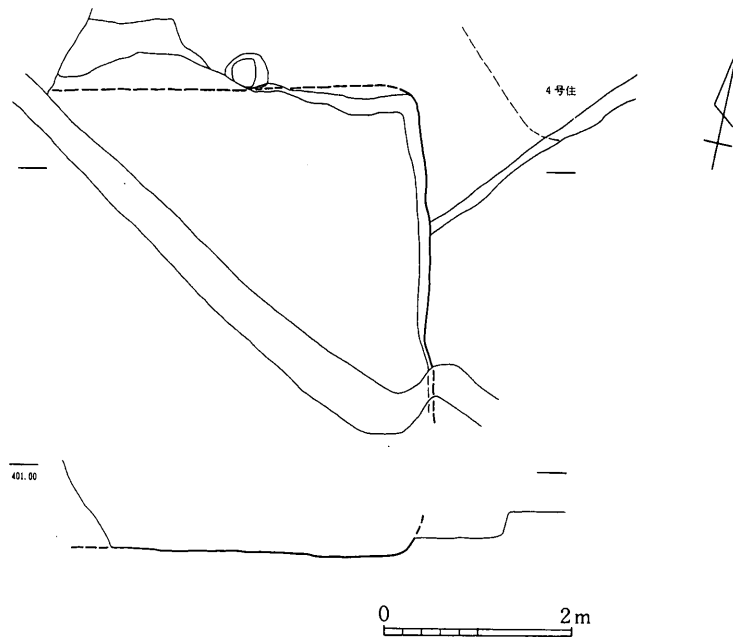
③ 3号住居址 (挿図10. 第11・12)

調査区南隅に検出し、用地外にかかり、6号住居址を切る。段丘崖端石垣から5mの所に、3・4・7号住居址と並んで検出、プラン確認に努めたが、すべて古墳時代前期であり切り合い関係は不明である。規模は4m前後と推測できるが、主軸方向は不明である。覆土は暗褐色土のほぼ一層で大小の礫が混入していた。壁は東側を確認しただけであるが壁高40cmを測り、ほぼ垂直である。床は全面基盤の礫が露出している。柱穴・炉は検出できなかった。

遺物の出土量は比較的多く、用地外の付近から集中して出土した。甕・台付甕・壺・高坏・器台・石器等であるが、完形に近いものは少ない。甕11図11～14台付甕15～18は小片であり15は、S字状口縁をもち器壁薄い。壺12図1～3、1は胴部球形で、口縁部は外湾して外反し、稜を持っている。2は胴部球形で底は凹めたあげ底である。3は朱塗されており、壺であろう。高坏4・5の実測部分は現存しているが全体形は不明である。器台6・7、6はほぼ完形で、3孔である。7は小片であるが4孔を持つ。8は大きな器の台と推測され、暗文風の篋磨きが施されている。

石器は、打製石斧9
～11有肩扇状形石器
12・13が出土してい
る。

時期は土師器の形
態から古墳時代前期
である。



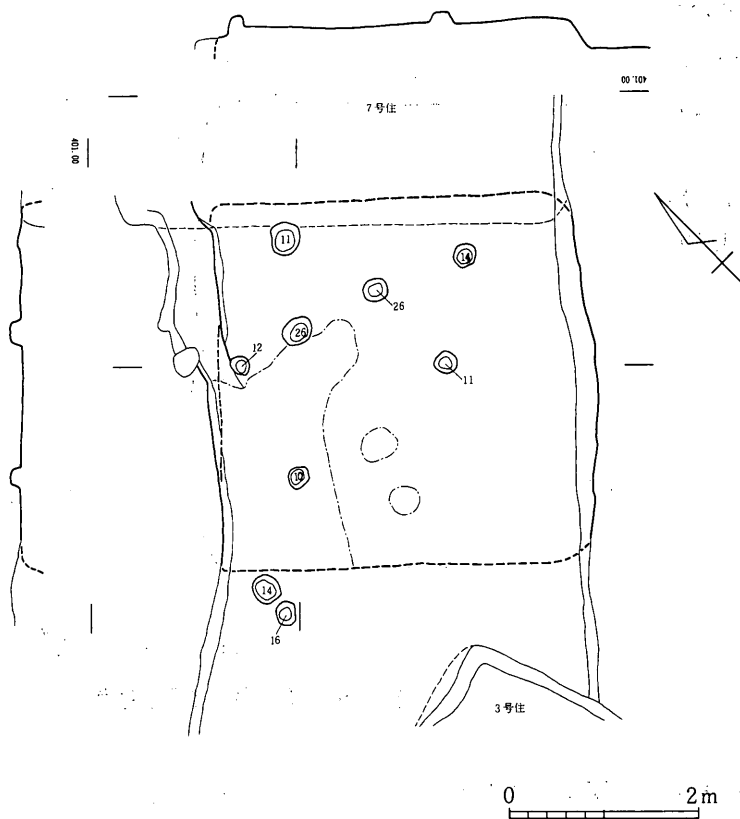
挿図10 JYO 3号住居址

④ 4号住居址 (挿図11. 第13図)

3号住居址の北東に切り合って検出した。推定規模4×(4)mの竪穴住居址であり、7号住居址と切り合っている。覆土は暗褐色土の一層で、大小の礫が混入していた。北西壁・南東壁は確認でき、垂直に近い立上がりである。床には基盤の礫が露出し、一部に貼り床を確認した。主柱穴と推定される穴は、検出できなかった。焼土の検出もなく炉の位置・主軸方向も不明である。

遺物の出土量は少なく、甕・坏・高坏・器台・石器などである。甕1は球形に近い胴部を持ち、底部は4の形態になると思われる。6はS字口縁の小片で、台付甕である。7は坏と想定したが、高坏か器台の可能性もある。8は高坏で、坏部に土手状の突帯が、剥がれた痕跡が残り、内外面共に細かな暗文風篋磨きが施される。9は脚部に3孔があり、10は器台脚部でこれも3孔である。石器は打製石斧11～13・横刃形石器4である。12は刃部に著しい使用痕が残り、緑泥岩製である。

時期は土師器の形態から、古墳時代前期である。



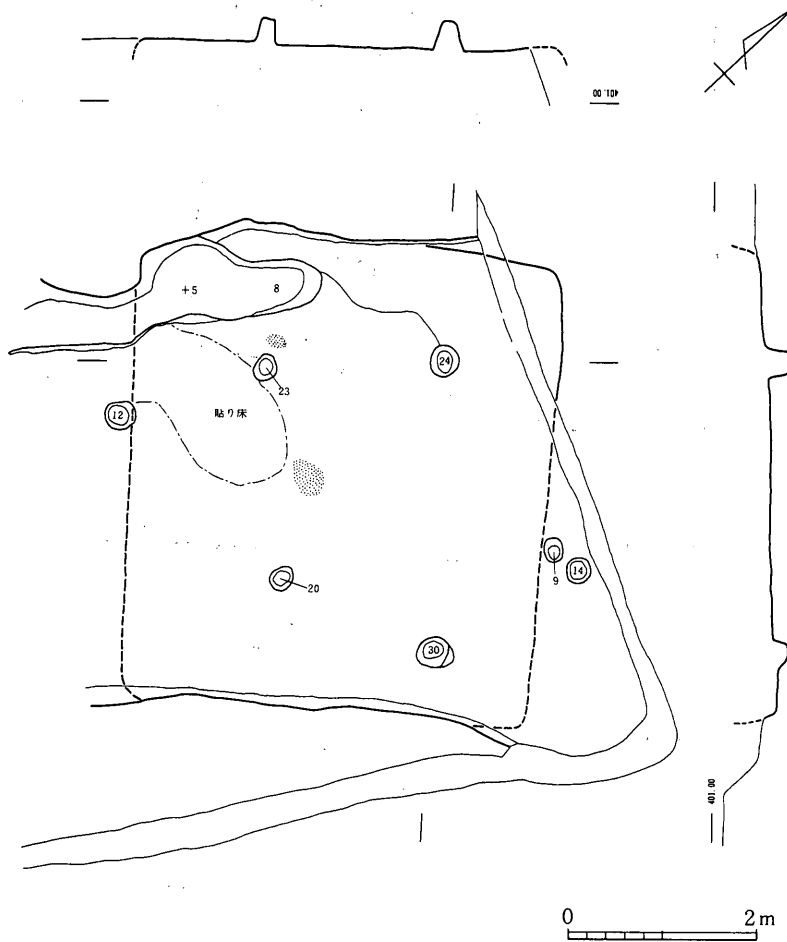
挿図11 JYO 4号住居址

⑤ 7号住居址 (挿図12. 第13・14図)

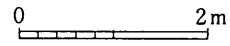
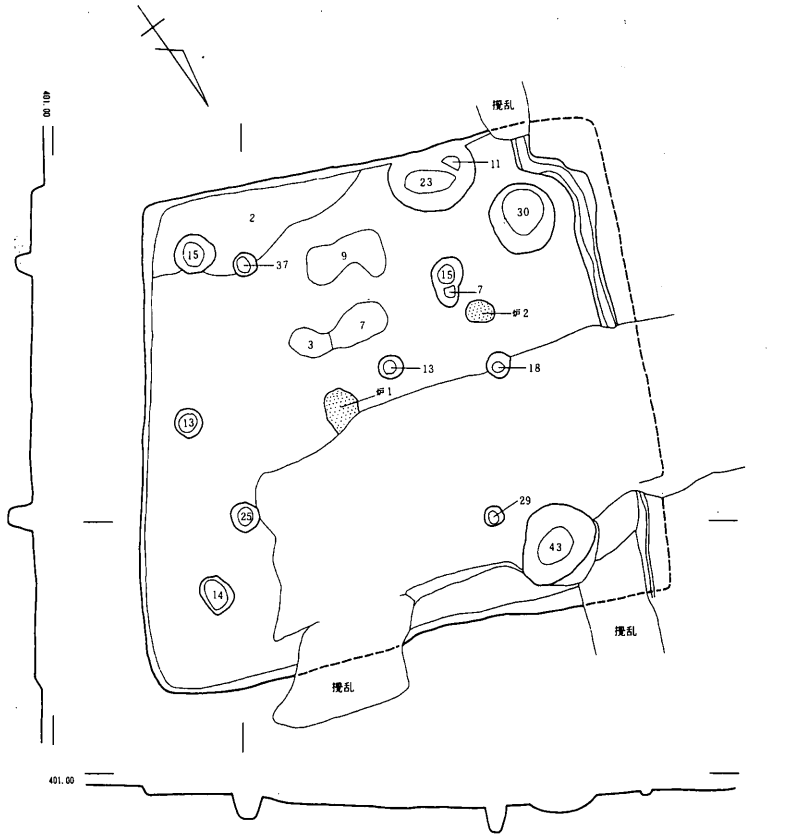
4号住居址の東側に、切り合って検出した。推定規模(4.5×5)m竪穴住居址であるが、主軸方向は確認できなかった。覆土は暗褐色土の一層であり、大小の礫が混入していた。壁の確認部分は20cm以下と低い。床面には基盤の礫が露出しており、一部分貼り床になっていた。支柱穴は4本と推定されるが、1本はやや位置がずれる。炉は検出できなかったが、焼土は2箇所を確認し、簡単な地床炉であった可能性もある。

遺物の出土量は比較的多く、台付甕・壺・小形丸底・高坏・器台・石器等である。台付甕13図15~17はS字口縁であるが、外面のカキ目が消滅しており、口縁もやや雑になっている。壺14図1・3は有段口縁で、1は朱塗の痕跡が外面と口縁内に残っている。底部は穿孔されており、祭祀に使われたものである。3は肩部のみであるが、1と同器形であろう。2の口縁片は中島式である。小形丸底4・5は口縁片のみであり、5は内外面磨きが施されている。高坏6~8で全体形の把握が可能なものはないが、6は坏部の内側に土手状の突帯を持ち、朱塗された特殊なものである。8は脚部片であり4孔を持つ。波状文の拓影は10・11が甕、12・13が壺である。石器

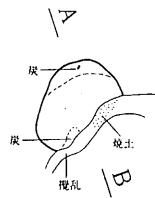
14～17は打製石斧であり、使用痕が残っている。16は緑泥岩製で、他は硬砂岩製である。時期は土師器の形態から古墳時代前期である。



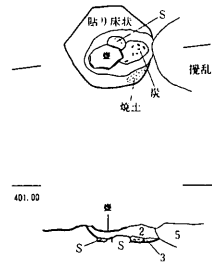
挿図12 JYO 7号住居址



炉 1



炉 2



A
401.00



B

1. 茶褐色土
2. " 焼土混り
3. " 炭多量に混る
4. 焼土
5. 攪乱

0 1m

插图13 JYO 8号住居址

⑥ 8号住居址 (挿図13. 第15・16図)

調査区南隅近く、住居址の集中する位置に検出した。地表から床面までわずかで、試掘トレンチで床面を破壊し、現代の攪乱にも切られる。5×5mのやや変形した竪穴住居址で、主軸方向は不明である。覆土は、礫混りの褐色土であり、床面も礫層で確認に苦労した。壁高は残りの良い所で、10cm前後であり、北西側では壁の確認ができず、周溝により範囲を確認した部分もある。床は礫が露出し、一部分貼り床になっていた。主柱穴は4本と推測されるが、1本は確認できず、掘り方も浅い。想定した主柱穴も断定はできない。炉は2箇所があり、浅い地床炉である。中央の炉1は黄色土の貼り床下から検出し古い。相方ともに焼土は少なかった。

遺物は、遺構の状態に比較して、多く出土した。器種は、甕・壺・鉢・無頸罎・器台・石器等である。甕15図1～5には器形に大小があるが、球形に近い胴部を持ち、口縁部にバラエティがある。2の口縁内面には暗文風の篋磨きが施され、外面は刷毛なでである。壺16図2・4は、2個体が実測可能で、2は折立口縁になっており、外面と口縁の内側に篋磨きが施されている。4の口縁はわずか開いて立ちあがり、外面と口縁の内側に横の刷毛目が残っている。鉢5はいわゆる鉄兜型の鉢であり、赤褐色を呈し内外面共きれいになでられている。無頸罎3は、胴部直径8cmと小さく、内外面に横位の篋磨きが施される。底部を欠くため全体形は把握できない。器台6は、坏部・脚部が急に外反する器形であり、内外面に刷毛なでが施されるが、全体形は確認できない。石器は2点出土しており、打製石斧7と、赤色硅岩の剥片石器8である。

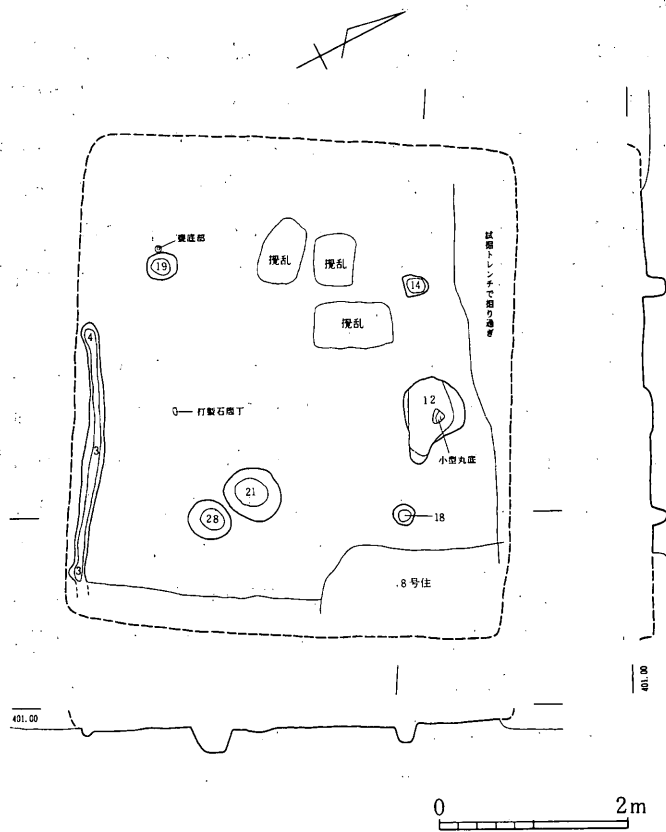
時期は土師期の形態から古墳時代前期である。

⑦ 9号住居址 (挿図14. 第16図)

8号住居址の西側に、床面を検出した住居址であり、壁の確認できた所は無い。推定(5×4.5)mの住居址である。炉も確認ができず、主軸方向も不明である。検出した床面は、砂礫の基盤に黄色土を貼ってあり、一部攪乱を受けている。南西側に周溝約2.5mを確認したが5cm以下と浅い。主柱穴は4本であり、1本はややずれており、深さは床面から28～19cmである。北側主柱穴間に浅い不整形の穴があり、床面と同レベルで、土師器鉢が出土した。

遺物は、検出が床面という事もあり、少量で甕は底部が2点9・10があり、実測部は現存している。土師器鉢11は胴部が扁平で底はやや丸い。胎土は精緻で焼成は軟かく灰白色で、地元産ではない。小型丸底13は胴部が球形であるが、口頸部を欠き全体形は把握できない。器台14は、大形であり頸部の穴も直径3.4cmある。外面は稻科の茎でなでたと思われる、刷毛なで痕が残り、内面には篋磨きが施される。石器は打製石庖丁15が床面密着で出土している。

時期は、土師器の形態から、古墳時代前期である。



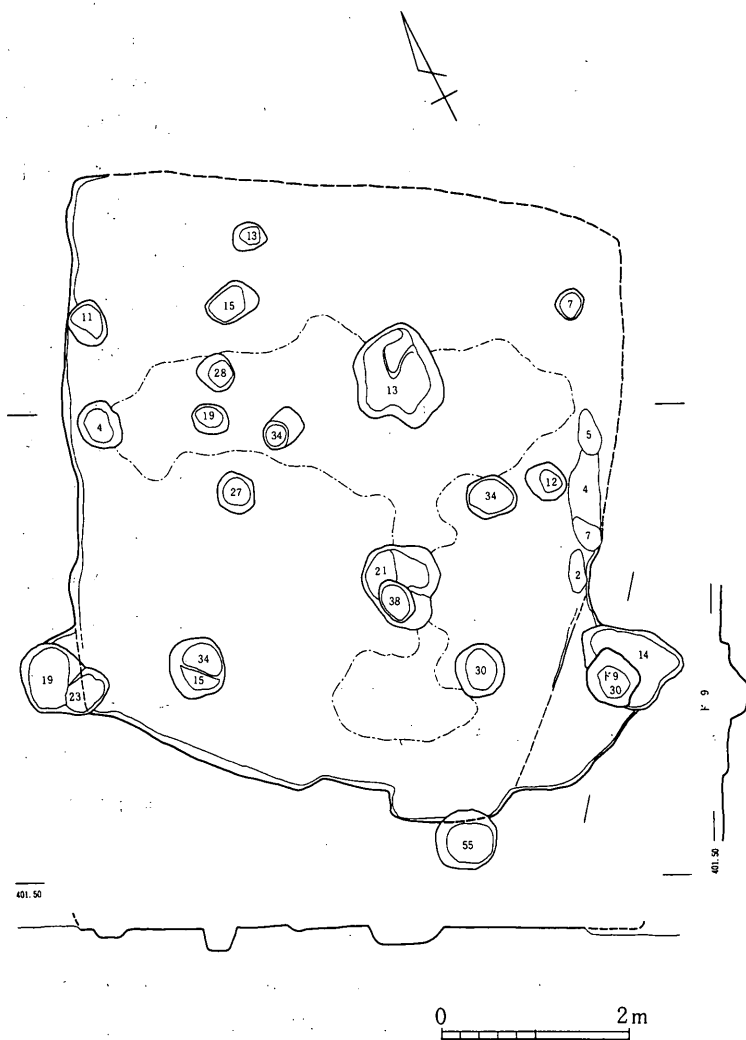
挿図14 JYO 9号住居址

⑧ 10号住居址 (挿図15. 第17図)

2号住居址の西側で、少量ではあるが遺物が集中して出土し、住居址とした。遺構で確認した所は貼り床の残存部分と穴であり、大半が攪乱を受けており、規模等は不明である。地表面から床面まで30cm以下とわずかであり、貼り床部分も状態が悪い。

遺物は小破片が主で、甕・台付甕・小型丸底・高坏(脚部有孔)等があるが、図化可能なものは鉢1のみである。鉢は底部を欠くが、9号住居址出土の鉢と同型であり色調・胎土も同じである。2はS字口縁の台付甕の胴部片である。

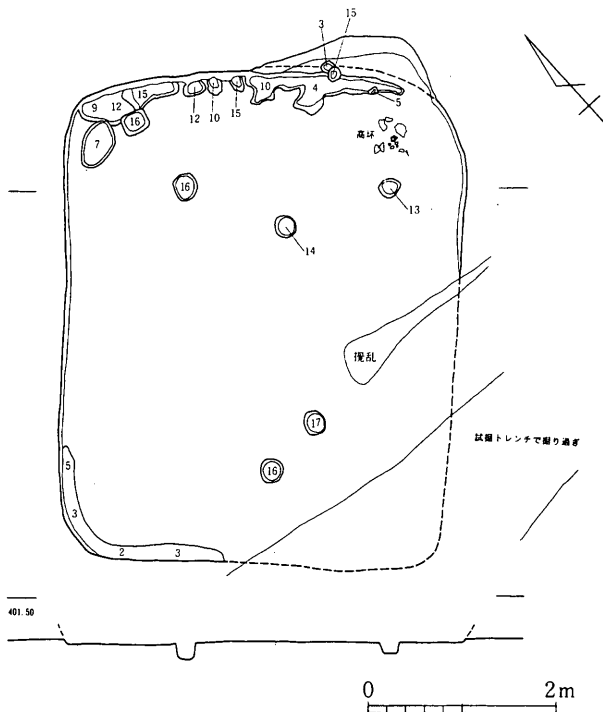
時期は9号住居址と同時期の、古墳時代前期である。



挿図15 JYO 10号住居址・土坑9

⑨ 11号住居址 (挿図16. 第17図)

調査区西隅近くに、検出した竪穴住居址である。試掘トレンチにかかったが、試掘時には床面を重機で、破壊してしまい確認できなかった。検出時遺物が集中して出土し、周囲の土色がやや黒っぽく住居址とした。基盤の砂礫層がグリットGラインを境にして変化し、北西側は黄色土になっていた。規模はほぼ確認でき、 $5 \times 4.2\text{m}$ のやや長方形の掘り方であるが主軸方向は不明である。壁は、ほぼ確認できたが低く、最高で10cmである。支柱穴検出に努めたが、位置的に良い2本も $16 \cdot 13\text{cm}$ と浅く、確実なものはない。炉も検出できず、床面も水成のローム層で軟らかい。

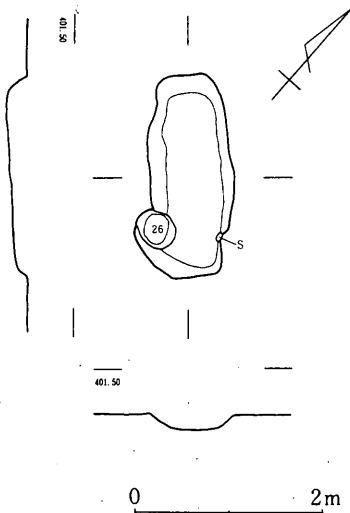


挿図16 JYO 11号住居址

床面西隅にわずか凹んだ部分と、北東壁下に小穴と溝状の凹みを検出したが、いずれも周溝の残存であろう。

遺物は、検出時に出土した高坏・甕・石器で少ない。高坏3～5は、全体形の把握できるものはない。3は坏部片のみであるが、下部に稜を持ち緩く広がる器形であり、大形である。4は緩く広がる脚部で、孔は6孔と推測でき2段に施されている。5は外反の少ない脚部片である。6は甕の胴部片で波状文と斜走短線文が施される。石器はすべて打製石斧で使用痕が著しい。

時期は土師器の形態から、古墳時代前期である。



挿図17 JYO 土坑3

2) 土坑

① 土坑3 (挿図17. 第17図)

方形周溝墓1の南西側、F8に検出した土坑である。規模は2.2×1mの長方形で、深さは20～10cmと検出面からは浅い。南西隅に穴があるが、切り合い関係は不明である。底部は緩傾斜があるが、ほぼ平坦である。

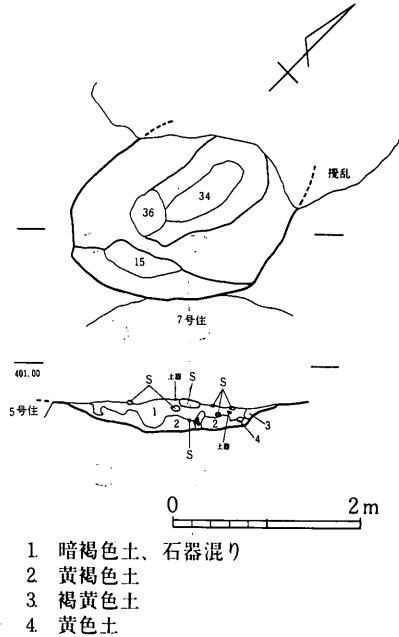
遺物は、土師器と石器である。11は台付甕の台であり、内外面に横ナデが施される。12は小型丸底か、鉢と推測され、外面は篋ナデで調整されるが、全体形は把握できず器種は不明である。13は高坏の坏部片で、篋磨きが施される。14・15は硬砂岩製の打製石斧である。

時期は土師器から古墳時代前期の、土墳墓と推測される。

② 土坑5 (挿図18. 第18図)

7号住居址の西側、グリットK12に検出し、現代の攪乱に切られる。(2.7) × 2 mの不整楕円形で、底部は不整長方形を呈し、中央が緩く凹む。深さは30cm前後で、壁の立ちあがりは緩い。覆土はほぼ2層で、遺物は上層の暗褐色土から出土した。

遺物は土師器の甕・台付甕・鉢・石器など出土している。甕は4～8で、すべて弥生時代後期の破片であり、2は壺か甕の底部である。台付甕3は台部部分のみであるが、刷毛目痕が残り口縁はS字になるものと考えられる。鉢1は小形の甕と考えられる。石器9は硬砂岩剥片の、横刃型石器である。



挿図18 JYO 土坑5

時期は出土遺物から、弥生時代後期～古墳時代前期であり、土墳墓と推察したが、確証はない。

3 中・近世

1) 掘立柱建物址

① 掘立柱建物址1 (挿図19. 第18図)

調査区西隅近くに検出した、5 × 3間の掘立柱建物址であり、溝址2と切り合う。南・北側に廂を持つ総柱であるが、1本は検出できなかった。規模は桁行で廂部分を含めて7.7m母屋5.7m、南側廂幅1.1m、北側廂幅0.9mを測る。桁行方向はN28°E。各柱穴掘り方は不整形の比較的小形で、最大直径40cm、最小直径25cmの範囲である。掘り方の深さは検出面から40～20cmであり、覆土は灰色土であった。

遺物は混入と思われる敲打器18図10がある。

時期は中世以降の、土坑6・溝址2と同時期が推測できる。

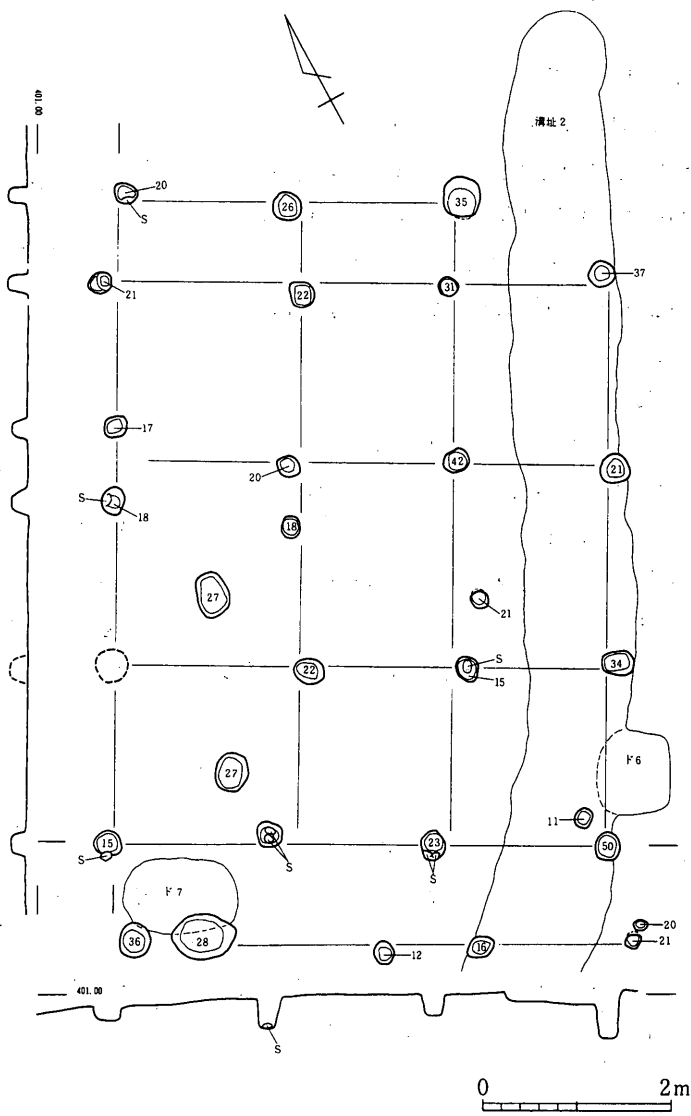
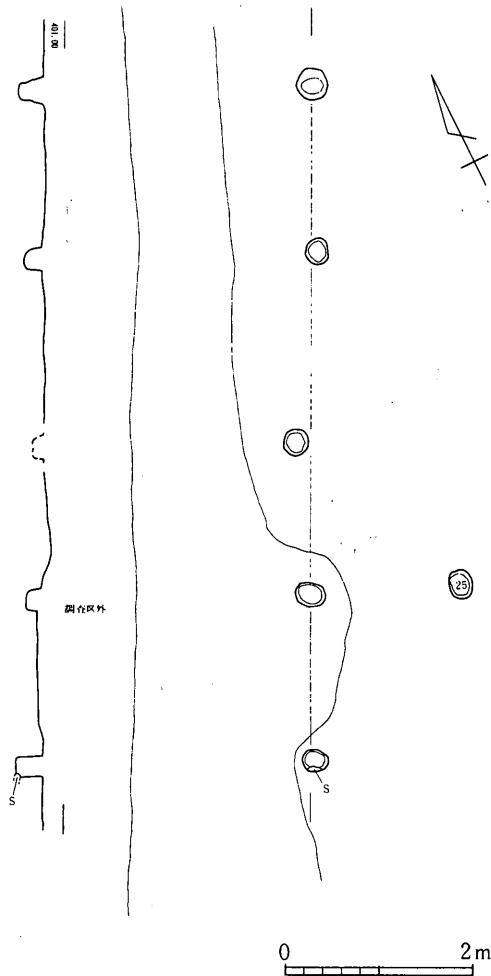


插图19 JYO 掘立柱建物址1

② 掘立柱建物址2 (挿図20)

建物址1の北西側で市道にかかって、柱穴5本を検出した。5本はほぼ直線に並び、長さは7mを測る。桁行方向と推測されるが、中央の柱穴がやや位置・距離共にずれる。建物址は北西側に広がるが、規模は推定できない。調査した柱穴の方向はN27°Eを測る。掘り方は小さいが、ほぼ円形で深さは30~16cmである。

時期は判定できないが、建物址1と同じ中世と考えられる。

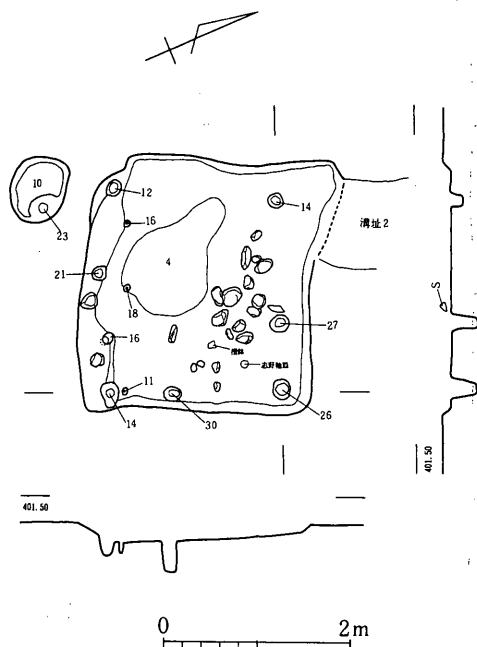


挿図20 JYO 掘立柱建物址2

2) 方形竪穴

① 方形竪穴1 (挿図21. 第18図)

方形周溝墓1の北隅近くに検出した。規模は2.6×2.5mのやや不整形であり、長軸方向はN67°Wを測る。深さは20~10cmと浅く、覆土は青灰色土の一層であり、円礫と遺物が混入していた。壁の3方向は確認できたが、南西側は緩く傾斜しており、やや不安が残る。その緩く傾斜した壁と近くの床面に、様々な形の柱穴7本と石2個を検出した。床面は凹凸があり、緩く下がる南西壁下が特に凹んでいる。柱穴は大小11本あり、ほぼ方形上に位置する。南西側柱列は2列で、内側は小さな穴3個が並ぶ。柱の位置が変則的で、この竪穴の性格を現すものであろうが、確認

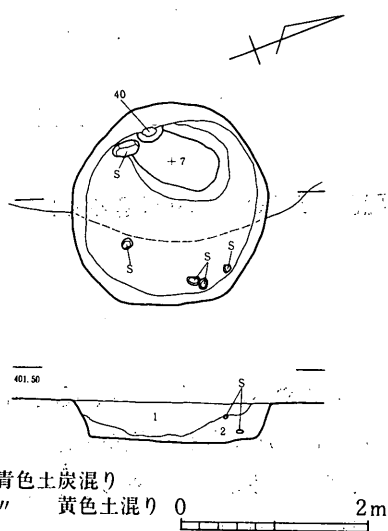


挿図21 JYO 方形竪穴1

が無く把握できない。

遺物は、陶器の皿・すり鉢・混入の石器である。11の皿は、高台を削りだし、長石釉を高台まで施釉した志野である。重焼の痕跡は、見込と高台内側に目跡が残っている。17世紀初頭の瀬戸美濃製品であろう。12は小皿で、全面枯れ葉色の灰釉がかかり、底部は中央部を削り込んだ、碁け底である。見込に目跡、底部は碁け底の縁に輪トチ痕が残っている。16世紀代大窯2～3期の瀬戸美濃製である。13・14は鉄釉がかかったすり鉢片であり、口縁の形態から、12と同時期であろう。15の有肩扇状石斧は、混入品で覆土中の転石と同様な性格を持つものであろう。

時期は、出土陶器から中世末～近世初頭である。



1. 灰青色土炭混り

2. " 黄色土混り

挿図22 JYO 小竪穴1

3) 小竪穴

① 小竪穴1 (挿図22. 第19図)

方形周溝墓2の東隅を切っている落ち込みを検出し、小竪穴1にした。直径2.1mのほぼ円形で、最深部は40cmを測る。壁は垂直に近く立ちあがる。覆土は2層に分れ、上層には炭が混入しており、下層の床面近くには、石が入っていた。覆土断面では埋めもどし状態が観察された。

遺物は凶化した土鍋、鉄釉の天目茶碗・皿の他に、鉄器片、赤い漆の小片が出土している。土鍋3は内耳部を欠くが、復元実測が可能であった。天目茶碗3は上部のみで口縁部はやや玉縁状でわずか開く。皿1は口縁部外周以外を全面施釉しており、見込に3ヶ所の目跡と、底部に輪トチ痕が残り高台は削り

出しの碁け底である。器壁は薄手の浅い端反りであり、瀬戸美濃大窯2～3期の製品である。赤漆片は、漆塗木椀の漆がわずか残ったものである。

時期は出土陶器から中世末である。

4) 溝址

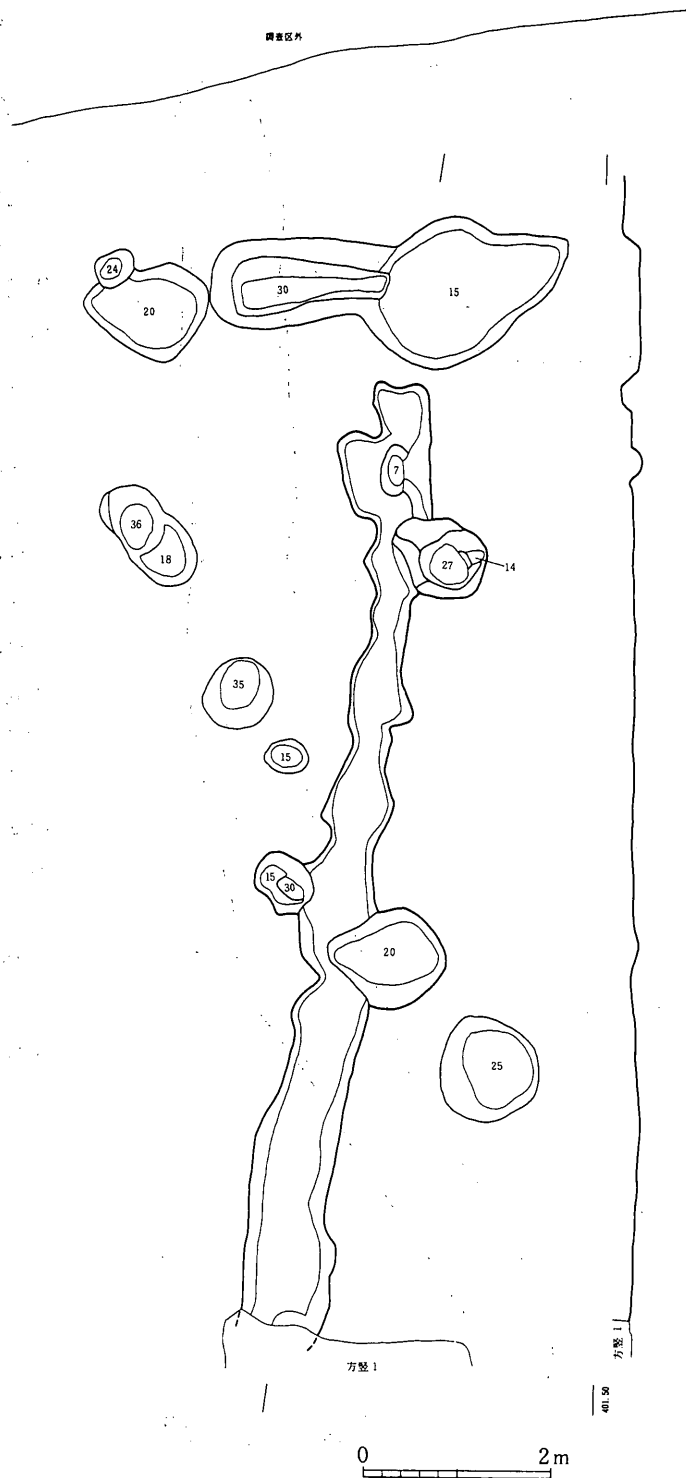
① 溝址1

(挿図23. 第19図)

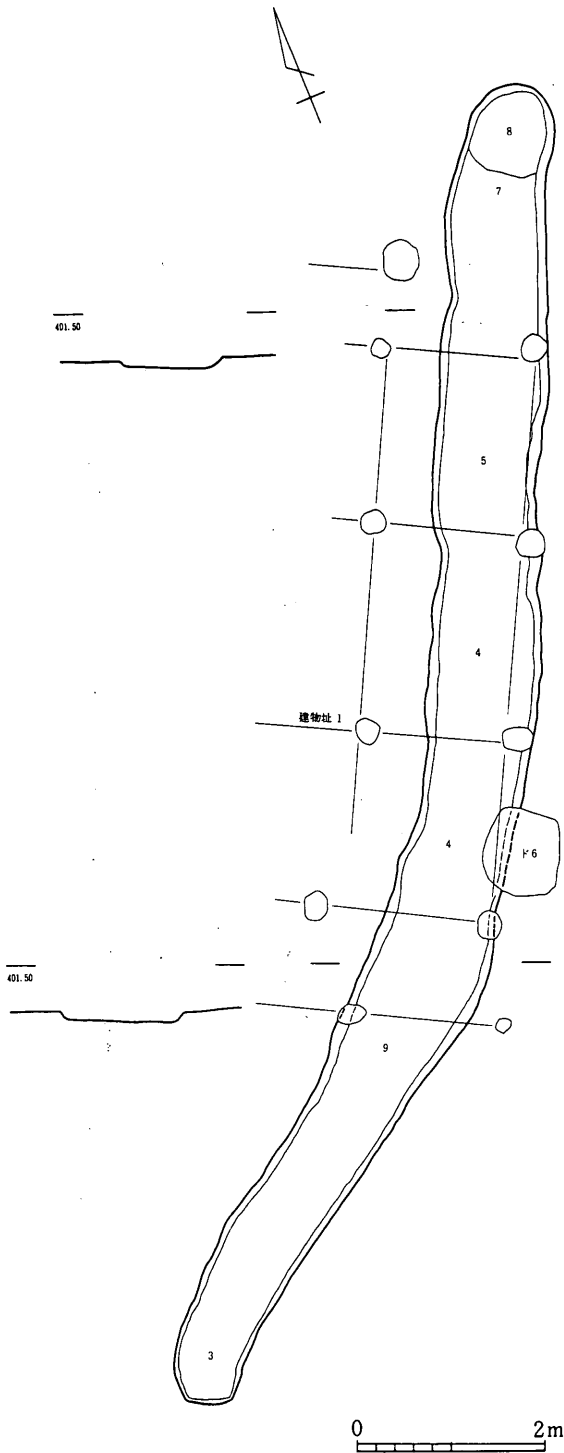
調査区東隅近くに検出した、溝址である。方形竪穴1・穴と切り合うが、新旧関係は不明で、方形竪穴1に伴う遺構とも推測できる。長さ10m 幅1～0.5mで、検出面からの深さ14～7cm、方向はN27°Eを測る。掘り方は整っておらず、覆土は青灰色の一層で、方形竪穴1と同じ土色であった。

遺物は少なく、混入の土器・石器である。

時期は方形竪穴1と同時期の、中世末



挿図23 JYO 溝址1・穴



挿図24 JYO 溝址2

～近世初頭であろう。

② 溝址2 (挿図24. 第19図)

調査区西隅で、掘立柱建物址1と切り合い土坑6に切られる。建物址の南東側柱列に、ほぼ沿いN27°Eを測り、建物址をはずれた所で、方向をやや西に変える。確認した長さは14m余で幅1m前後である。検出面からの深さは10cm以下で、底面レベルは南西端がやや下がる他は同レベルである。建物址1に伴う溝と推測できるが、溝址1と方向が同じであり、何等かの関係も推測される。

遺物は弥生～古墳時代の混入品がすべてで、いずれも少片である。6は横刃型石器で混入である。

時期は、中世末に位置づく土坑6に切られており、この溝址も同時期である。

5) 土 坑

① 土坑1 (挿図25)

方形周溝墓1の西隅を切って、青灰色土の入る落込みを検出、北東側のやや深い落込みを土坑とした。規模は1.8×1.2mの隅丸不整形形で、最深20cmと浅い。壁は緩い傾斜で、西隅は壁下から再度緩く底に続いている。遺物は弥生～古墳時代の混入品で、いずれも小片である。

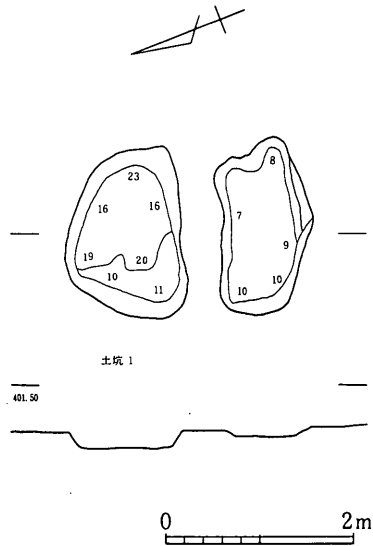
時期の確証になるものは無いが、他の中世遺構覆土と同色の覆土であり、中世の土坑と判断される。南西側の浅い穴も覆土が同色であり、性格も同じと推測される。

② 土坑2 (挿図26. 第19図)

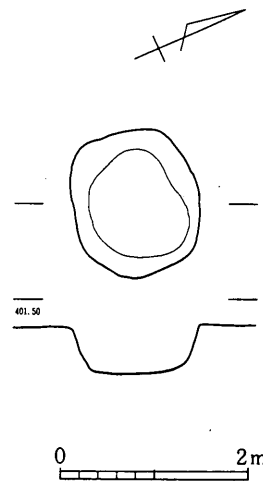
調査区東隅近くに検出した、土坑である。規模は直径1.5m前後の不整形円で、深さは50cmを測る。壁はやや傾斜を持ち、底部は緩い凹凸がある。覆土は暗褐色土の一層であり、底部は基盤の自然礫である。

遺物は、底部から5cm上で7の陶器徳利片が4片出土した。全面鉄釉を施し黒釉をラフに筆塗りし、黒釉の流下した所は、白～紫青色を呈している。図化不能であるが土師器・須恵器・大平鉢片など出土している。

時期は徳利から、近世中期であろう。



挿図25 JYO 土坑1

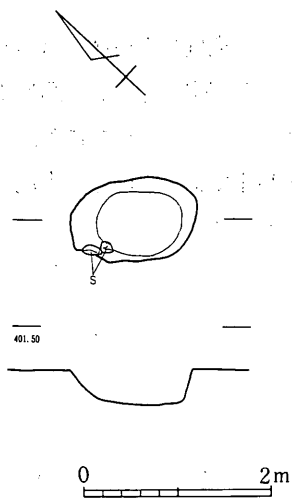


挿図26 JYO 土坑2

③ 土坑4 (挿図27)

方形周溝墓2の内側に、検出した土坑である。1.3×0.8mの不整楕円形で、深さ36~25cm。長軸方向はN50°Wをはかる。壁は垂直に近い所と、緩い傾斜の所がある。覆土は、青灰色土の一層であり、他の中世遺構の覆土と同色であった。遺物は混入の小片だけであった。

時期は中世と考えられる。



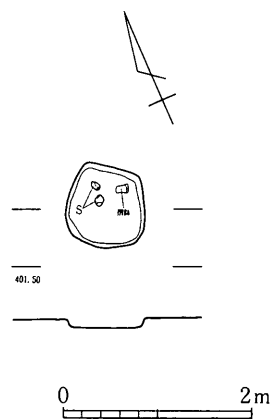
挿図27 JYO 土坑4

④ 土坑6 (挿図28. 第19図)

調査区西隅近く、溝址2を切る土坑である。0.8m四方の不整隅丸方形で、深さは10cm。覆土は青灰色土であった。

遺物は図化可能な陶器2点が出土している。9は鉄釉のすり鉢片で、近世窯産であるが、年代確定はできない。10はいわゆるカワラケで、素焼の盃片であるがこれも年代確定はできない。

時期は近世以前であるが、詳細時期の確定はできない。



挿図28 JYO 土坑6

⑤ 土坑7 (挿図29. 第20図)

調査区西隅近く、建物址1を切る土坑である。1.2×0.8mの楕円形を成し、深さは20~13cmで、長軸方向はN62.5°Wを測る。

遺物は1の陶器が出土している。広口壺の胴下部であり、内外面に鉄釉がかかっている。底部は露胎で重焼か輪トチの痕跡が残っている。

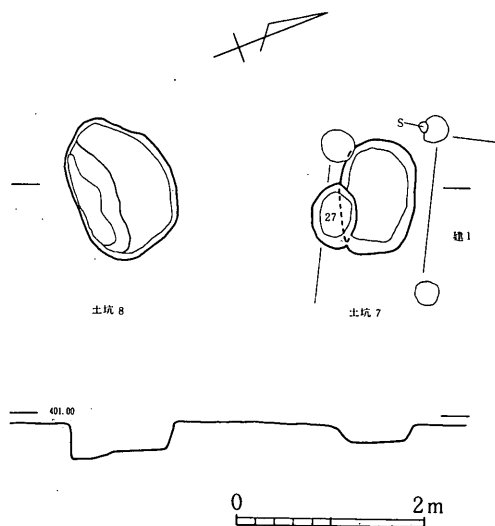
時期は鉄釉壺から、近世遺構であるが、詳細は不明である。

⑥ 土坑8 (挿図29)

土坑7から、南西側へ2m離れて検出した。

1.5×1.1mの不整楕円形で、深さは46~27cm。長軸方向は、ほぼ東西方向である。底部は2段になり、南側が低くなり覆土は礫混りの、一層であった。遺物は覆土中から、土師器の小片が出土している。

時期は、確証となるものが無いが、覆土の状況から近世と判断される。



挿図29 JYO 土坑7・8

⑦ 土坑9 (挿図15. 第20図)

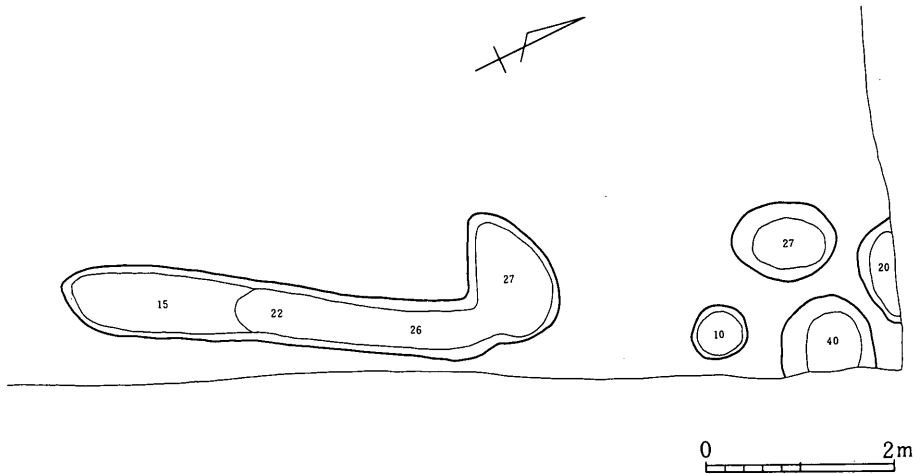
10号住居址、南東壁外側に検出した土坑である。周囲が広く攪乱されており、遺物はすべて土師器であるが、近世~現代の遺構と把握し、不整形の掘り方であり、深さは検出面から20cm前後である。

遺物はすべて、古式土師器であり、ほとんどは10号住居址に関係するものであろう。2は器壁の薄い、胴部球形の甕である。5は高坏ないしは、小形丸底柑の口縁であるが、確定はできない。

時期は、土坑の周囲状況から、近世以後の遺構と考えられる。

6) 穴等 (挿図30他)

調査区の北方、方形周溝墓1・2の北側に散在した状態で、穴・溝状址などを調査した。掘立柱の穴の他、様々な遺構が推測されるが、数も少なく粗く分布しており、性格・時期など不明である。



挿図30 JYO 穴等

4 遺構外出土遺物

1) 土器・土師器・陶磁器 (第20・21・22・23・24図)

地表面・重機による表土剥ぎ・検出作業時等に、遺構外から出土した遺物である。縄文時代の土器・石器から、近世の陶器片まで出土している。縄文時代土器片は極小さなものも含めて、相当数出土をみたが6～11のみを図示した。ほとんどが中期に位置づけられる土器片であるが、10は晩期の条痕文系である。11は器面が薄く剥落して、文様がはっきりせずやや不安が残る。弥生時代と確定できるのは、壺の底部片12と少ない。13～15・21図1・2は、土師器である。1は暗文の施された皿で、奈良時代に位置づく。3は山茶碗片で、4号住居址の覆土中から出土した。内面に枯葉色の釉がかかり、高台には籾殻圧痕が顕著に残っている。4～6は中世陶器であり、4は天目茶碗、5は古瀬戸の灰釉がかかった皿で、2号住居址覆土中から出土した。7・8中国同安窯産の青磁碗片で、淡褐緑色の釉薬がかかる。高台は7が内外面共に、8は内面が露胎である。9・10は近世の陶器であり、9は胎土はやや粗く淡赤褐色で、黄緑色の釉薬がかかっており、盃である。10は鉄釉の厚くかかった皿で、外面の露胎が黒く変色しており、灯明皿であろう。第21図11～15・第22～24図は遺構外出土の石器で、打製石斧・横刃型石器・敲打器・砥石・自然の円礫・黒曜石と硅岩の剥片等である。打製石斧で図化したものは、半分以上現存しているもので

あり、破片は多量に出土している。ほとんどが硬砂岩製で一部緑泥岩製もある。横刃型石器は完形品のみ図化し、硬砂岩製である。破片は打製石斧と、識別が困難である。砥石24図2は、泥岩で小さな破片である。敲打器3が硬砂岩、4が緑泥岩である。5の自然円礫は、ポットホールの中心に入った石と推測でき、安山岩である。剥片6～8の内、8が珪岩である。石器の時期は明確にはできず、砥石のみ古墳時代以降であり、あとは縄文時代～古墳時代前期の遺物である。

IV ま と め

松尾公民館移転新築にともなう、記録保存のための遺跡発掘調査を、敷地全体の内ほぼ2,000平方メートルについて実施した訳であるが、城遺跡は広範囲でありごく一部分を調査したのみで、今回の調査を持って、城遺跡の全体像あるいは性格を確定する事は、不可能であるが調査の結果明らかになった点を、いくつか整理し本書のまとめとする。

遺跡の性格等に強く関連する微地形の変化において、本遺跡の大きな特徴を読み取ることができ。それは現地表に現れていない地形状況として、段丘崖先端から40m前後の幅で、自然堤防状の微高地となり比較的乾燥した状況を示す。それより西側の高位段丘崖下に向かって徐々に湿地になっており、基盤の伊那層は山側が低くなっている。付近の古老が話してくれたのであるが、松尾小学校の校庭は、以前非常に軟らかく、石を運んで埋めたそうであり、調査の結果とも一致するといえよう。

このような地形上における遺構分布状態をみると、住居址は段丘崖近くが多く、湿地に近付くと極端に少なくなる。この傾向は地形の成因から見て城遺跡全体に該当すると判断される。

調査した遺構の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期が主体で、中近世が若干ある。この傾向は今回の調査に限定されたもので、立地条件など勘案すると、全体的には縄文時代から連綿と続いている遺跡の可能性が強い。

飯伊地域ではほんの数年前まで、古墳時代前期住居址の調査例は少なく、近年調査例が増大している。城遺跡の今回調査された遺構のほとんどが、この時期であったのは弥生時代から古墳時代の変革期に、新しい文化がいち早く浸透した地域の一つが、この遺跡であった事は、事実である。

松尾地区の古墳数は60余基（注1）確認されており、内前方後円墳も8基あり、竜丘地区の9基に次ぐ量で、地域の古墳時代（文化）の中核の一端を担っていたと判断できる。ここの古墳についての発掘調査例は少なく、具体的な時代も不明なものが多いが、その大半が中期から後期にかけてのものといえる。今回調査の古墳時代前期の住居址群も、これらの古墳を作った時期の、直前の人々の住居である。古墳の規模・数を考えると、この前段階においても生産性の高い集団が統率され、松尾地区全体に、競っていたものと推測できる。なお本遺跡をはじめとする、該期集落の存在は、当地区内の未調査古墳のうちに該期集落と直結する古墳の存在も指摘できる。

次に遺構別に概観すると次のようである。まず方形周溝墓の周溝覆土中より検出された石は、墳丘表面に葺かれたものと推測できる。石は、散逸したものも含め、その全体量は少ないと判断され、周溝内の盛り土の高さその物が低いものであったと推測される。また周溝の土橋は、1と

2でその形状等が異なっており、明確な規則性は認められない。2基の方位は約10度異なるが、ほぼ同一とあって良く、方位には意識が感じられ、立地あるいは集落の形態による可能性が強い。周溝墓2の主体部、土壇掘り方には、木口板を立てた痕跡があり、木棺直葬であり、当地方における方形周溝墓の内部主体の状況は判断できにくいものがほとんどであり、今後の諸研究に果たす役割は多大なものがある。

住居址は段丘先端に近く、地形的条件などから、現地表面から検出面まで浅く、遺構規模等の確証を得にくい状況があった。弥生時代後期の住居址は、床面が非常に堅く作られており、比較的確認しやすい。古墳時代前期の住居址は、遺構のすべてについて確認がむずかしく、3・4・7号住居址の切り合い関係把握に務めたが、確証が得られなかった。古墳前期の炉址は、焼土をわずか残すのみであり、支柱穴も確実な規則性が把握できず、掘り方も浅い。弥生時代から古墳時代前期の連続する時代の中で、同様な生活環境の中でありながら、住居の形態には、その変化が読み取ることができ、古墳時代への移行という社会的な変化の一端を住居構造の細部においても示している可能性が考えられる。

中世の遺構は少ないが、小字名の城は中世豪族の居館を示すものであり、それに伴う遺構と考えられる。今回、検出された遺構について、その居館との関連等の判断はできかねるが、居館周辺の重要な地点であった可能性は強い。なお遺構外からであるが、中国の青磁片2点の出土があり、当該磁器としては古い時代に位置づく同安窯産である。中世前期に中国産青磁を使用した豪族はそれなりの経済力、権力の所在を示し、後の松尾城に移居した小笠原氏によるものとして、問題はないといえる。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の集落立地の在り方が、確認されたわけであるが、縄文時代の土器片も少量出土し、城遺跡のどこかに集落の存在が予想可能といえる。弥生時代は後期の集落のみを検出したが、周囲の状況等から中期集落等の存在も確実といえる。また古墳時代においても、前期集落のみの調査であったが周辺の古墳分布等からすれば、当然かなりの規模の中期・後期集落の存在が予想される。なお各時代の集落址の存在が予想されるばかりでなく、先述した地形の状況からして、各時代の水田址等の生産址も本遺跡内に存在する可能性が極めて強いといえる。

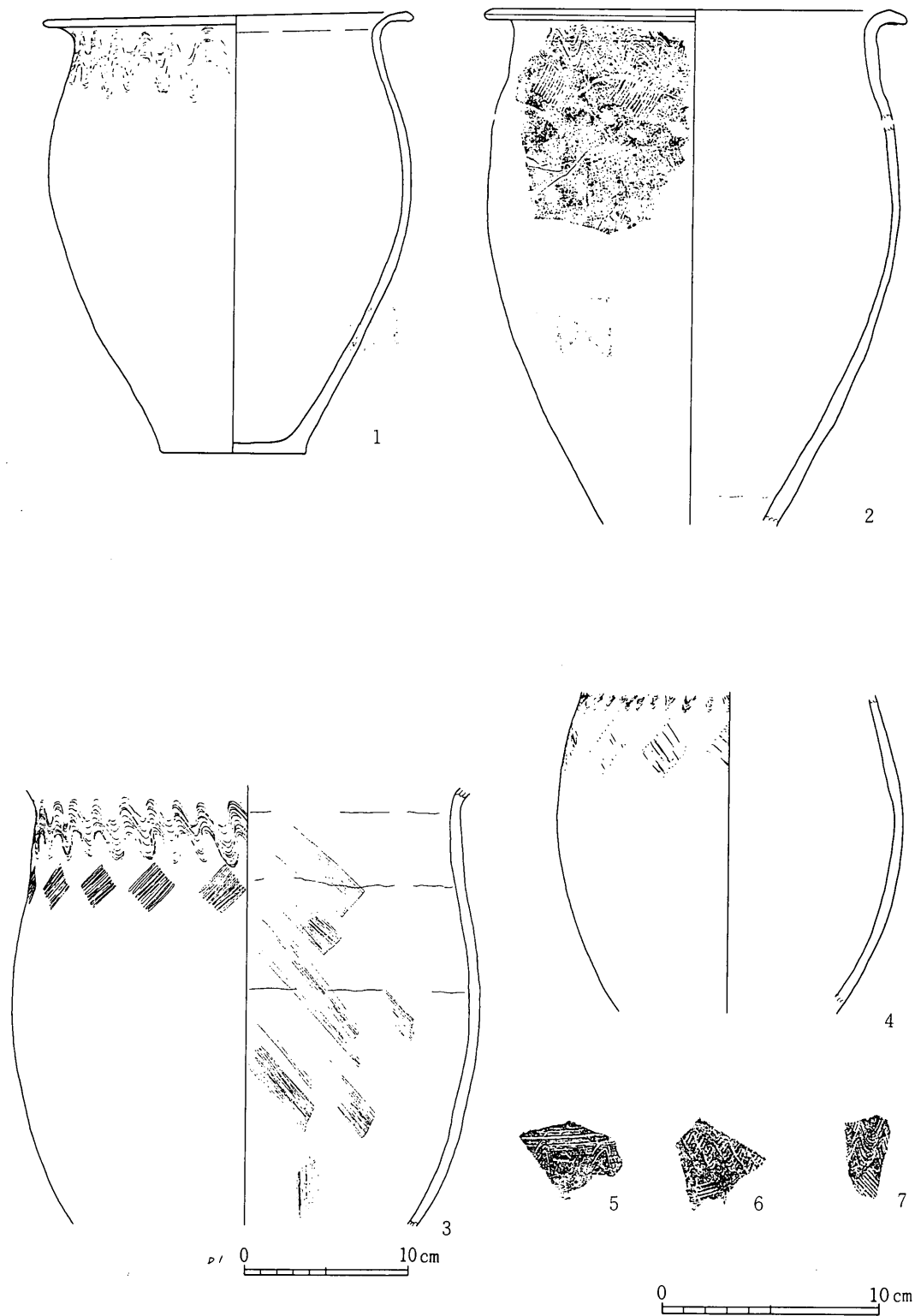
以上、今回の調査結果に基づき、城遺跡について概観したが、その調査は、広範な遺跡のごく一部分についてのみ実施したものであり、その具体的な姿を詳述することは困難といわざるを得ない。しかし、縄文時代から連綿と続く本遺跡が、当松尾地区内において、また各時代において、重要な意味を持ち、換言すれば地域の中心的位置付けの成されるものといえる。今後周辺一帯の調査実施がなされれば、具体的な姿が明らかになるとともに、その位置付けその物も明確になるといえる。一方、近年における松尾地区における開発の進展は著しいものがあり、遺跡の保護には最大の注意を必要としているといえる。地域に密着した歴史事実の解明において、今回実施した発掘調査等の積み重ねが果たす役割が極めて大きく、また欠くことのできないもの

である。そのような意味からも、遺跡保護の諸対応が、現代に生きる我々の大きな責務ともいえ、無意のうちに遺跡が破壊されるなど、基本的歴史事実解明の道を閉ざさない努力を必要とされている時代といえる。

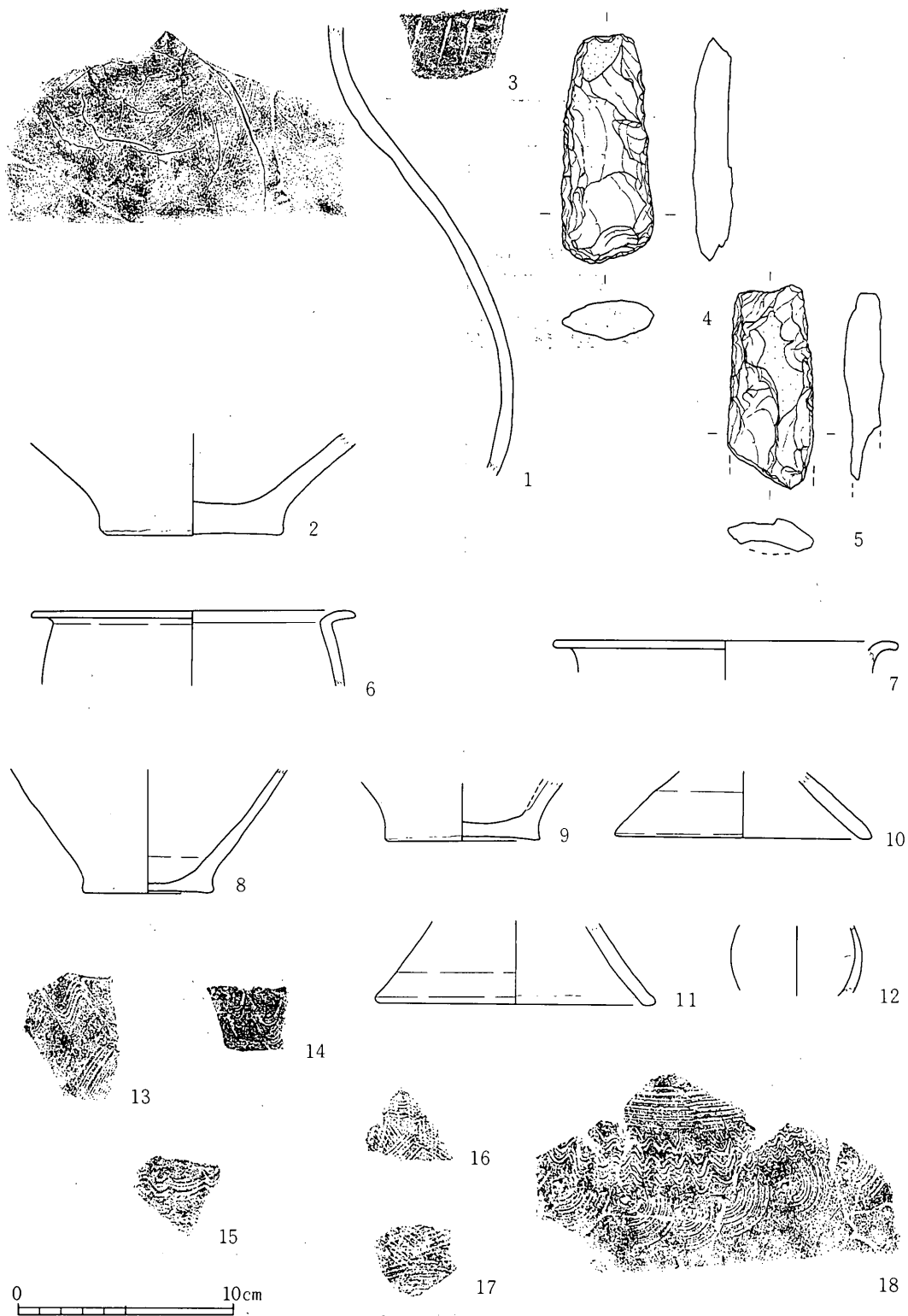
注

- 1、飯田市教育委員会 昭和63年6月27日～7月1日調査
- 2、大沢和夫・佐藤甦信「妙前大塚（3号）古墳」飯田市教育委員会 1973
- 3、佐藤甦信「松尾南ノ原遺跡発掘調査概報」飯田市教育委員会 1975
- 4、佐藤甦信「毛賀御射山遺跡」飯田市教育委員会 1978
- 5、佐藤甦信「清水遺跡」飯田市教育委員会 1976
- 6、大沢和夫他「目で見ると松尾のむかし」飯田市松尾公民館 1970

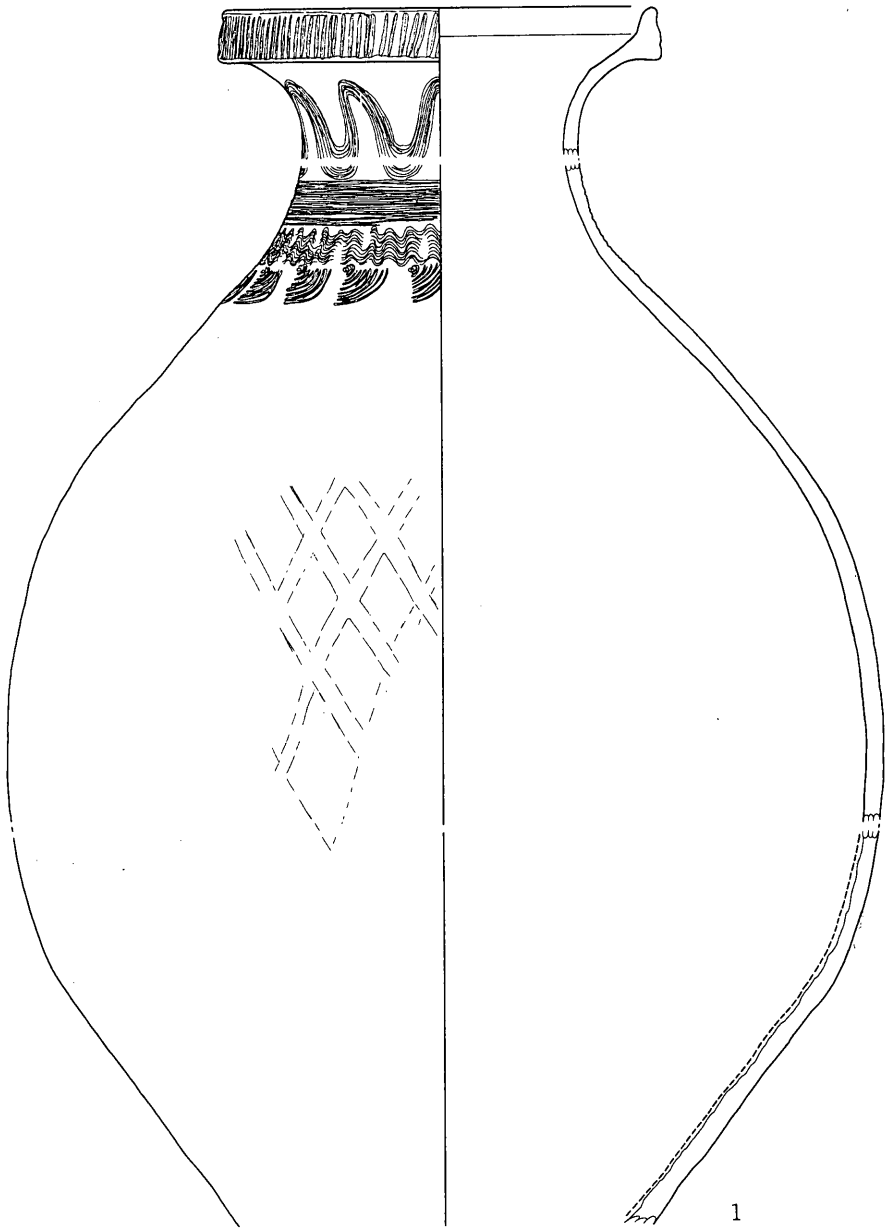
図 版



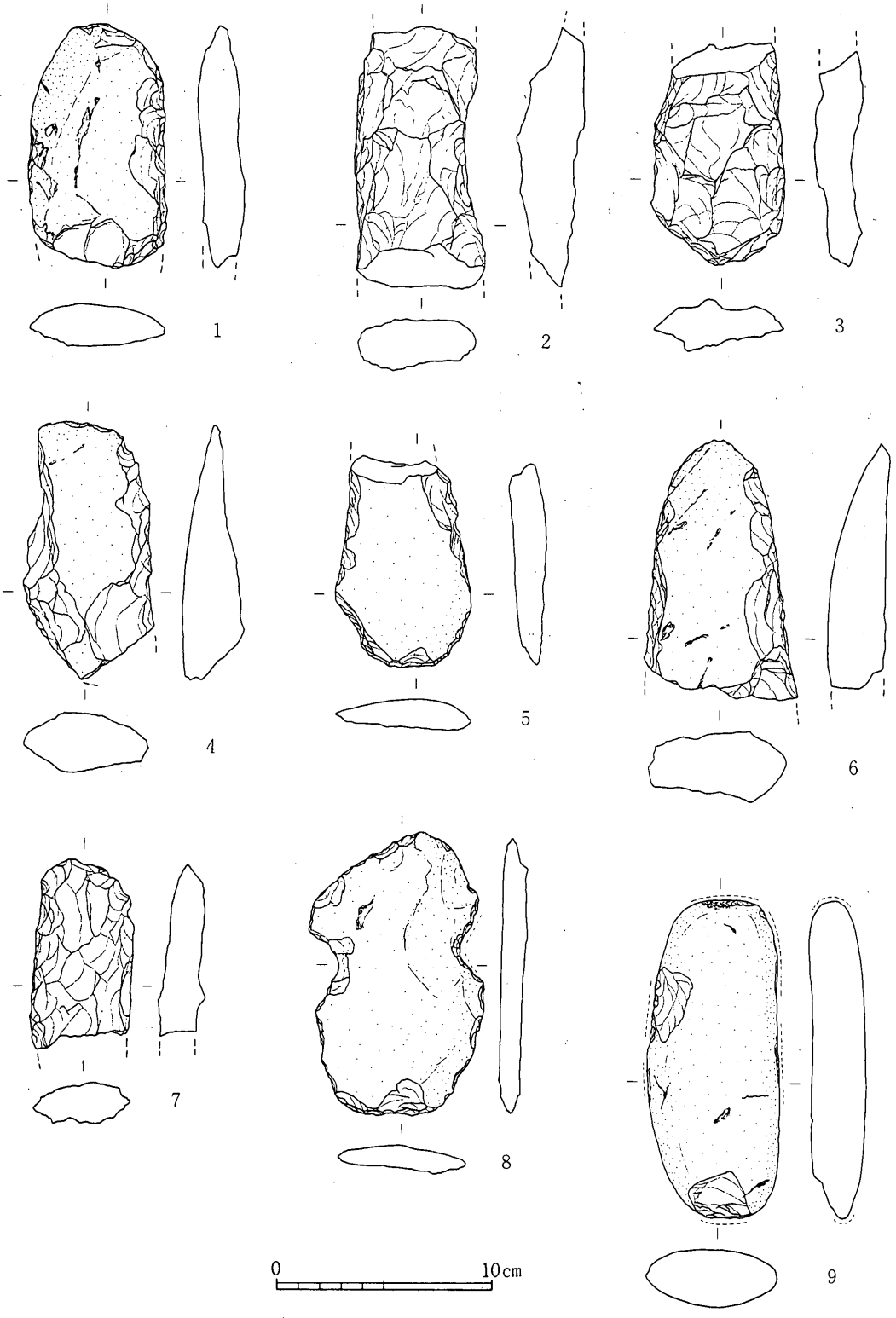
第1図 JYO 5号住居址(1・2)、6号住居址(3~7)出土土器



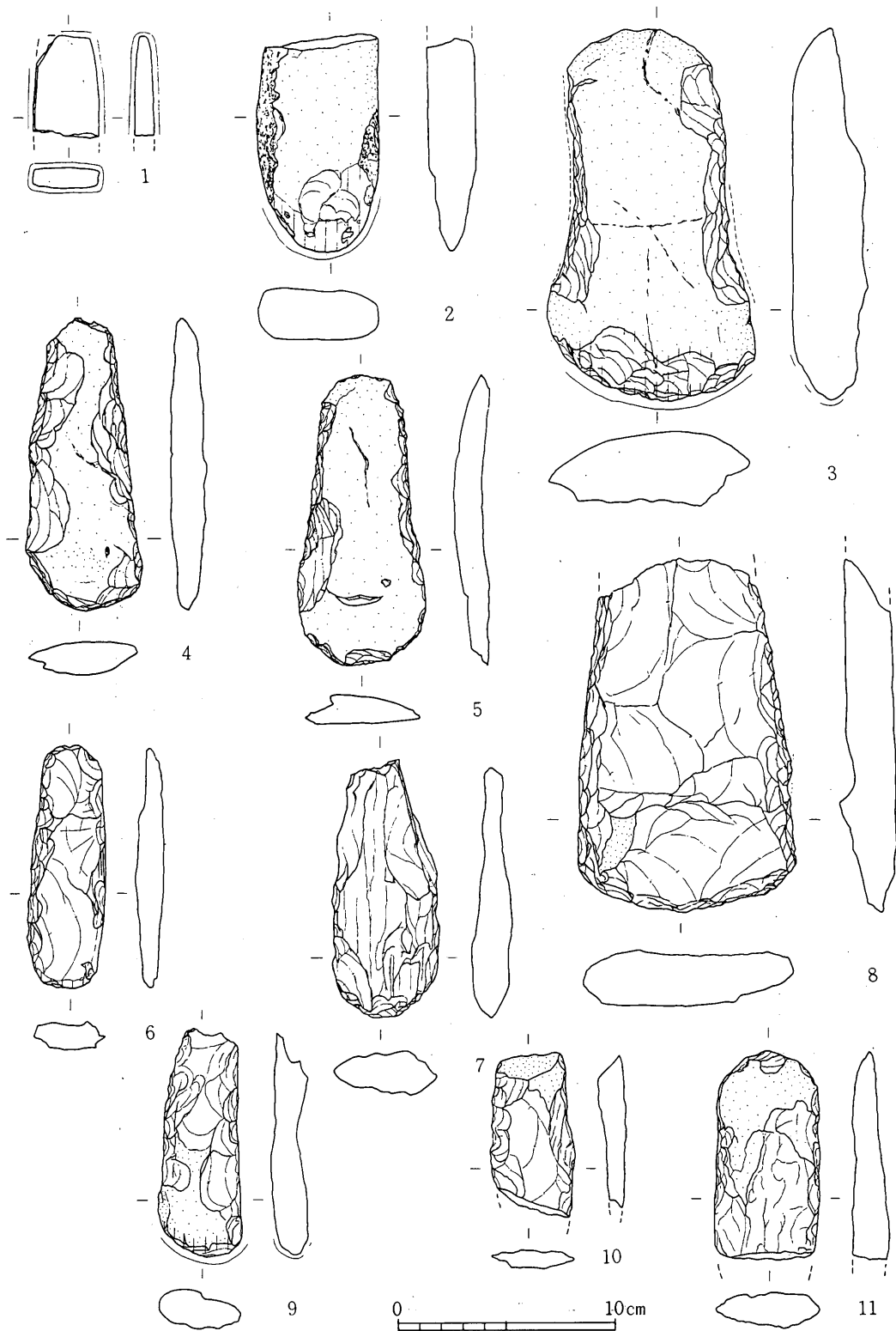
第2图 JYO 6号住居址(1~5)、方形周溝墓1(6~18)出土土器・石器



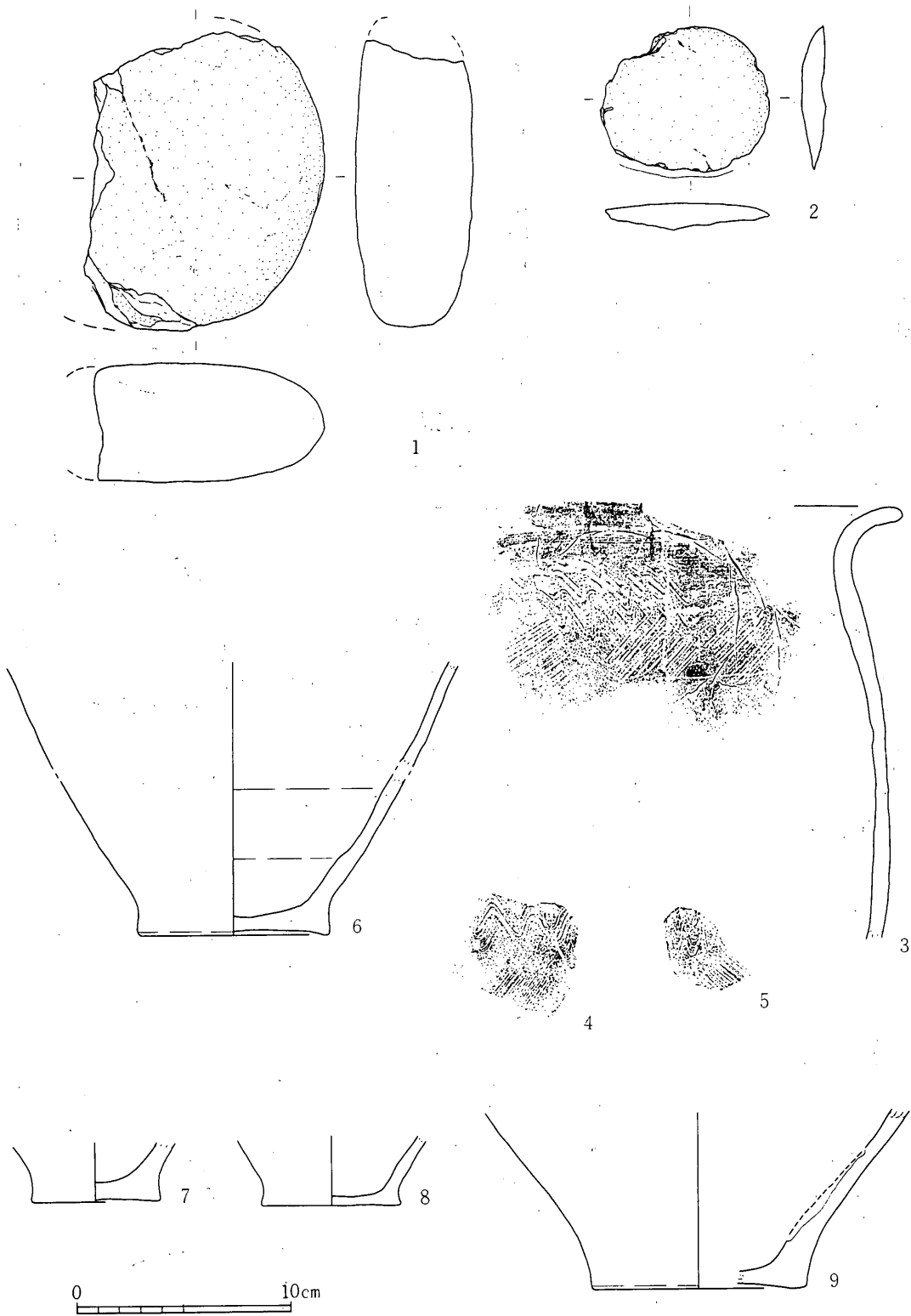
第3图 JYO 方形周溝墓1出土土器



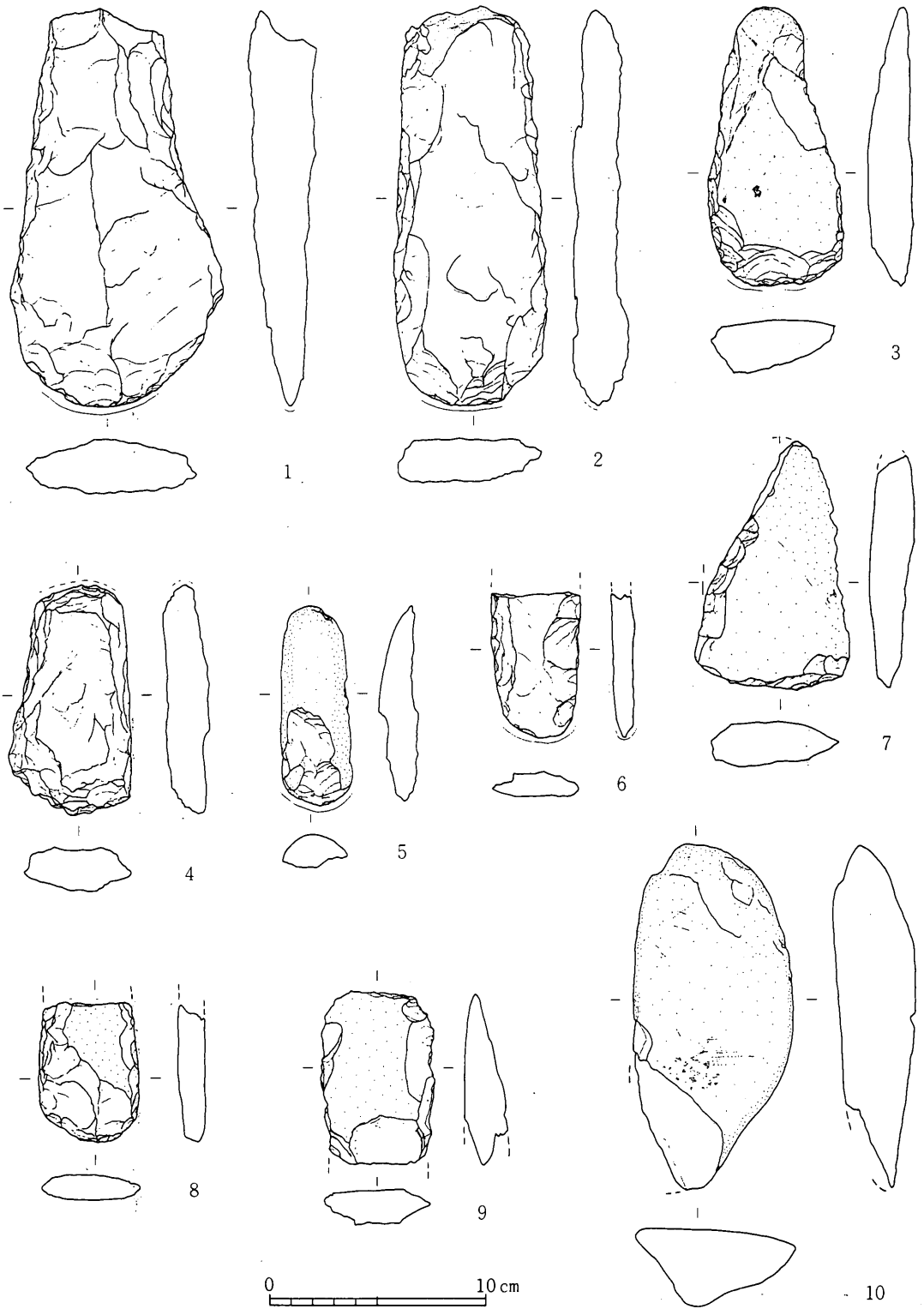
第4図 JYO 方形周溝墓1出土石器



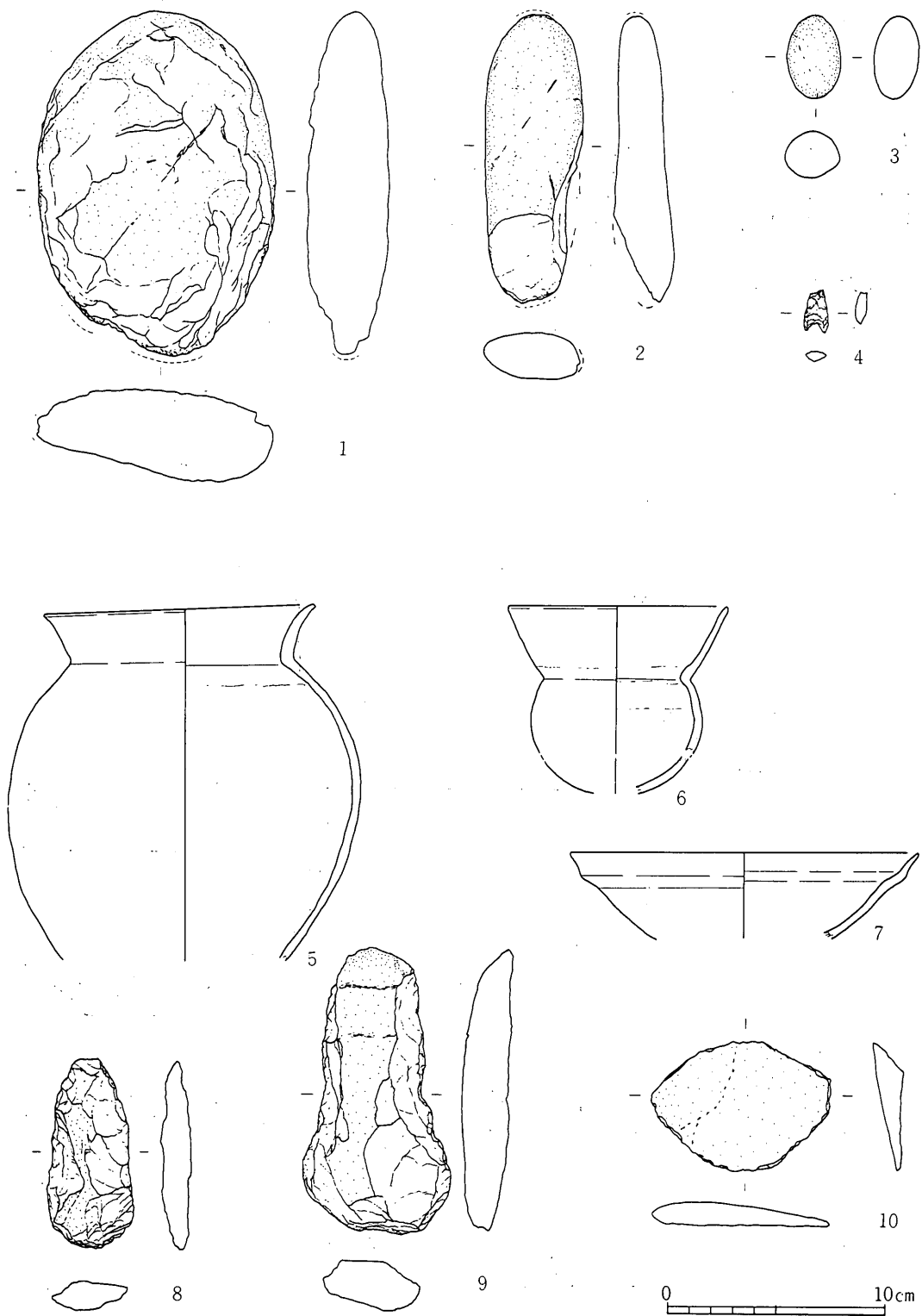
第5图 JYO 方形周溝墓1出土石器



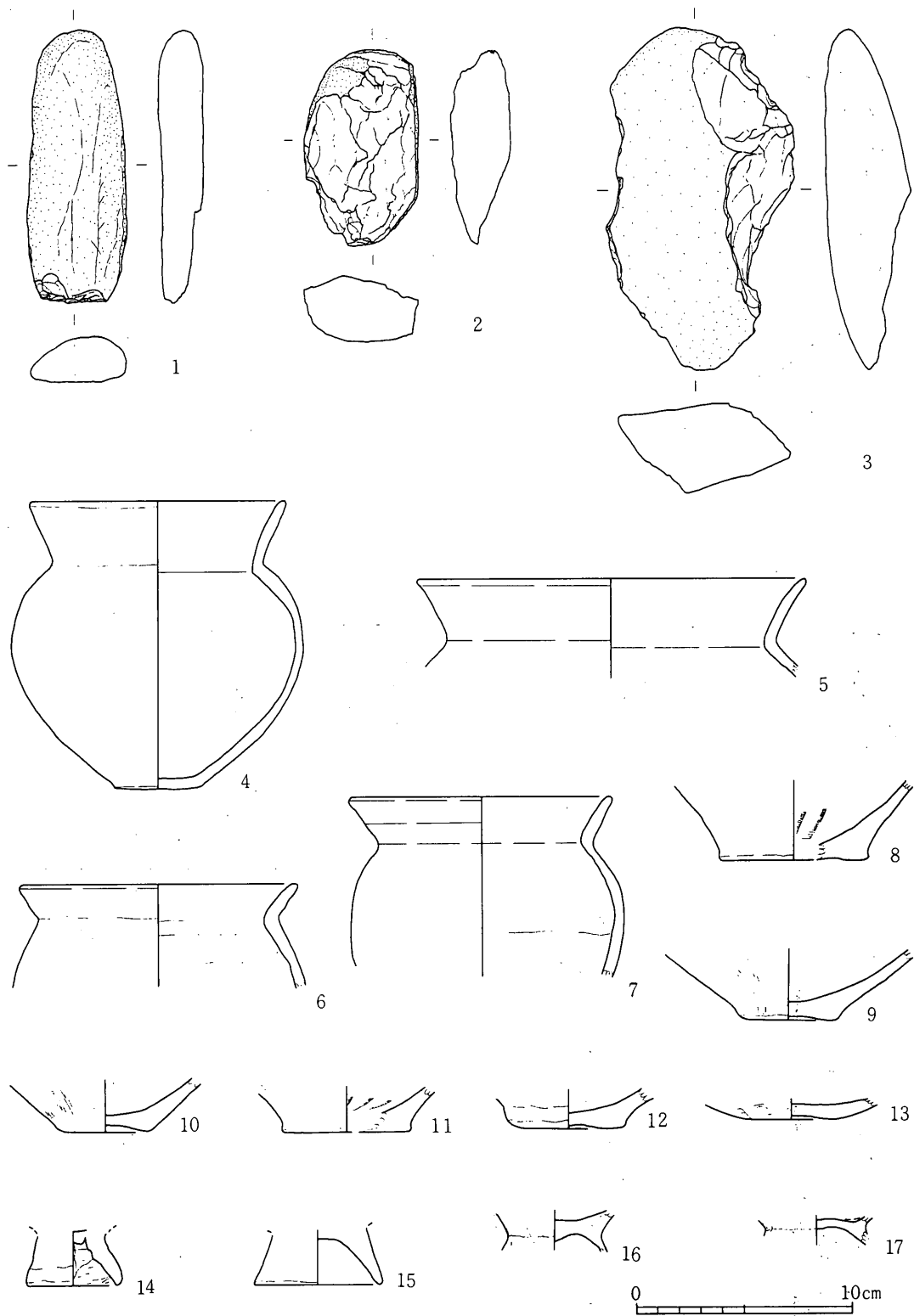
第6図 JYO 方形周溝墓1(1・2)、方形周溝墓2(3~9)出土土器・石器



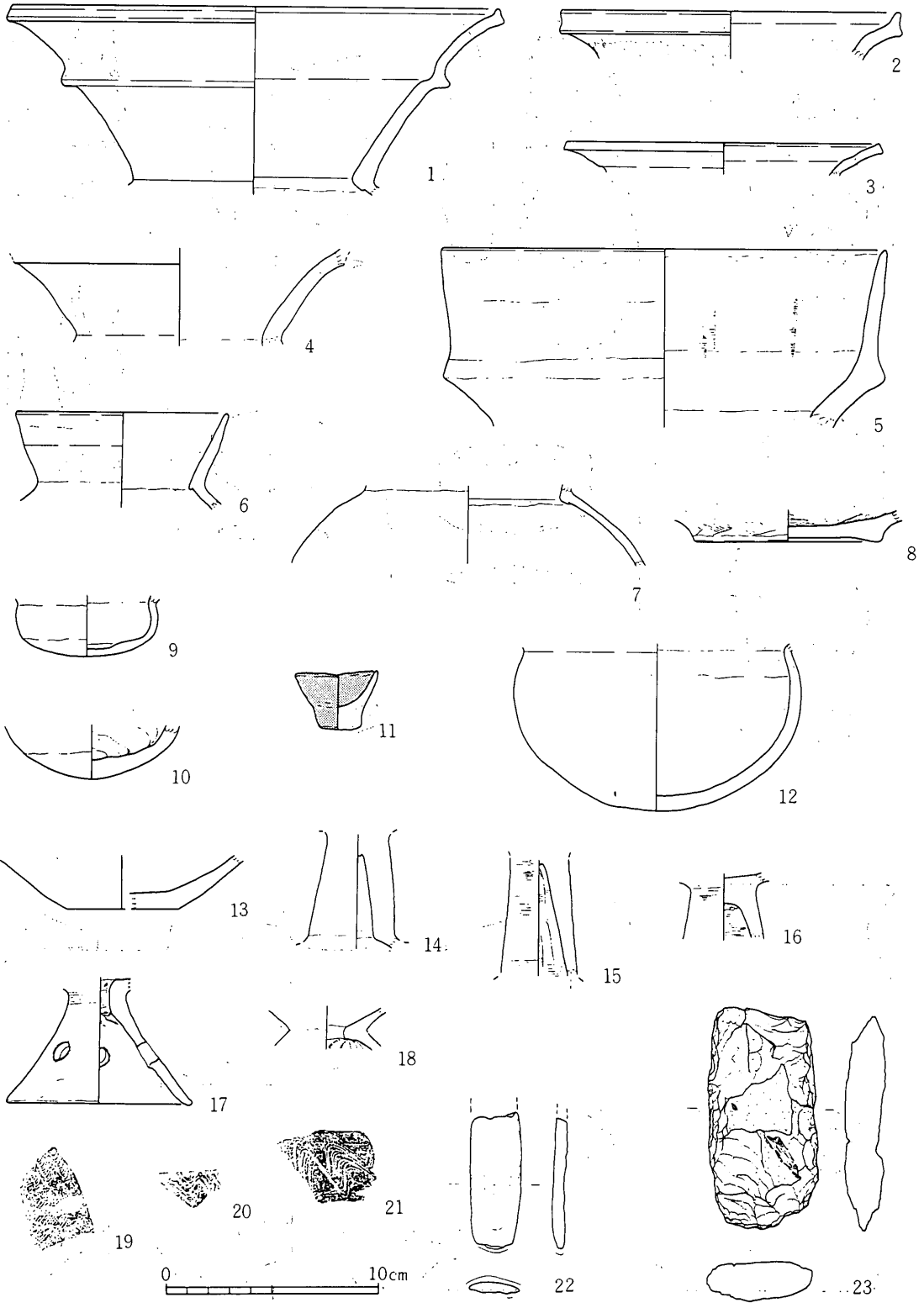
第7图 JYO 方形周溝墓2出土石器



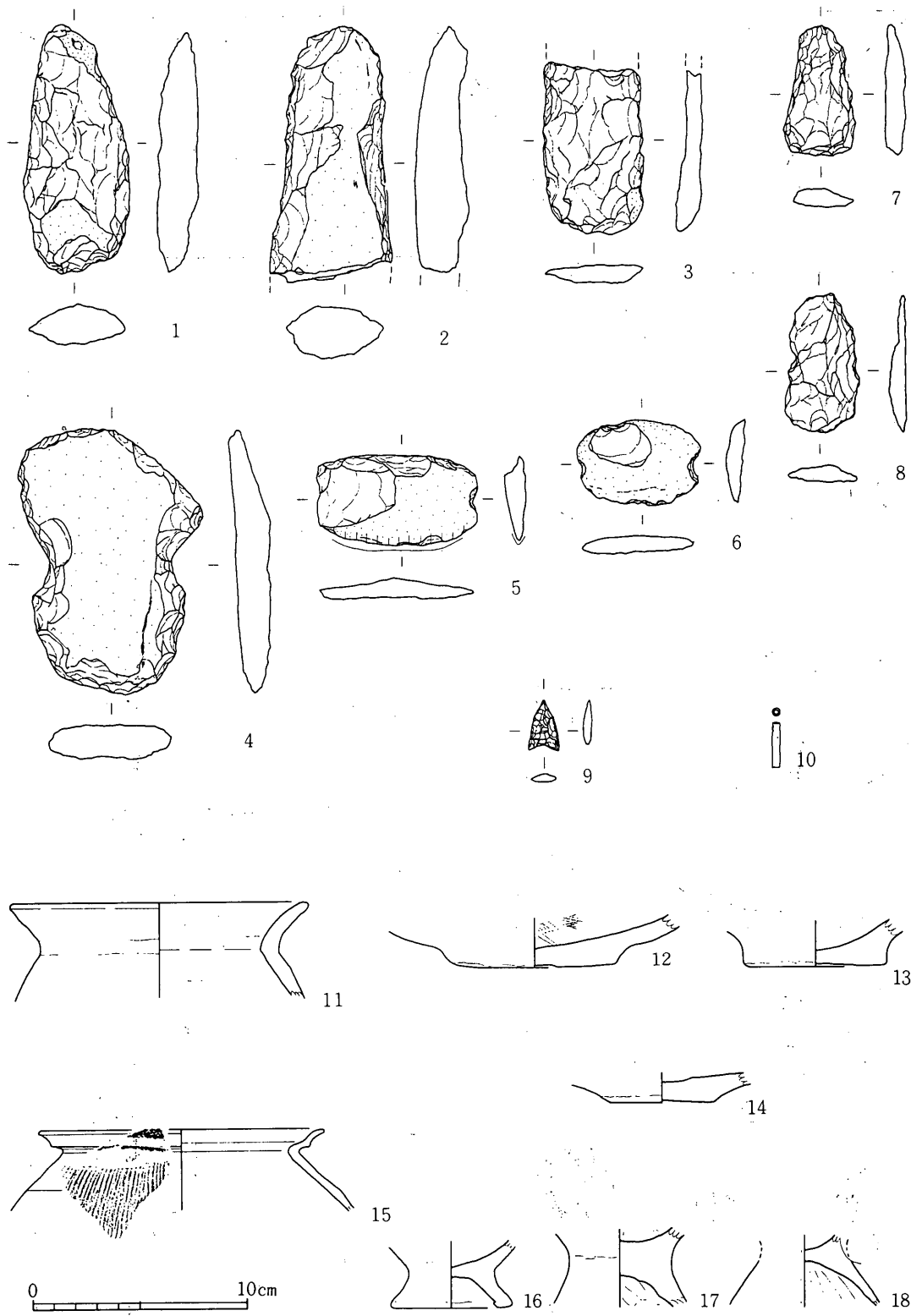
第8图 JYO 方形周溝墓2(1~4)、1号住居址(5~10)出土土器・石器



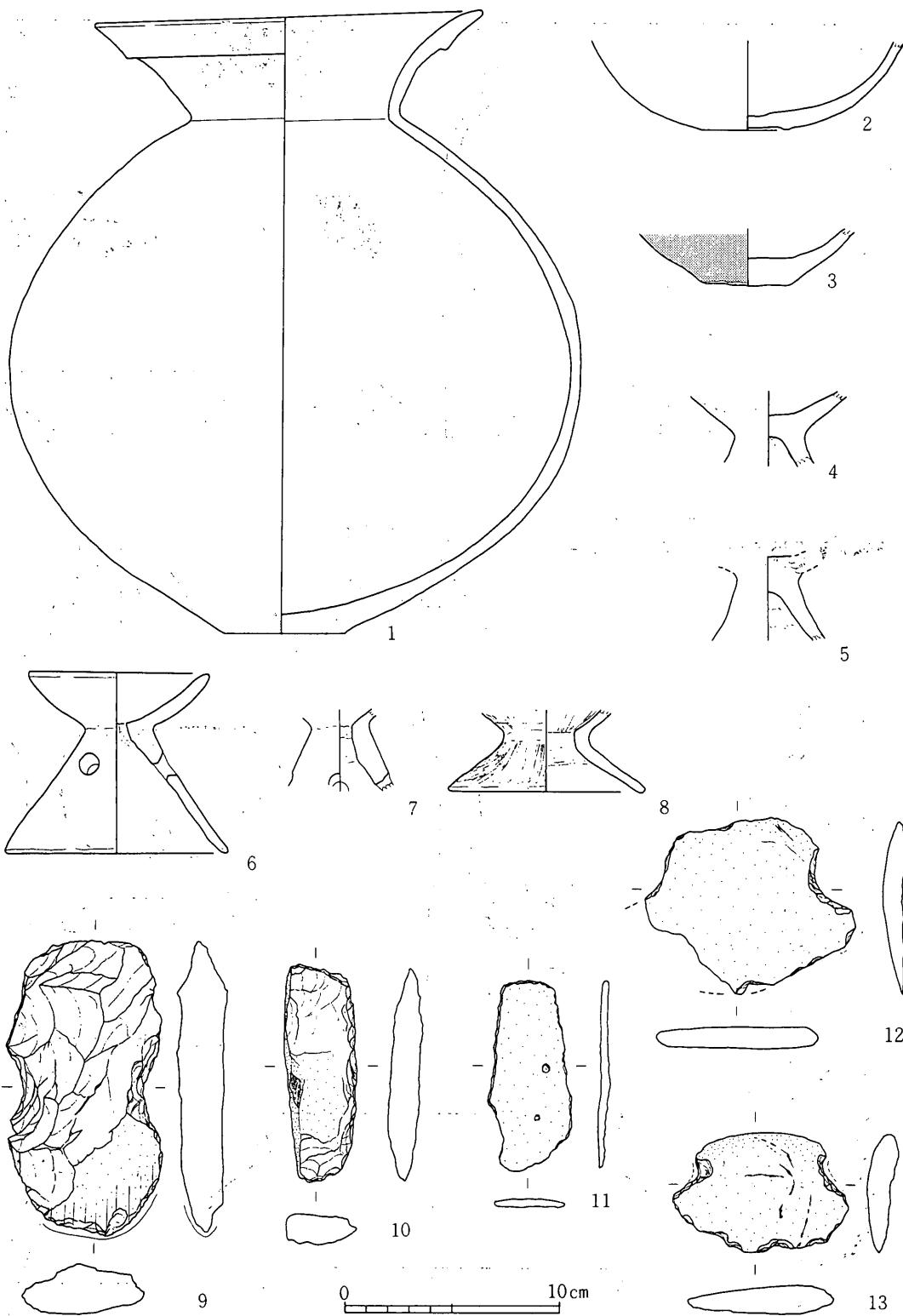
第9图 JYO 1号住居址(1~3)、2号住居址(4~18)出土土器・石器



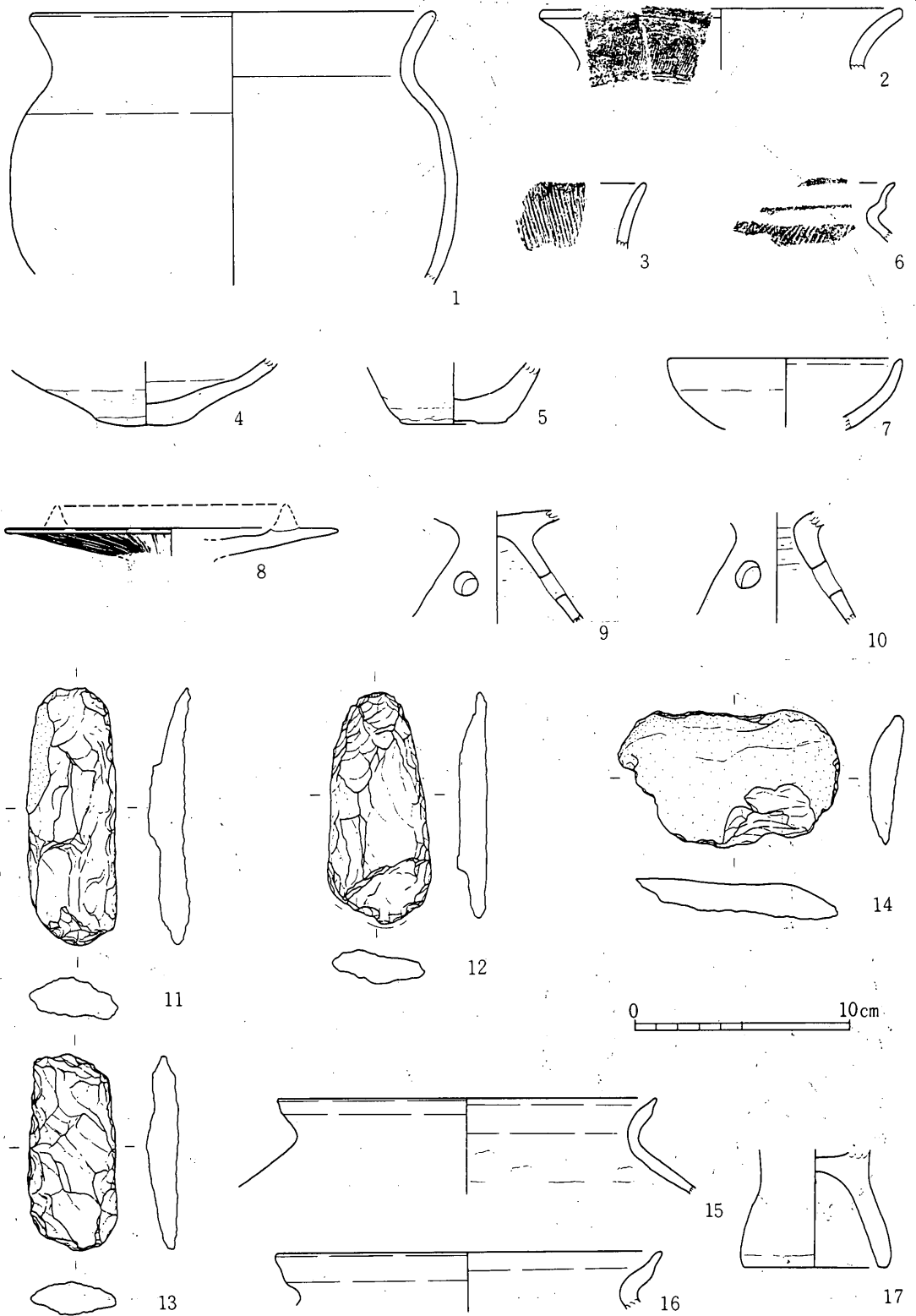
第10图 J.Y.O 2号住居址出土土器・石器



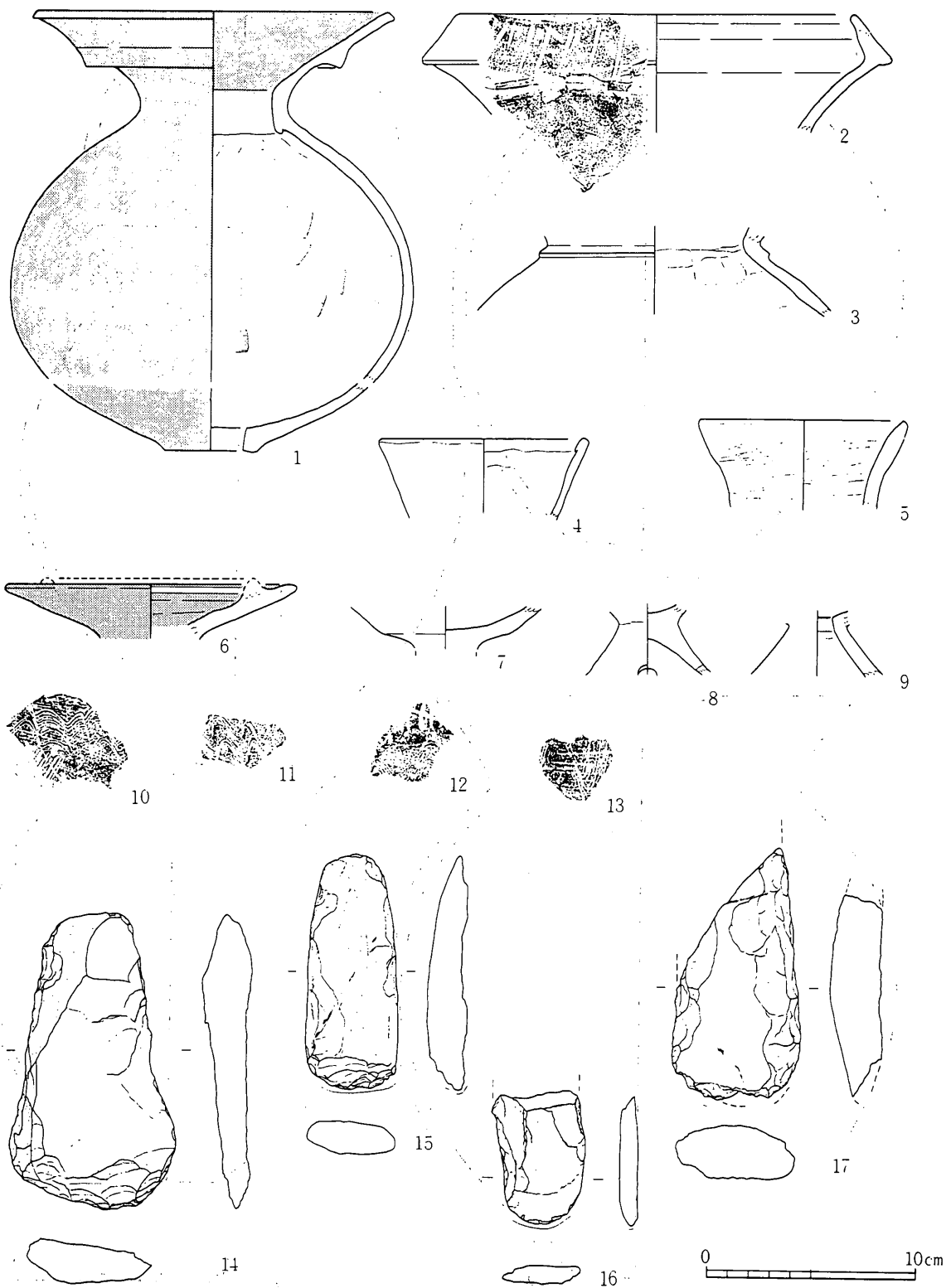
第11図 JYO 2号住居址(1~10)、3号住居址(11~18)出土土器・石器



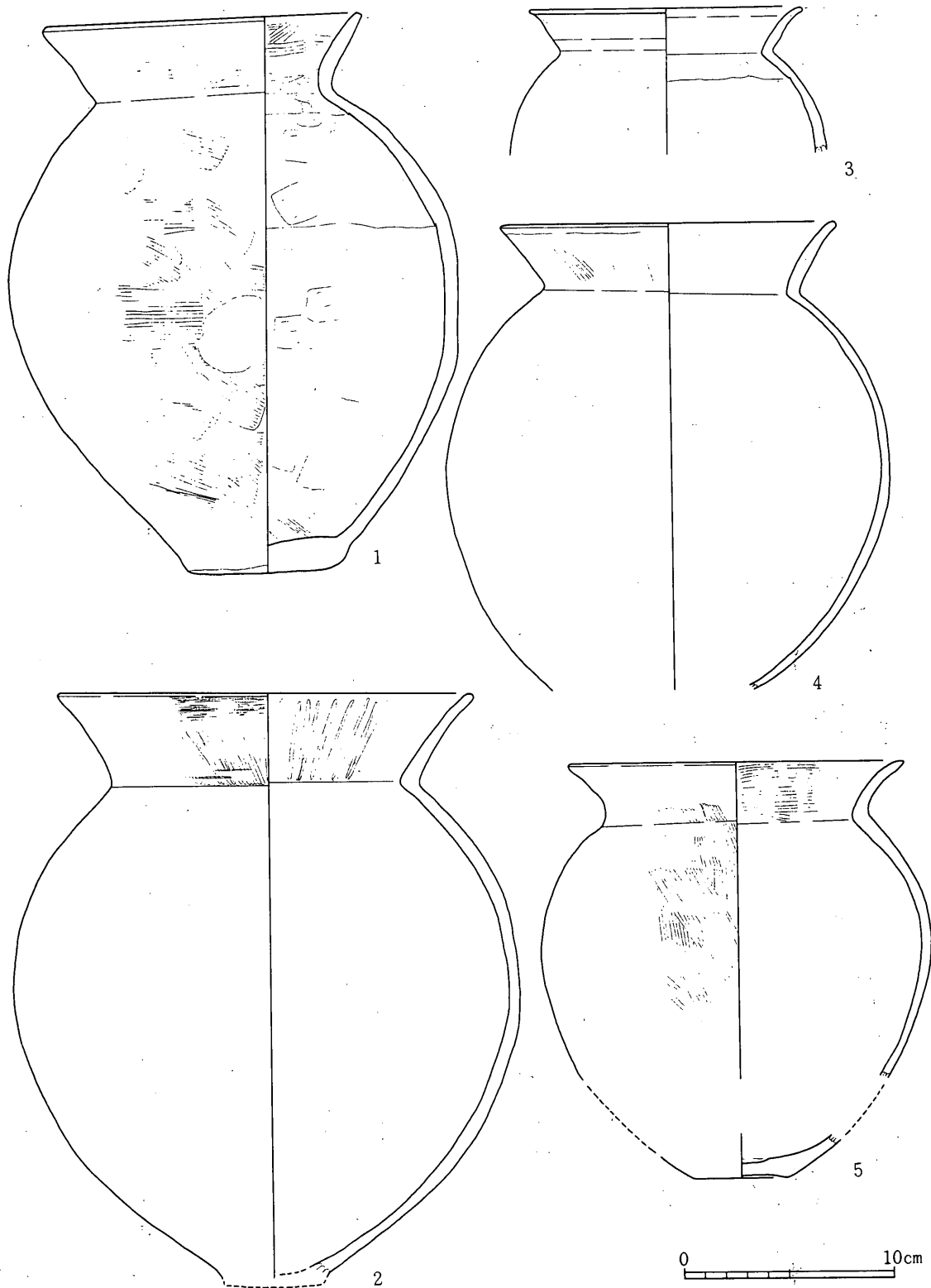
第12图 J·Y·O 3号住居址出土土器·石器



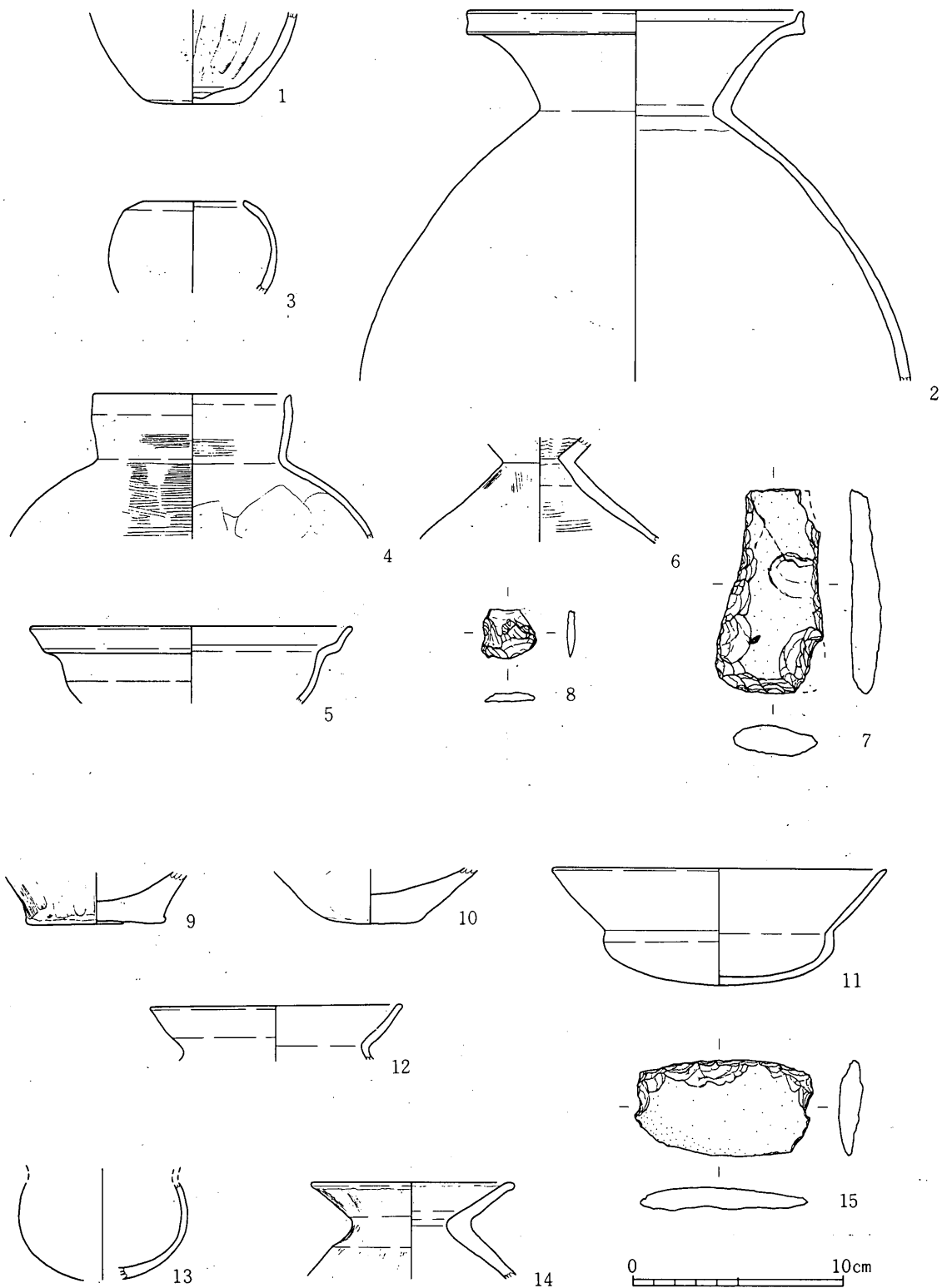
第13图 JYO 4号住居址(1~14)、7号住居址(15~17号)出土土器・石器



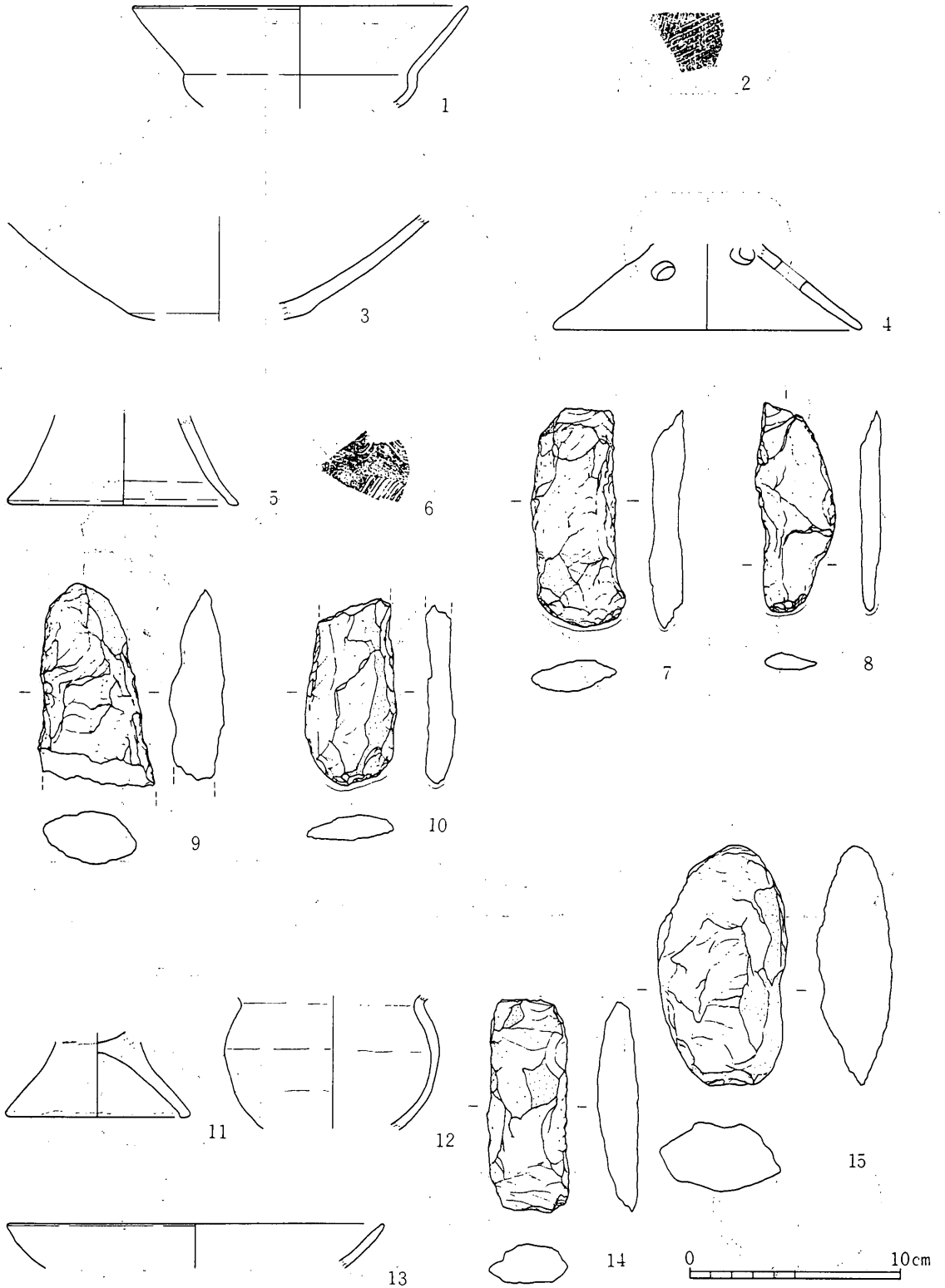
第14图 JYO 7号住居址出土土器・石器



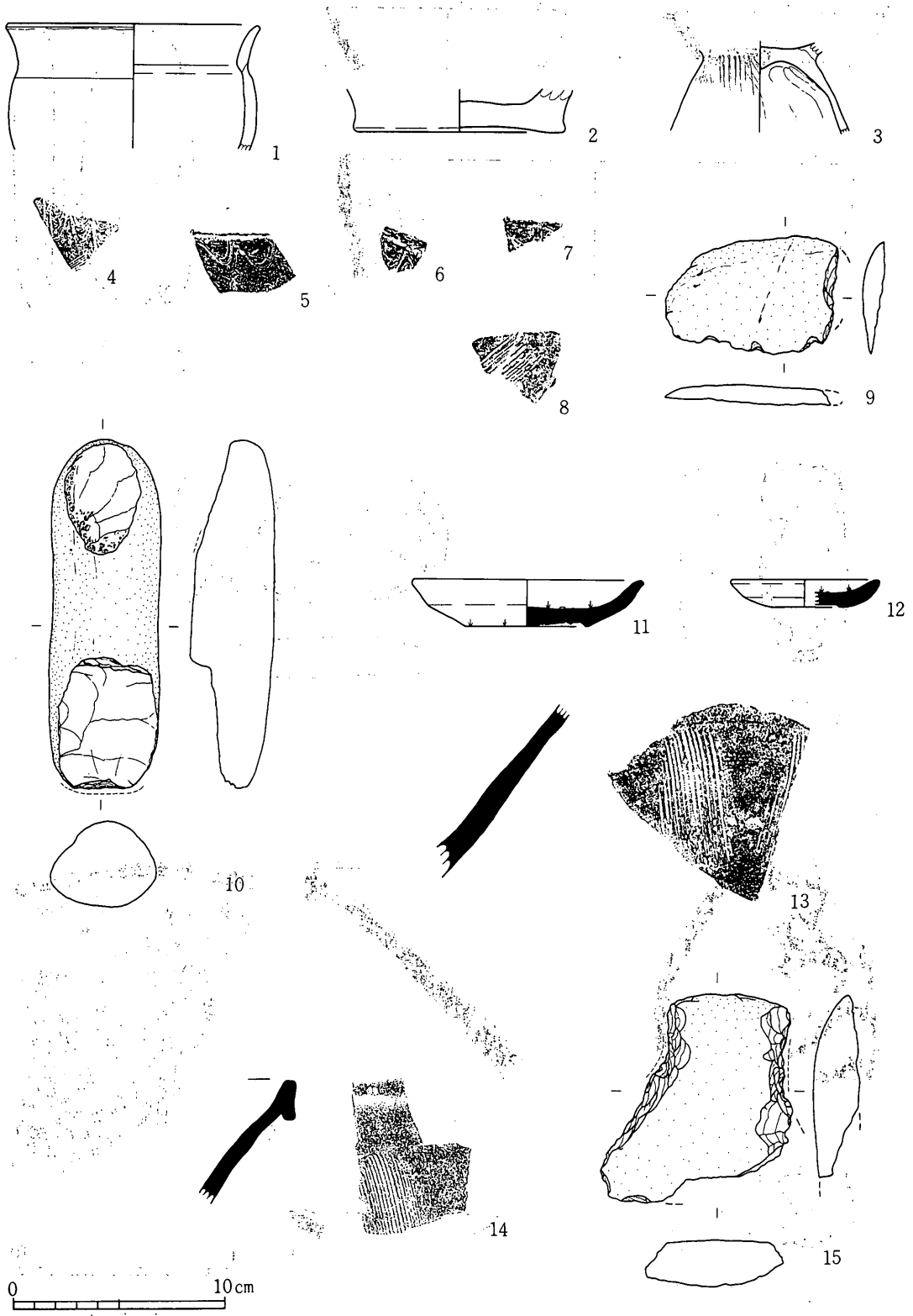
第15図 JYO 8号住居址出土土器



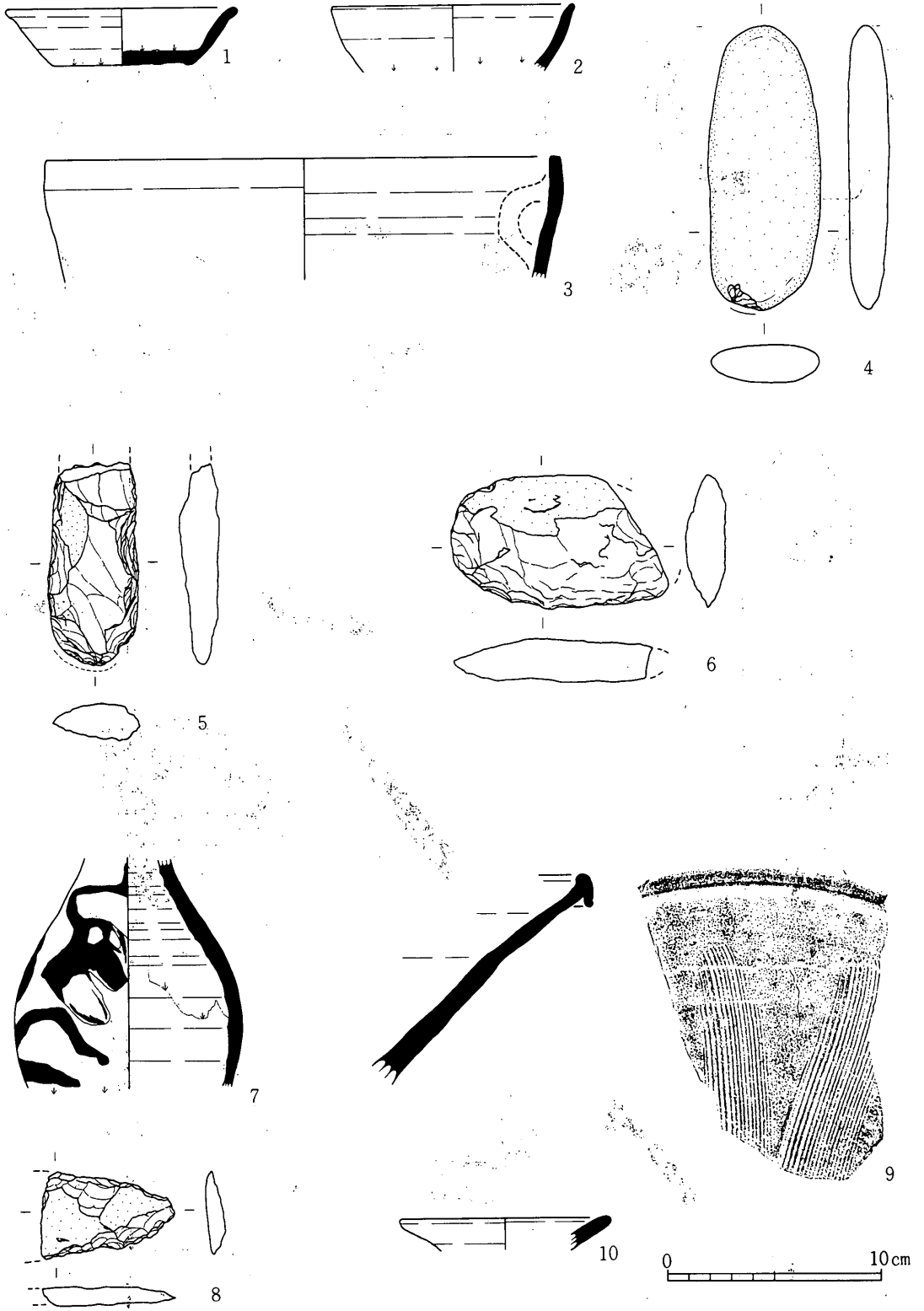
第16图 JYO 8号住居址(1~8)、9号住居址(9~15)出土土器・石器



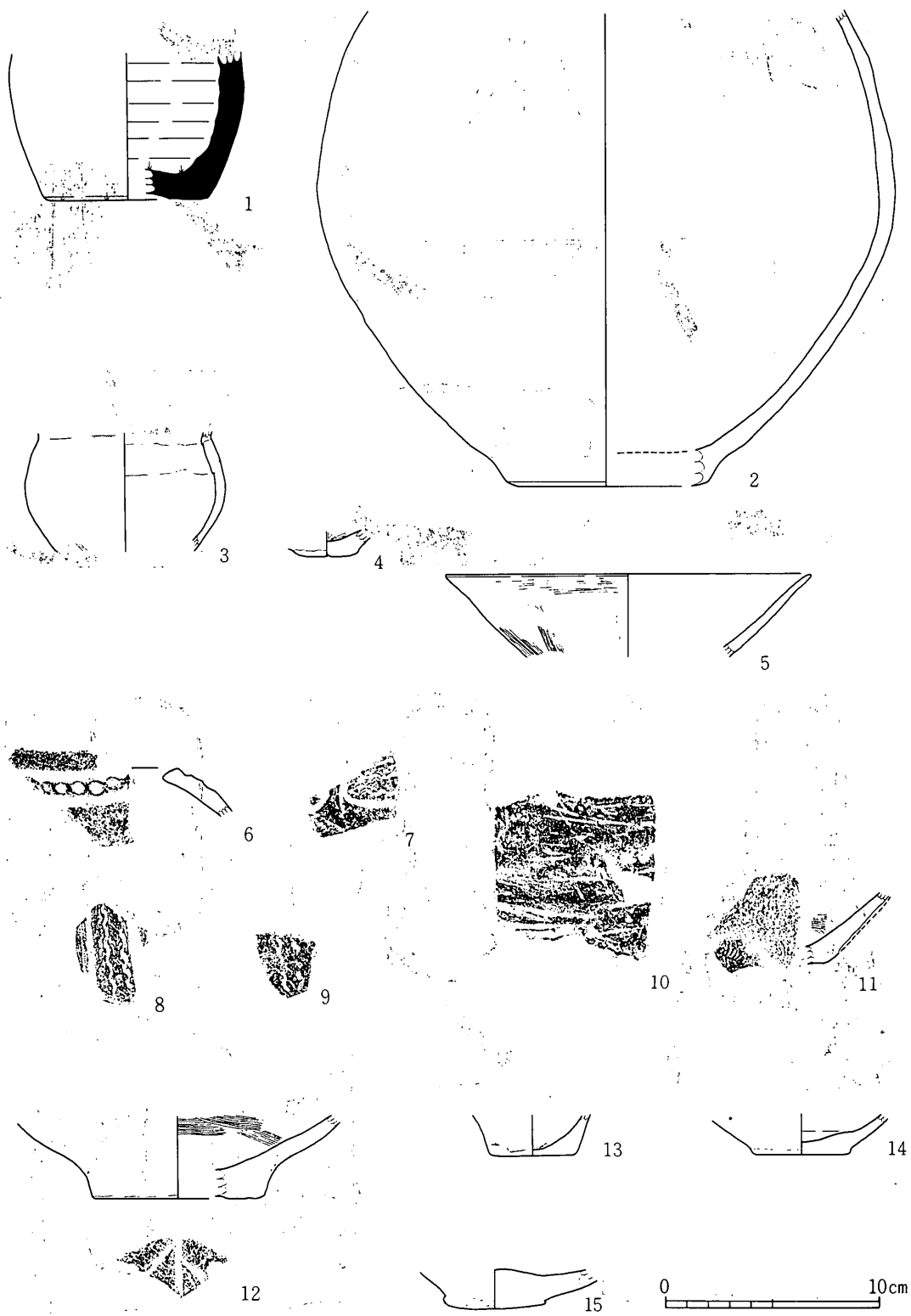
第17图 JY〇 10号住居址(1・2)、11号住居址(3~10)、土坑3(11~15)出土土器・石器



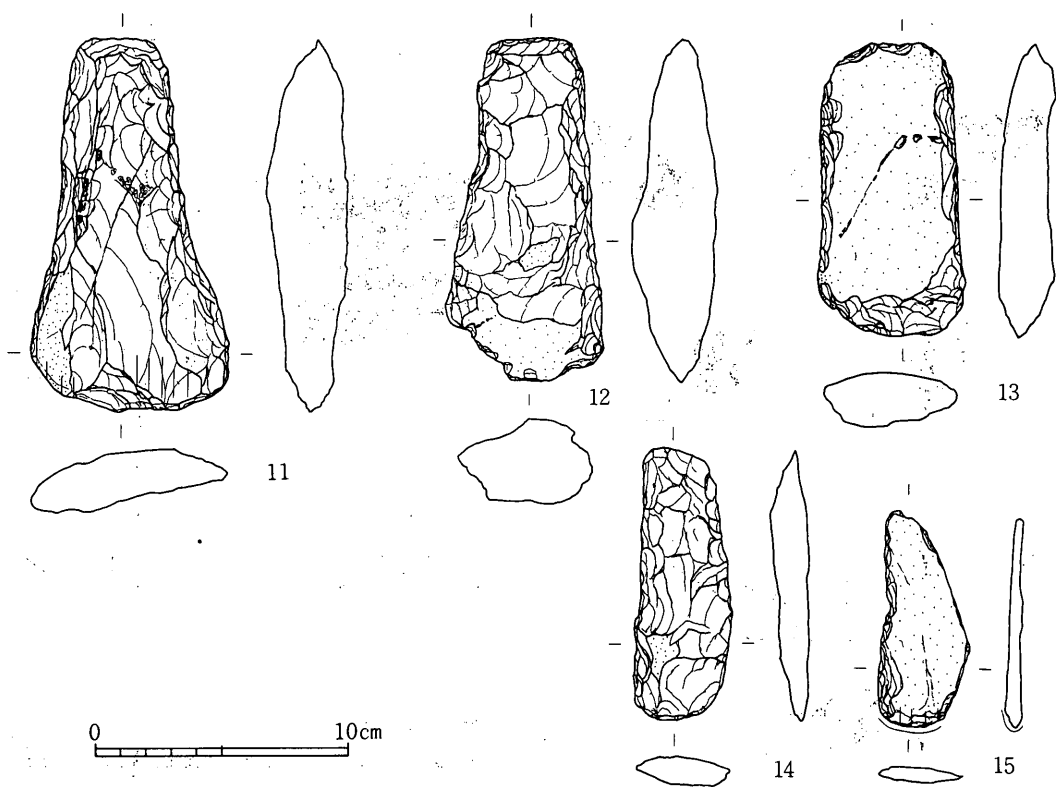
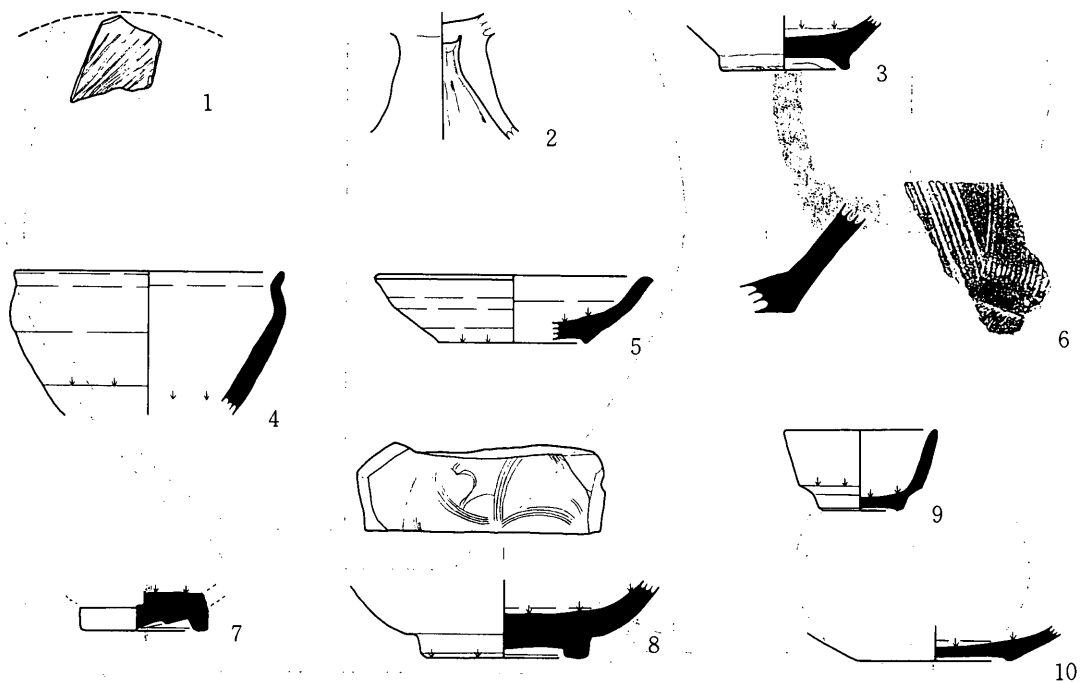
第18図 JYO 土坑5(1~9)、掘立柱建物址1(10)、方形竖穴(11~15)出土土器・石器



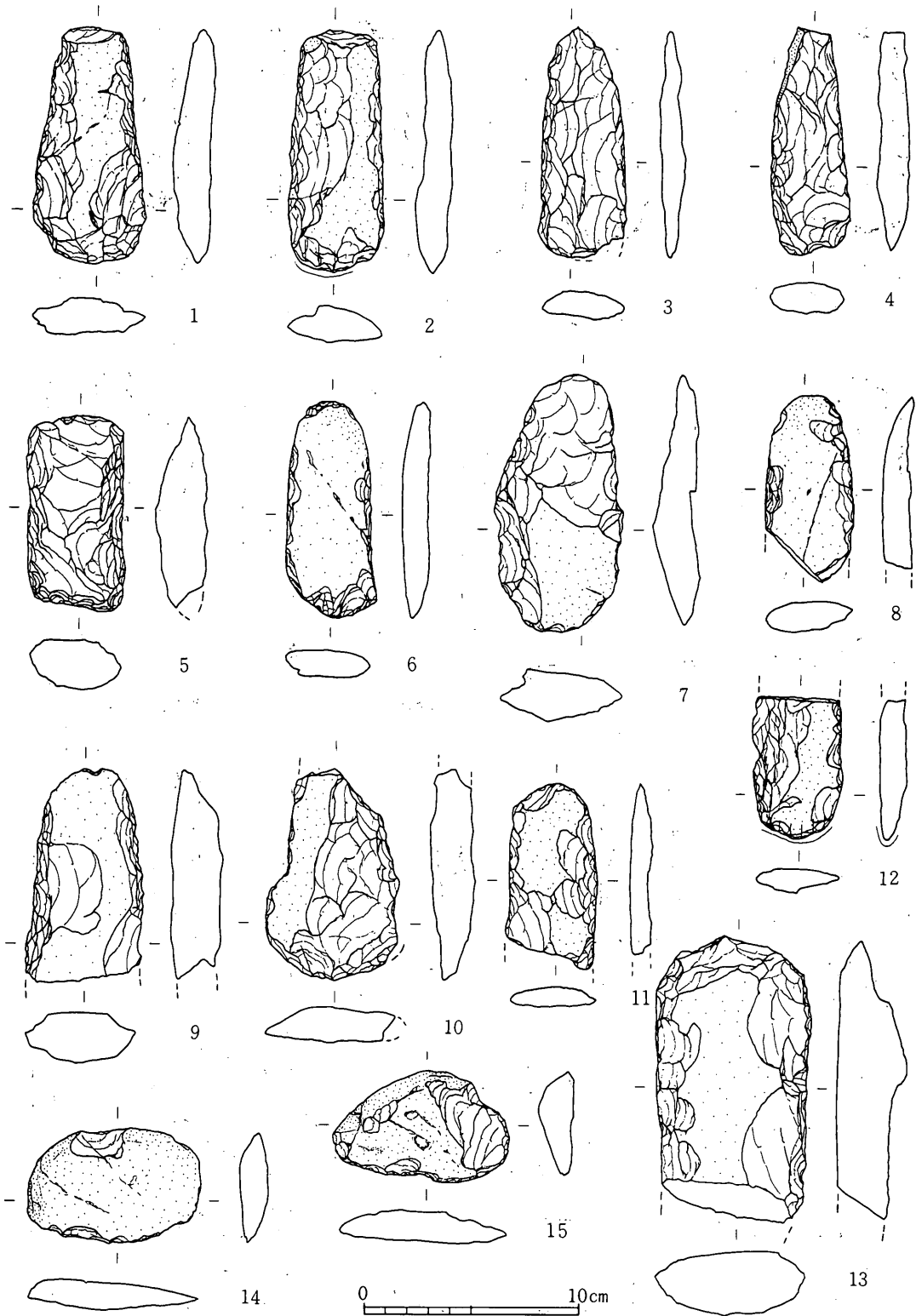
第19图 JYO 小竖穴1(1~4)、沟址1(5)、沟址2(6)、土坑2(7·8)、土坑6(9·10)出土土器·石器



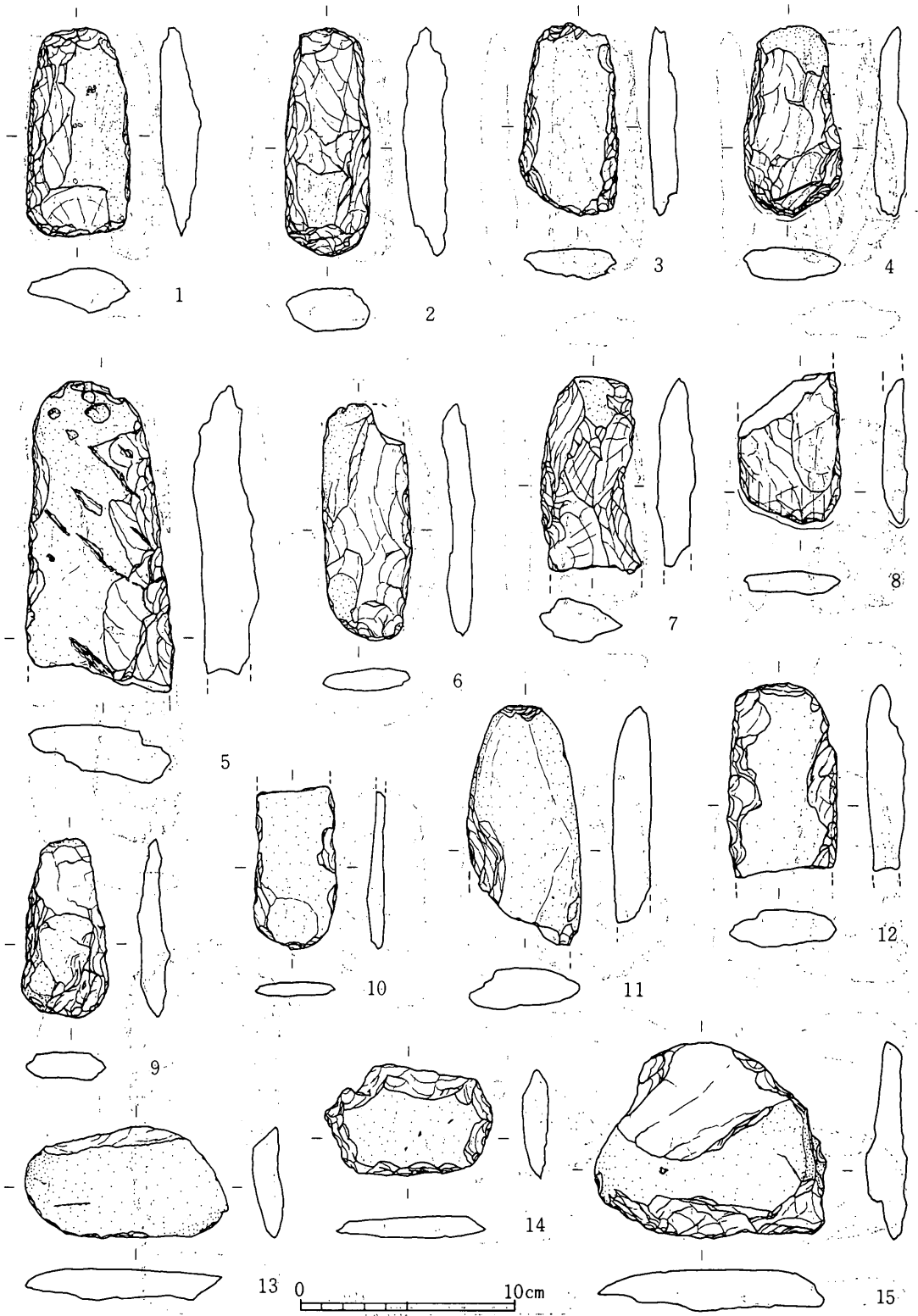
第20図 JYO : 土坑7(1)、土坑9(2~5)、遺構外出土土器・縄文時代中期(6~11)、
弥生~古墳時代(12~15)



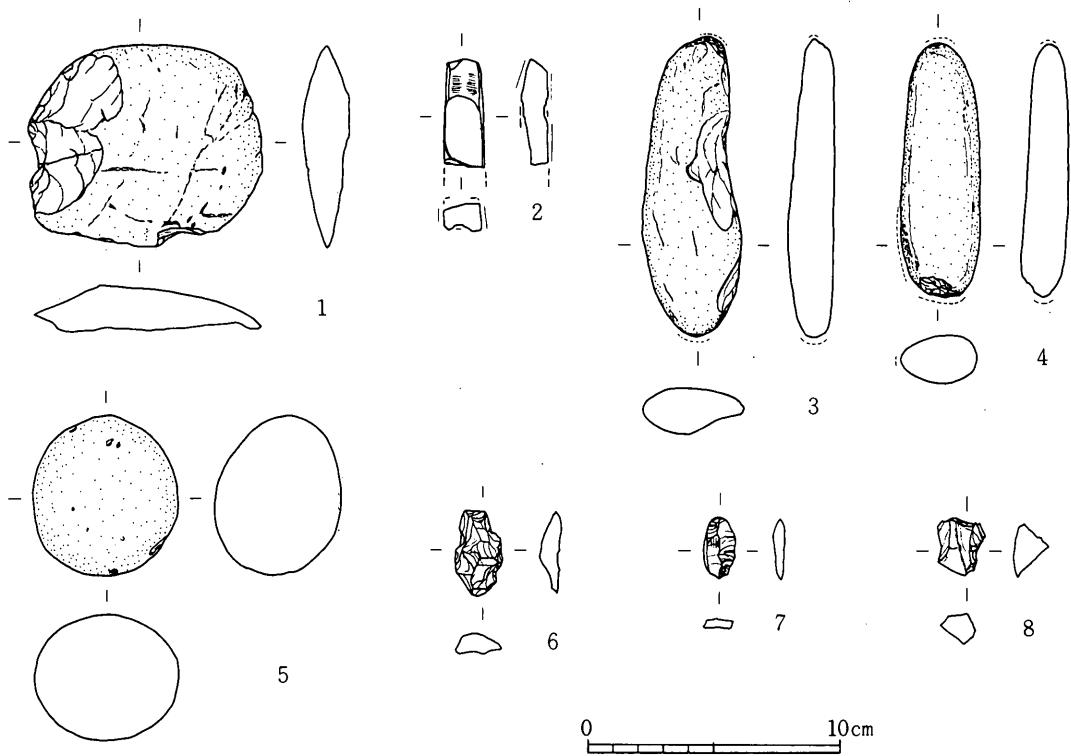
第21図 JYO 遺構外出土土器・石器 古墳時代1・2、中世3~8、近世9・10、遺構外11~15



第22図 J.Y.O. 遺構外出土石器



第23図 JYO 遺構外出土石器



第24図 JYO 遺構外出土石器

写真図版

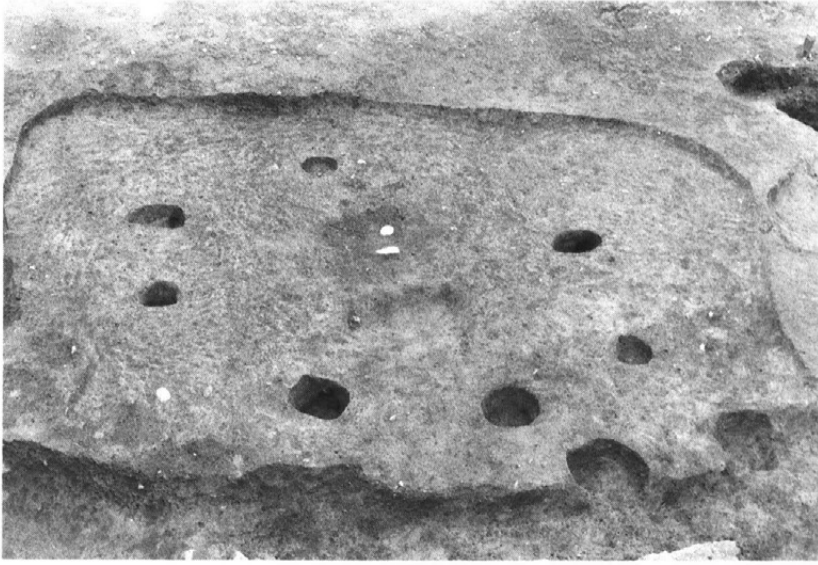
図版 1



城遺跡遺構分布状態(南西から)



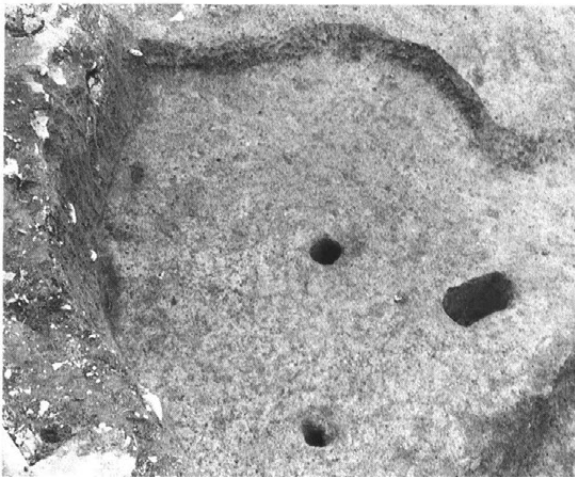
同上(北西から)



5号住居址



同上
炉址断面



6号住居址

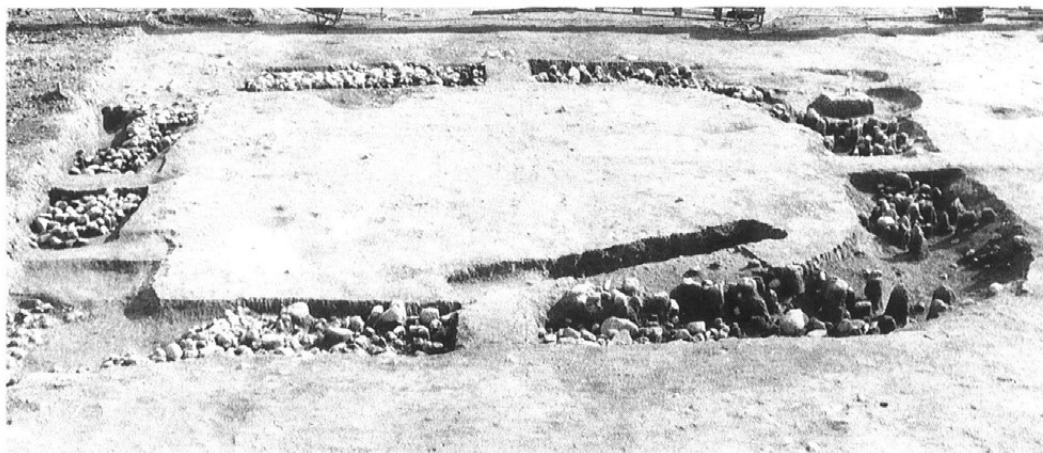
図版 3



6号住居址 炉

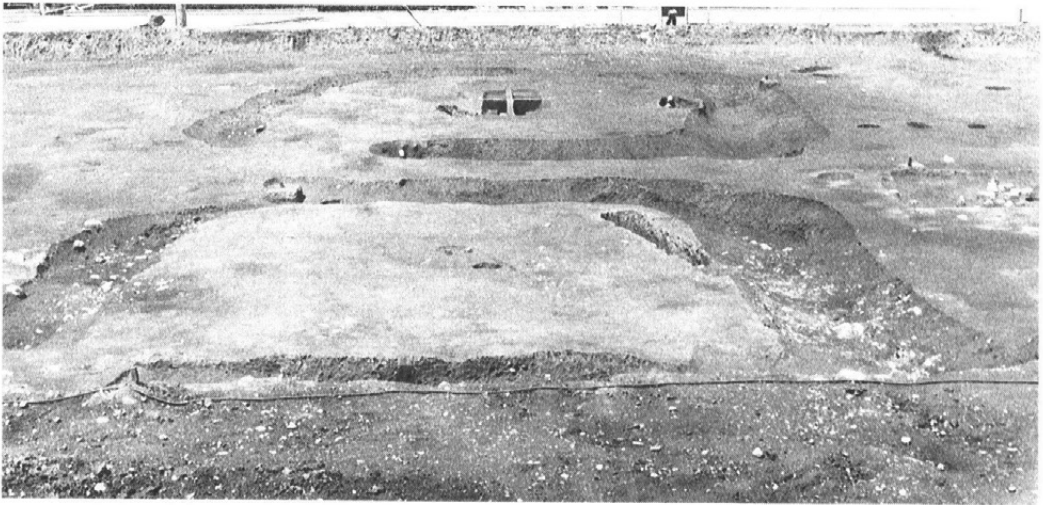
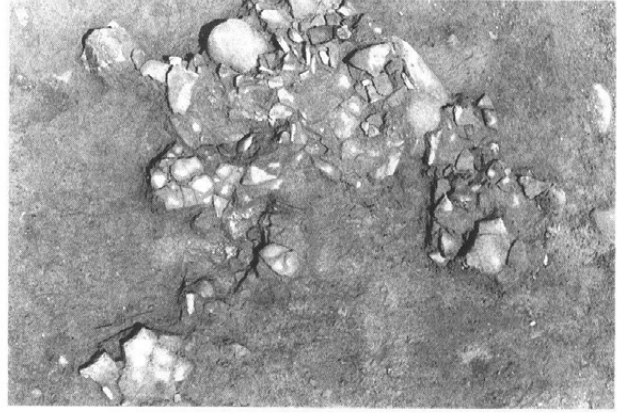


同上 断面

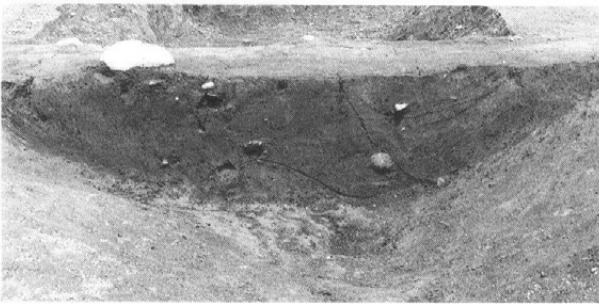


方形周溝墓 1 石の分布状態

方形周溝墓 1
遺物出土状態



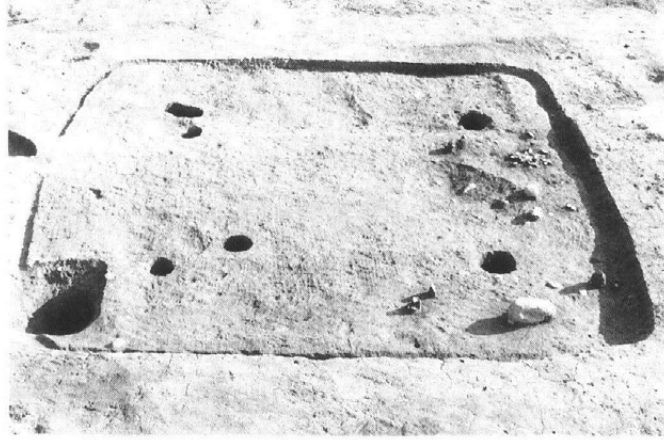
方形周溝墓 1・2 (1手前)



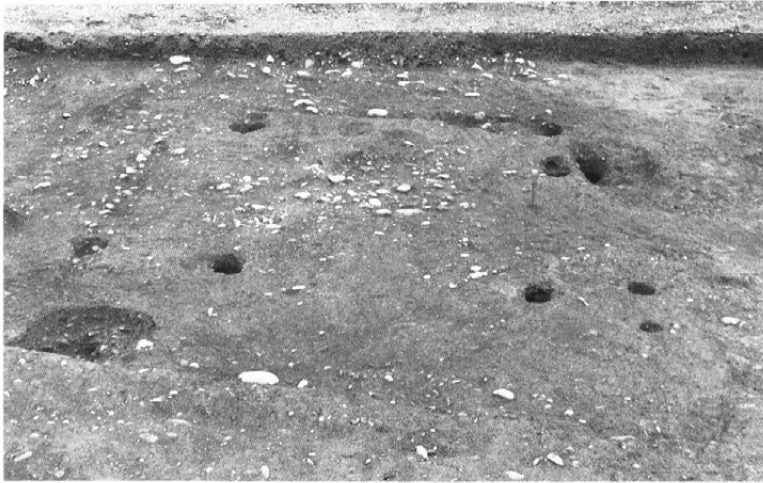
方形周溝墓 2 周溝断面

同左 土壤

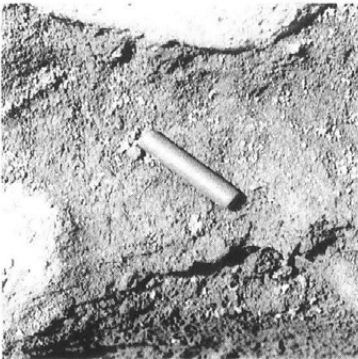




1号住居址



2号住居址

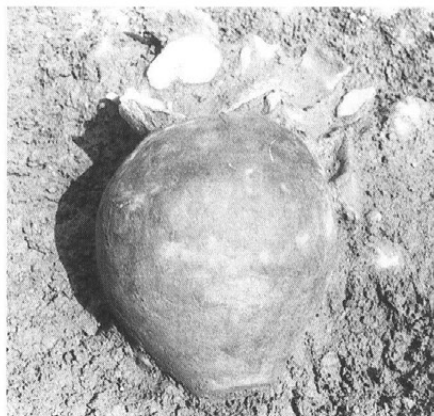


同上遺物出土状態

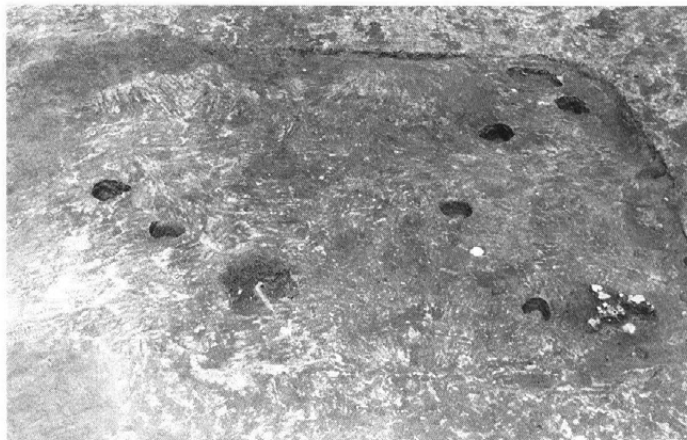
8号住居址



同上遺物出土状態



9号住居址



11号住居址



掘立柱建物址 1・2



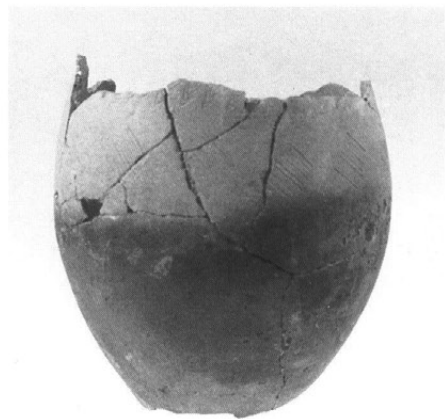
方形竖穴 1

土坑 6

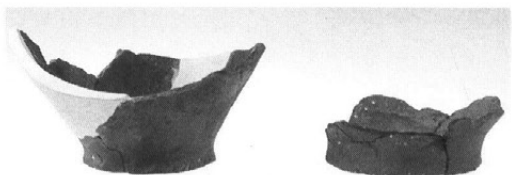
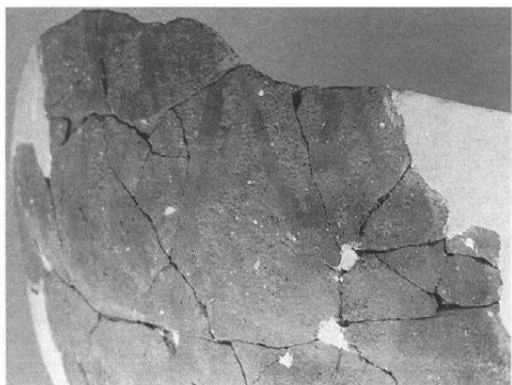
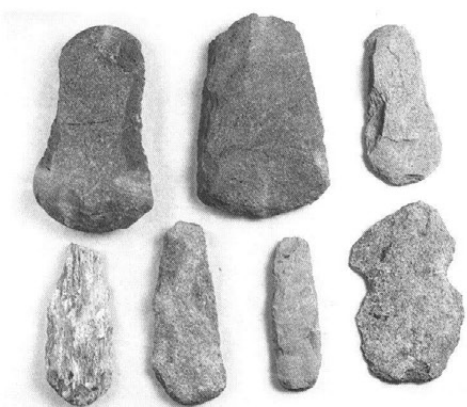
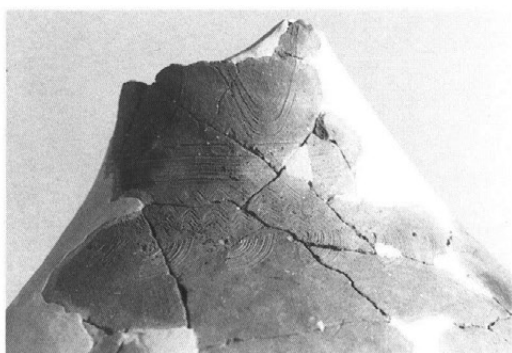
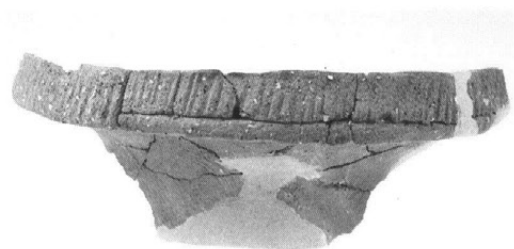




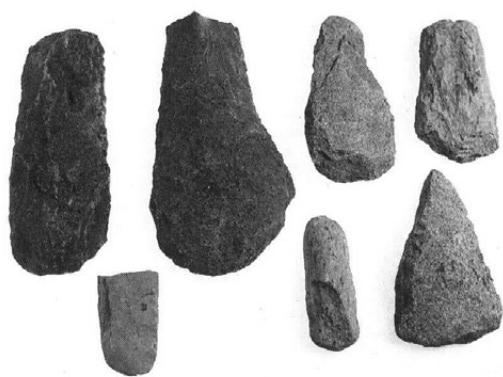
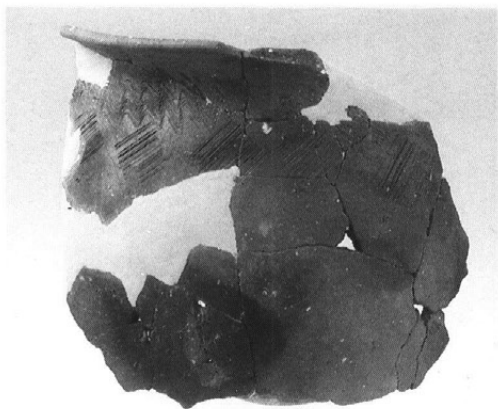
5号住居址出土遺物



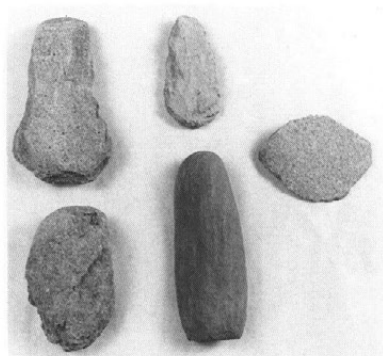
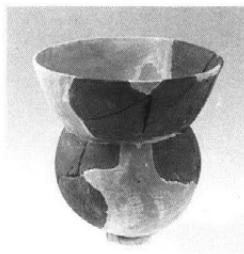
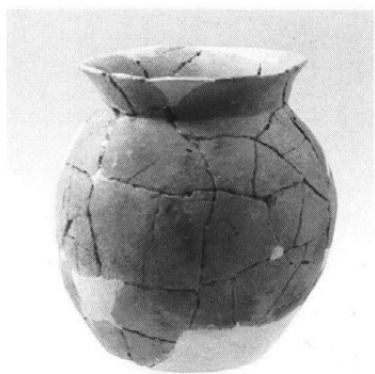
6号住居址出土遺物



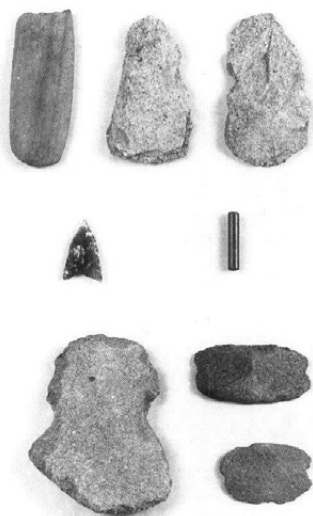
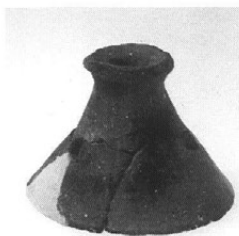
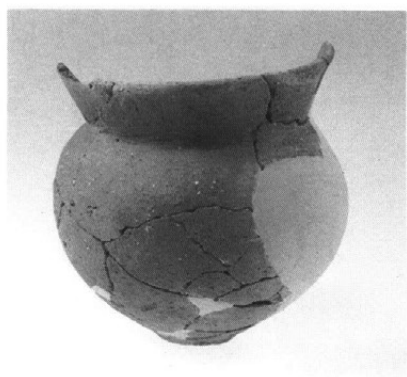
方形周溝墓1出土遺物



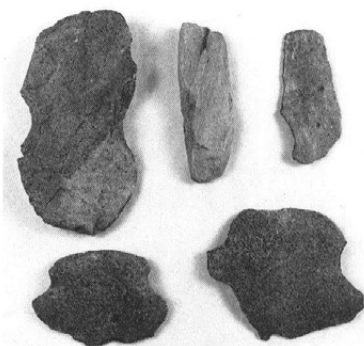
方形周溝墓 2 出土遺物



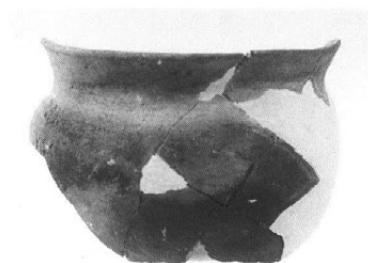
1 号住居址出土遺物



2 号住居址出土遺物



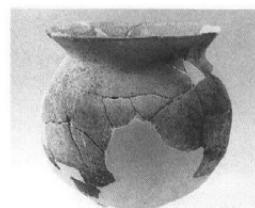
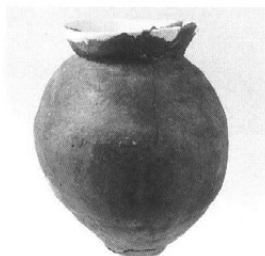
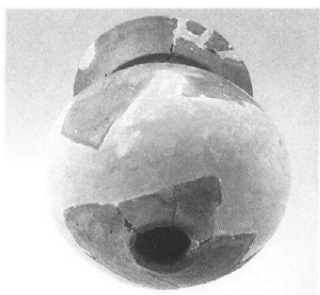
3号住居址出土遺物



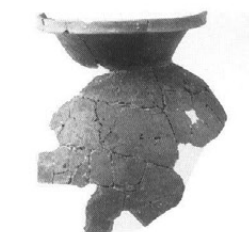
4号住居址出土遺物



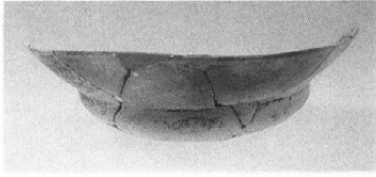
7号住居址出土遺物 同上の底部



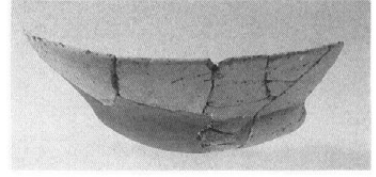
8号住居址出土遺物



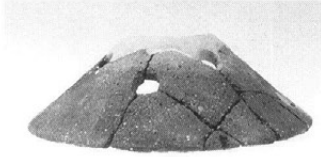
図版11



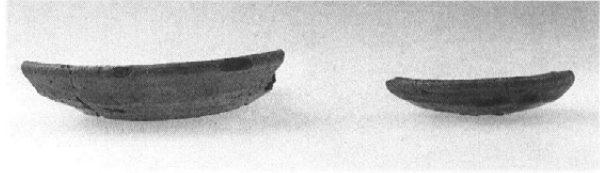
9号住居址出土遺物



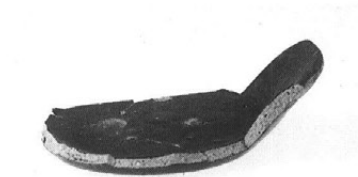
10号住居址出土遺物



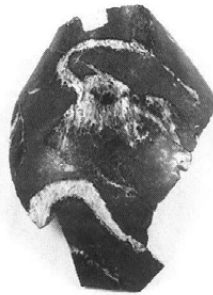
11号住居址出土遺物



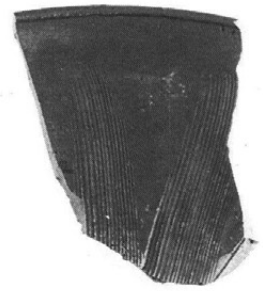
方形竖穴 1 出土遺物



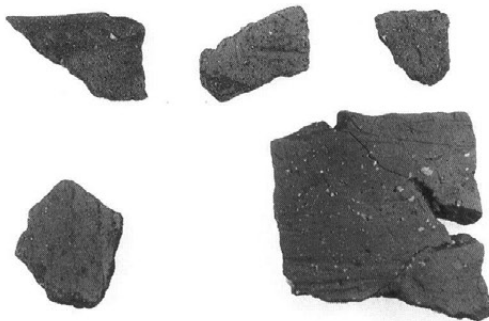
小竖穴 1 出土遺物



土坑 2 出土遺物



土坑 6 出土遺物

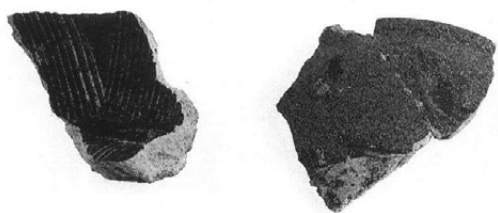


縄文時代土器

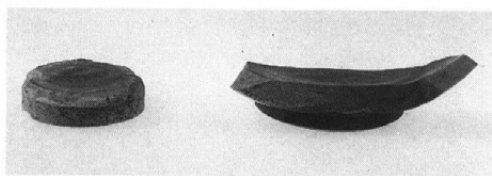


弥生～古墳時代土器

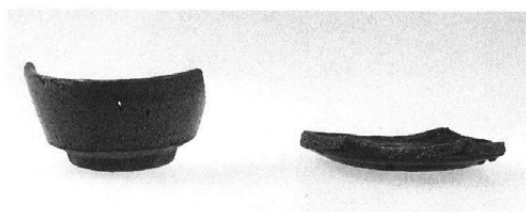
遺構外出土遺物



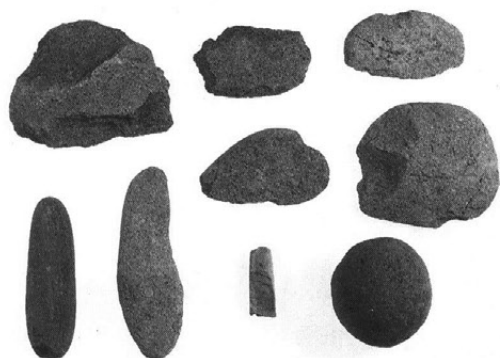
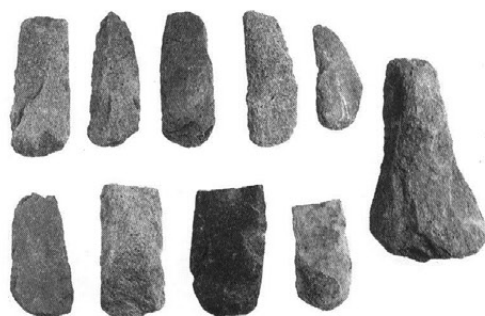
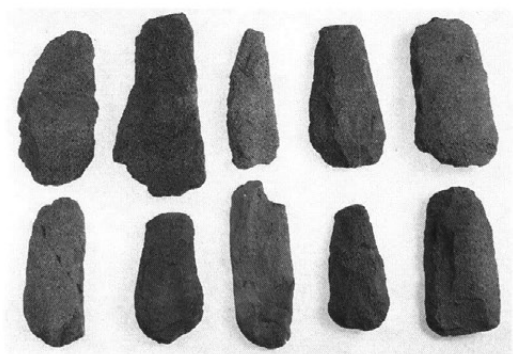
中世陶器



中国産青磁

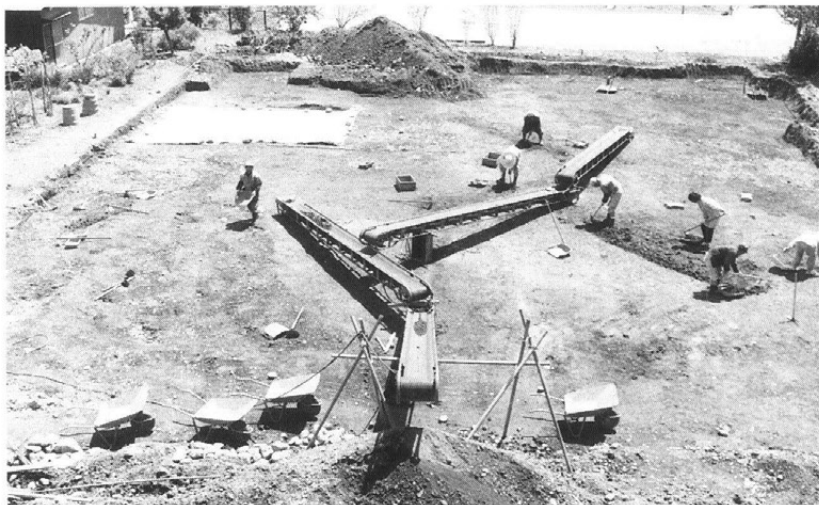


近世陶器



遺構外出土遺物

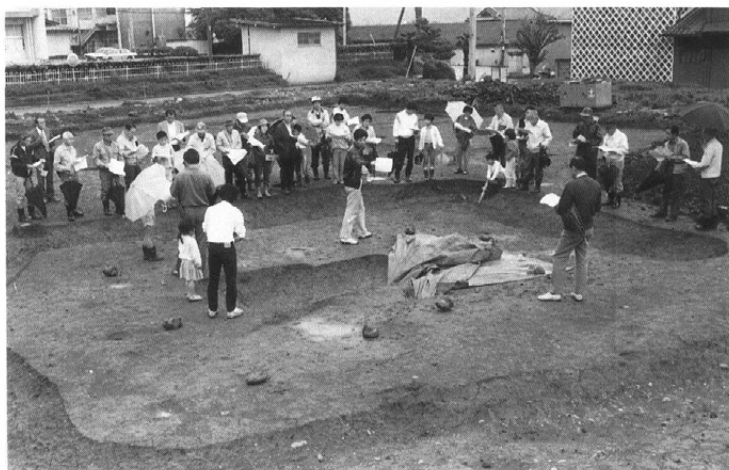
発掘調査風景



同上



見学会風景



城 遺 跡

飯田市松尾公民館移転新築に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1991年3月31日発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会
印 刷 飯 田 共 同 印 刷 株 式 会 社
(電) 23-3889
